

心の緒

札幌市立陵陽中学校 2 年 中島 璃子

“へその緒”とは、胎児と母体を繋ぐ器官のことです。これを通して母体から血液と一緒に胎児へ栄養が送られます。その“へその緒”には、治療の難しい患者を救うことのできる血液が流れています。いわば、胎児の命綱。ここから栄養が届けられなければ、胎児の成長が妨げられるなど、影響も少なくありません。母体と繋がることのできるのは、胎児にとって唯一の支えなのではないかと思います。

私達は、日本に住み、何らかの形で税に関わっています。消費税などで国に税を納めることはもちろん、学校教育や公共施設などで税の援助を受けています。そして、そのような税の中には、年金や生活保護の「社会保障制度」があります。「人が人を支える」税は、直接的な繋がりがなくても、間接的に誰かを支えることのできる、“心の緒”となるのではないのでしょうか。もし、私が学校生活を送る中で税の援助がないとすれば、今の素晴らしい教育を受けることができなかったと思います。全国の人と繋がることのできる“心の緒”に感謝して、大切にしたいと思いました。しかし、一方で税を滞納したり、不正受給をする人が居るのも事実です。理由は様々だと思いますが、そういった一部の人達のせいで、他の国民に負担がかかるのは少し違うのではないのでしょうか。税を納め、税の援助を受ける。税という形でたくさんの人と繋がる、それが税というものの大前提だと思います。日本に住む国民が、納得して税を納め、税の援助を受けることができれば、人と人の心と心とを繋ぐ“心の緒”が深まるのではないのでしょうか。日本には教育、交通、治安、食事など、誇るべき素晴らしいものがたくさんあります。そして、それらは税と深く関係していると思うのです。私達が今、その素晴らしい日本に住まわせてもらっているからこそ、私達のような世代が社会を支える立場となり、税で恩返しをしていかなければいけないと強く思いました。

私達のずっと前の世代から続いている“心の緒”。この時代だからこそ、すべきことをずっと次の世代に繋げていけたら良いな、と思います。

日本を救うために

由利本荘市立本荘北中学校 3 年 小川 涼子

なぜ、消費税は増税されたのだろうか。

これは容易に答えられる疑問ではないと思う。今年の四月、消費税が増税されるまでは連日騒がれていたのだが、今やテレビでも新聞でも増税の話題はあまり見かけなくなった。増税からしばらく時間が経ち、増税に対しての国民の関心が薄れてしまったのだろうか。来年行われるであろうさらなる増税も、それほど気にならなくなってしまったのだろうか。

だとしたらそれは、とても悲しいことのように思う。私自身、税についての知識は乏しいが、私なりに税を自分にとって身近にする努力をしている。私は、私たちがこのような豊かで安心できる暮らしができるのは、税金のおかげということを知っている。私たちがこうして学校で学べること、病院で治療を受けられることは、いたって普通のように思えるが、税があってこそ成り立つのだ。私たちは税金に助けられて生きているといっても、過言ではない。

だからこそ、皆に考えてほしいのだ。「なぜ今、消費税を増税したのか」ということを。

「人民の、人民による、人民のための政治」これは、アメリカの十六代大統領・リンカーンの演説の中で有名な言葉だ。さらに、奴隷解放宣言の手紙でリンカーンはこう言っている。「南北戦争における最大の目的は連邦を救うことであり、奴隷制度を救うことでもほろぼすことでもない。奴隷を自由にしないで連邦を救えるならそうする。奴隷を自由にすれば連邦を救えるならそうする。私が奴隷解放をしようとするのは、連邦を救うのに役立つと信じているからである。」と。後者は一部を要約したものだが、これらの言葉を聞いたことがない人はおそらくいないだろう。私は、このリンカーン大統領に近い考えで増税を受け止めている。今回の消費税増税における最大の目的は、日本を救うことであり、政府が増税を決行したのは、日本を救うのに役立つと信じているからだ。言いすぎだと思う人もいるかもしれないが、私はそれを信じたい。この増税が私たちを、日本をより豊かにしてくれると。今、私は税を納める立場というより、使わせてもらう立場だ。その立場にあるということを忘れずに、税金に、税金を納めている方々に感謝して暮らしたいと私は思う。そして私も、ほんの少しだが消費税で税金を納める、小さな小さな納税者だ。この国を救う一員であると思うと、なんだか幸せな気持ちになる。皆が、国民全体がこんな気持ちで税を納めることができれば、日本はきっと幸せな国になれる。皆さんは見てみたくなさうだろうか、幸せな国、日本を。そのために納税してはどうだろうか。

日本は今、「人民の、人民による、人民のための増税」を行っているのだ。だから私たちも、税に関心を持ち続け、日本の行く末を見ていかなければならない。次世代社会を担う者として、日本を救うために。

夏休みに「二〇四〇年厳しい未来図」という新聞見出しを見て驚き、記事を読んでみた。人口減が進む近未来は、納税する現役世代が急減し医療や介護の水準維持が困難となる為、現役世代の税金負担は重くなり、現役がお年寄りを一対一で支える社会に向かいそうだという。消費税率が四月に上がった時も今後の生活は厳しくなるという論調のニュースをよく聞いたことを思い出し、暗い気分になった。「これから税金はどんどん上がるみたいだね。」思わず発した私の言葉を聞いた祖母が言った。「若い人達は本当に大変だね。でも、税金のお陰でおじいちゃんも私も助けられていて、ありがたいと思うよ。」

去年の冬に危篤状態に陥った祖父。医師の献身的な治療により一命を取り留めた。今も自律呼吸が困難だが、丁寧で親切な看護のお陰で、病院で穏やかな時間を過ごすことが出来ている。二十年近く人工透析を続けている祖母。透析によって祖母が生き続けられているから、私は今、こうして祖母と話が出来た。

医療や介護に関わる社会保障費は、人命や生活の質に直結するものだが、その多くが税金で支えられている事には気づきにくい。しかし、祖母の言葉が、その事実 私の目を向けてくれた。資料を調べてみると、様々な歳出の中で社会保障関係費が一番多い。少子・高齢化が進めばその社会保障費が益々膨らむという事から、今後現役世代の負担が増すという予想の根拠を理解する事ができた。また、消費税率上昇の必要性にも納得できた。

しかし、理解や納得の一方で、私達世代の将来の負担増加という事に対する不安感や気持ちの重さは軽減されなかった。納税を「重い負担」と考えたら、これから将来にわたって重い責任と義務を背負うという、税金に対する負の意識はむしろ強まったからである。「将来の税金の事を考えると気が滅入るなあ。」少し不満げに言うと、母が話をしてくれた。「お年寄りが今の日本を作ってくれた事に私達は感謝しないとね。一生懸命働いてきたお年寄りが安心して暮らせるようにする事は大切だし、やりがいのある事だと思うよ。彩子も、おじいちゃん達に何かしてあげてお礼を言われたら、嬉しいでしょう？」

はっとした。私は、祖父のお見舞いや祖母の家事の手伝いに対して全く負担を感じない。むしろ、祖父母の笑顔や感謝の言葉に触れると清々しさや喜びを感じる。税金はお金という「物」だが、その活用は「人」が「人」に対して必要な支援をする行為である。そう考えると、税金は命や生活を保障し人の笑顔を生む、血の通った温かいものなのだと思えた。

納税にただ負担を感じるのではなく、その意義を理解しその恩恵に想いを馳せることで、納税に対して前向きな気持ちになれるように思う。自分が働き納税する事が社会の幸せに繋がると思うと、将来が少し楽しみになった。

タカモリさんのザッソンコウジョ

会津若松市立第二中学校 3 年 福原 諒

「あー、やっと終わったよ。」福島市から帰ってきた父が、その夜、笑顔で母と乾杯した。「長かったわね。」と、母もうれしそう。テーブルの上には「金〇〇万円也」と書かれた領収書が一枚。去年の秋のことだった。

父の転勤で会津で暮らしているが、福島市にある自宅が東日本大震災で壊れてしまっていた。応急処置はしたが、母の病気入院とその後の通院が長く続いたため、本格的な修理が延び延びになっていた。半年前に始まった工事がようやく完了し、この日、工務店への支払いも全部終わったのだ。

ビールを飲み干した父が「タカモリさんのおかげで今回の修理代がやりくりできて、助かったよ。」と言。「ザッソンコウジョでしょ。あのタカモリさんの。」と母。「タカモリさん?」「ザッソンコウジョ?」思わず、姉と顔を見合わせた。「じゃあ、ちょっと説明しましょうか。」。ビールでご機嫌になったのか、父はグラスを片手に話し始めた。

震災から半年後、父の勤務先に会津若松税務署から「震災特例法において雑損控除の適用により・・・」という長いタイトルのお知らせが届いた。僕の中学校の西隣にその会津若松税務署がある。父が窓口で自宅の震災被害を相談したら、個人課税第一部門のタカモリさんという人がとても丁寧に説明してくれたそうだ。家を買った時の契約書や被災証明書などを提出して「雑損控除」の手続きをすれば、前の年に納めた所得税が戻って来るとのこと。一週間後、父は必要な書類を揃えてまたタカモリさんの窓口に行った。それから十日後、父の預金通帳に「国税還付金」が振り込まれた。そして父は、そのお金を壊れた福島の家を修理代にあてたのだ。

こんなに身近な形で税金が我が家の危機を救ってくれたとは、両親から話を聞くまで知らなかった。「それにね、私の入院費用の自己負担額が少なくて済んだのも、あなたの教科書が無償で配られるのも、みんな税金のおかげなのよ。」と母は言う。「税務署が還付手続きの広報や対応にあんなに力を入れているなんて、当事者になるまで知らなかったよ。」と父も続けた。だから、親身になって手続きを教えてくれたタカモリさんの名前を両親はずっと覚えていたのだ。国民の三大義務のひとつである「納税の義務」。父がその義務をきちんと果たしていたから、国も税金を還付する制度で我が家を助けてくれたのだ。

国や地方自治体の機能を動かし、人々の社会生活を支える原動力となる「税」。少子高齢化が進み労働力人口が減少する一方で手厚い社会保障が求められるなど社会の経済の状況が大きく変化している今だからこそ、この「税」の仕組みや役割を正しく理解してそれぞれの義務を果たすことが大切なのだと思う。会津若松税務署の正面玄関に掲げられている「この社会 あなたの税がいきている。」という標語が、通るたびに目に飛び込んで来る。

税で作る幸せな暮らし

佐野市立田沼東中学校 2 年 笠原 千暖

先日、病院を受診した時のことです。治療が済み、受付に呼ばれた母は治療費を払いませんでした。不思議に思い、母に尋ねてみると、

「佐野市には、子ども医療費助成制度というのがあって、佐野市が医療費を助成してくれるから大丈夫なんだよ。」

と教えてくれました。佐野市には、中学三年生までの子どもは、病気やけがで健康保険が適用になる診療を受けた場合の医療費や自己負担分を市が助成する制度があります。これなら安心して、医師の診察を受けることができます。こうした制度を支えているのは、税金であるを知り、私たちの生活に関わっている税について調べてみたいと思いました。

そんな時、ふと教科書の裏表紙の、「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」ということばが目にとまりました。私たちは、毎日当たり前のように学校に通い、授業を受けています。また、夏にはクーラー冬には暖房が付き、快適な環境の中で学校生活を送ることができます。これは、税金の支えがあるからです。税というと、中学生である私には、あまり関係のないことのように感じますが、中学生である私も、いろいろな物を購入するときに、消費税を納めています。また、学校での生活など、税が私たちの生活に深く関わっていることを実感しました。

さらに税について調べてみると、消費税の他に所得税や酒税などの国税、住民税や自動車税など市町村や都道府県に納める地方税などさまざまな税があることが分かりました。そして、国民から納められた税金は、警察や消防の仕事、救急隊員による救命活動、災害の復興活動、図書館や公園、道路などいろいろな公共施設の建設など、私たちの生活のほとんど全てのことに関わっていることに気づきました。また、急速に少子高齢社会を迎えている日本の、現在そして将来を支えるためにも欠かせないものであることが分かりました。

日本国民の三大義務の一つである納税。税金を納めることで、私たちの生活を豊かに安全でよりよいものにすることができます。そのためには、納められた税を正しく有効に使っていくことが必要であり、私たち国民一人一人が、納税の意義を正しく理解し、意識して生活することが大切だと思います。日本は幸せな国です。教科書に書かれてあるように、その幸せな日本の未来を担うのは私たちです。その期待に応えられるよう、そして、両親をはじめ一生懸命働き、税を納めてくださっている全ての国民の人々に感謝の気持ちを忘れず、みんなが笑顔で幸せな国を築いていけるよう、しっかりと自分の責任を果たしたいと思います。

小さな力の結晶でみんなの笑顔を

大泉町立南中学校 3 年 中村 友香

夕方、学校から帰って来ていつものように、

「おばあちゃん、ただいま。」

と、元気良く玄関のドアを開けた。いつも聞こえる祖母の返事がなかったので、私は祖母の部屋を見に行った。いつもきれいな祖母の部屋は、驚くほど散らかっていた。祖母は私の顔を見ても、分からないようだった。

「おばあちゃん、どうしたの。」

声をかけても、反応がない。何か変だ、とその瞬間感じた。私は、あわてて母に電話をかけた。父と母が駆けつけるまでの間、私はとても不安で、待っている時間がとても長く思えた。母が帰宅すると、すぐに救急車を呼んだ。

祖母は脳梗塞だった。部屋が散らかっていたのは、薬を探していたらしい、と母から後になって聞いた。祖母はしばらくの間、入院をすることになった。

そんなとき、テレビで税金のことを説明する番組があった。私たちが納める税金は、どのようなところで使われ、どのような役割を果たしているのか、漠然とした知識しかなかった私は、一步踏み込んで、具体的に知る機会となった。私たちが健康で文化的な生活を送るために、個人ではできない様々な仕事を国や都道府県・市町村で行っている。このような公共サービスや公共施設を提供するためには、多くの費用が必要になる。その費用をみんなで出し合って負担しているのが税金だ。

もしも税金が無かったら、祖母の乗った救急車が有料になって、医療費も自己負担になったら、あの様にスムーズに対応できただろうか。救急車を呼ぶとき、入院の手続きをとるとき、検査をするとき、一つ一つのことをするたびに、迷ってしまうのではないだろうか。

祖母が退院してきて、お風呂場に手すりをつけたり、療養のために、ベッドも設置した。リハビリのために、デイサービスを利用するようになった。親切的な介護のヘルパーさんや看護師さんのお世話になり、施設も設備が充実していて、祖母は喜んで通っている。何よりも嬉しいのは、たくさんのお友達ができたことだと、祖母は笑顔で話してくれた。最近は家でとれた野菜や、お菓子を持って、お友達に配っているようである。毎日楽しそうな祖母の様子を見ると、私まで、嬉しくなってくる。

毎日の生活が、明るく楽しく過ごせるのは福祉、医療、教育、公共事業など、身のまわりのことが充実していなければならないと思う。そのためには、私たち一人一人が、これらのことを支えているんだという自覚、意識をもって、納税をしなくてはならないと思う。一人の力でできないことが、みんなで力を合わせれば、大きな力になるはずである。みんなの笑顔は、この小さな力の結晶であると信じている。

税のおかげで

三条市立下田中学校 3 年 松島 音々

私には、もうすぐ八十七歳になる大ばあちゃんがあります。昔は畑仕事をしたり元気に動いていた大ばあちゃんですが、今はそういった仕事はしません。私をとてまかわいがってくれる優しいおばあちゃんです。思うように動けない大ばあちゃんは、一日中同じ部屋でテレビを見たり寝たりしていました。だから、毎日たいくつだろうなと思っていました。でも最近大ばあちゃんは週二回でかけるようになりました。施設に通っているようです。専用の車が毎回玄関までむかえにきてくれ、施設でお風呂に入れてくださったり、食事をしたり、他のおばあちゃんたちと話したりしているそうです。大ばあちゃんはその施設へ行く日になると、きれいな服を着たり髪の毛を整えたり、とてもうれしそうです。大ばあちゃんに楽しみができて良かったなあと思いました。

ある日、私はふと疑問に思い、家族に、
「こういうサービスって、いくらくらいかかるの？」
と聞いてみました。きっと相当するのだろうな…と思っていましたが、
「意外と安いんだよ！！これだけ親切にしてもらってるのに、税金の補助のおかげだね。」と言っていました。また、病院へ行ったらたくさんの検査をしても、七十歳以上の人の医療費はとても安くなり、大分助かっているそうです。私は税についてよく考えたことはなかったし、税の作文の宿題があるな…くらいにしか思っていなかったけれど、私の家庭は税に支えられているのだな…と気づきました。私はまだ本格的に税をはらってはいないけれど、自分たちがはらった税で、私の家族のように助かっている家族がいるのなら、それはとてもすばらしいことだと思いました。

それから私は税についてもっと調べてみました。すると、ゴミの収集や処理、警察署や消防所でも税は使われているし、私たちが学校で使う教科書、机、いす、校舎の建設も税金でまかなわれているとわかりました。税金がなければ私たちは普通に生活していくことができないのだな…思いました。

しかし、税金をちゃんと払っていない人がいるという話を聞いたことがあります。国民全員がきっちり税金を納めたなら、日本はもっとすごしやすい国になると思います。そのためにも、一人ひとりが税の使い道や税の大切さを知ることが大事だと思いました。そしてこのことが、十人から百人、百人から千人と、どんどん広まっていけばいいなと思いました。

来週もまた、大ばあちゃんは笑顔で、
「いってきます。」
と言ってくれると思います。税に支えられて、こうして私たちは毎日笑顔ですごせているのだと、私は心から感じています。

いのちを支える税金

信州大学教育学部附属松本中学校 3 年 三島 睦修

平成二十四年十二月上旬、七十五歳の祖父が膵臓癌を患い、約十一時間に及ぶ手術を受けた。その後、祖父はさまざまな治療を受け、治る見込みがないと判断されてから、緩和ケアという選択をし、在宅介護を受けることになった。

二十四時間介護をしていたのは勿論祖母だが、日々落ち込んでいく祖父の心を支えてくれたのは、訪問看護師さんと病状について不安があったときにいつでも応じてくれる主治医だった。

私は祖父母の家が遠方にあるため、一ヶ月に一度きりしか見舞いには行けなかったが、その都度祖母から祖父の様子を聞いていた。

祖父母の家に行く度に祖父の使用しているものがとても便利なものになっていた。例えば、ベッドは電動ベッドに変わっていたり、トイレにいけなくなった祖父のために支えのあるポータブルトイレが部屋に備え付けられていた。また、在宅介護の後半、足のむくみがひどくなり、痛みやだるさを訴えた祖父に対して電動マッサージ機のようなものも増えていた。驚くことに、これらはすべて無償貸与かあるいは少額の負担で貸りられていたのである。在宅介護の間祖父は大出血をし、何回も救急車を利用した。そして、市民病院にお世話になった。

急な発症から入院、検査、手術、在宅治療にいたるまで、莫大な費用がかかっていると思いがちになった。父に聞いたところ、これもまた驚いたことにそのほとんどが税金によって賄われているというのだ。

国税庁のホームページで調べてみた。税金の使いみちの中社会保障関係費が他の使いみちに比べ、圧倒的に多くなっている。その額は、歳出総額 95 兆 8823 億円のうち 30 兆 5175 億円使われており、全体の 31.8 パーセントも占めている。社会保障とは医療、年金、福祉、介護、生活保護などの公的サービスを言う。このいくつかの公的サービスを祖父は受けた。税金を使わせていただいたのである。

祖父が亡くなったことは私たち家族にとってとても悲しいことではあったが、税金のおかげで祖父は、大変高度な治療を受けられ、家族に見守られて家で過ごすことができた。祖母は税金で治療費を賄ってもらったおかげで、今も以前と変わらず普通の生活を送ることができている。

私はこれから大人になって税金を払う立場になる。祖父を助けてくれた税金の仕組みをいつまでも守るために、きちんと納税できる大人になり、社会に貢献したい。

税金でよみがえった思い出の町

千葉市立都賀中学校 3 年 藤巻 佑理

「復興特別税」。東日本大震災の復興を図ることを目的として、復興対策に必要な財源を確保するための特別措置として制定された。主に、被災地域の津波で発生した瓦礫の処理や、福島県で起きた原発事故による放射性物質の除染活動に使われているという。復興特別税は、今まで興味のなかった「税金」について私に考えさせるきっかけをつくってくれた。

私の祖父母は、岩手県でクリーニング店を営んでいた。夏休みには家族で帰省をし、花火大会へ行ったり、市民プールへ行ったり……。たくさんの思い出がつまった町だ。そんな私の大好きな町は、ある日、あの大地震に襲われ、崩れ去ってしまった。そう、東日本大震災だ。あの光景を目にした時の衝撃は、今でも忘れられない。港に打ち上がった漁船。根こそぎなぎ倒された木々、見渡す限りの瓦礫の山。祖父母のクリーニング店は海沿いにあったため、跡形もなかった。父の車で町をゆっくりとまわりながら、なんとも言い表すことのできない気持ちになった。

そして、月日が経ったある日、私の携帯電話に祖母から一枚の写真が送られてきた。きれいに整備された道路の写真だった。いつだったか見たことのあるようなそれは、いつも市民プールに行く時に通っていた道路だったのだ。でもなぜ？あの場所は、瓦礫で散乱していたはずなのに。まるで魔法でもかけたかのように一掃され、震災前と変わらない景色が広がっていた。その魔法の正体。それは、「復興特別税」によるものだったのだ。道路の補修費用は、この税金によってまかなわれたのだという。東日本大震災が発生してから四年が経った今でも、復興のための作業は、復興特別税の力で続いている。

私達は、個人の所得にかかる所得税、商品を買ったりサービスを受けたりする時に納める消費税、住んでいる県や市に納める住民税など、たくさんの税金を納めている。そしてどれもが、復興特別税のようにどこかで誰かのために使われている。ニュースでも最近、消費税が八パーセント、またもうすぐ十パーセントに引き上げられる話などをよく耳にする。そして、それと同時に、「税金がとられる」という言葉も。この言葉に対して私は、疑問を感じる。急病になれば救急車を呼ぶことができる。火事になれば消防車を呼ぶことができる。無償で支給された教科書で、勉強ができる。学校に通うことができる。私達は、税金によって育てられている。税金は生活を豊かにしてくれる。だからこそ、「とられる」ではない。「納める」のだ。それが、私達国民の義務なんだと思う。

祖母は言った。「たくさんの人からたくさんの協力があってできたんだよ。」と。私は、税というものの存在意味を強く感じた。私はまだ深く税に関わっているわけではないが、納税の義務は必ず果たしていきたい。

税の力

鴨川市立安房東中学校 3年 渡邊 陽南子

気付いたら、私は病院にいた。ドラマの一場面のように、バタバタと動き回る医師や看護師さんたちの真ん中に、なぜか私はいた。

三月のある日の夕方、横断歩道を渡っている最中に、交通事故に遭ってしまったのだ。

約一カ月の入院生活、松葉杖での登校、不自由な日常生活…様々な初体験が続いた。

でも、周りのたくさんの人に助けられ、私の体や心は段々と元気になることができた。

苦しさ・辛さ、でも、うれしさ・感謝もたくさんあった、忘れられない体験だった。

後になって…というより、この作文を書く為に母と税の話をしていて、初めてわかった。ああいう時にも、「税」の力は働いていたのだ。

警察が、救急車が、医療保険が…私のために動き、学校にはリハビリ中の私を支えてくれる設備もあった。

今まで、税というのは、公共の建物や道路を整備したり、義務教育や行政サービスなどを支えるためにみんなで出し合うお金なんだ、と漠然と考えていた。

しかし、交通事故から様々な体験をして、改めて、税はものをつくるためや、買うためだけのお金ではないのだな、と思った。

税は、全ての時に・あらゆる場所で・様々な形で私を助け、支えてくれていたのだ。

私一人の体験だけではないと思う。例えば、震災復興だってそうだ。被災地の人々ばかりか、元気をなくした日本全体をも、たくさんの場面で助けてくれたに違いない。これからも、たくさんの力・支えが必要な日本にとって、ずっとそうであってくれるはずだ。

ものをつくることや買うことは手段の一つで、何のために税なのか、といえは元気な日本をつくるための税なのだ、と思う。

暮らしやすい国・活気のあるまち・生き生きとした人々…そんな元気な日本にするための、「血液」のようなものなのではないだろうか。

税を「とられている」という風には思わずに、「納めている」と思えた時が、税のことを理解することができた第一歩のように思う。

私は、今は、お小遣いで買い物をした時などに、「税を納めている」という意識はなく、知らず知らずのうちに少しの消費税を納めているだけなのだ。

まだ子どもだし、学生だから、みんなに支えられていることの方がはるかに多い。

でも、将来はもし何かがあった時に、何かしらの・誰かしらの力となれるように、しっかり働いて、税を納められるようにしたい。いや、「したい」ではなく、「しなければならない」だ。

たとえ、日本の国民一人一人の力が小さくとも、必ず・確かに、日本の力になっていると信じたい。

「税の力」を信じることができた分だけ、税を納める努力もできるのだ、と私は考える。

私は、「税の力」を、「日本の力」を信じている。誇り高き、日本の一国民として。

僕たちは未来の納税者

足立区立第十四中学校 3年 岸田 浩輝

税金は、国民みんなが「豊かで健康的な生活」ができるように、様々なことに使われている。僕たち子どもの教育費や医療費などにも税金が使われている。母から僕の幼かった頃の体験談を聞きながら税について勉強した。

僕は東京都三鷹市で生まれた。かかりつけの小児科は近隣の世田谷区にあった。乳児の時は支払わなかった医療費が、ある日突然請求された。世田谷区の友だちは無料。なぜなのか。僕が一歳の二〇〇一年当時、子ども医療費助成が世田谷区は小学校就学前まで、三鷹市は一歳までだったからだ。同い年の子どもが同じ医療機関に通院するのに、住んでいる住所で支払いがちがう。医療費助成は国税ではなく、地方税が関係しているからだというのが、これは不公平だと思った。今現在、足立区は中学校卒業までだが、三鷹市は今でも小学校就学前までだ。子ども医療費は、ぜひ国税で助成してほしい。無料化でなくてもいい。日本中の子どもが皆平等に、安心して医療を受けることができる制度を検討してほしい。

僕は三歳のときに三鷹市の保育園から仙台市の保育園に転園した。どちらも市の認可保育園だ。保育料も居住する市町村により異なると知り驚いた。宮城県の賃金の方が安いのに保育料は高い。これも地方税が関係するからだ。待機児童問題と併せて保育料についても取り組んでほしい。

僕が小学二年の五月。クラス替えをして一か月、やっと新しい先生と楽しく勉強できるようになったのに、突然先生とさよならすることになった。引越しで友だちが転校することが決まり、二年生の児童数が三十九人になったため、二クラスが一クラスに統合された。なぜ二クラスのままでいいのか。父が宮城県教育委員会に話を聞きに行ったそうだ。四十人以上でないと国から援助金が出ないので、先生一人分の給料が支払えないからだという。今でもあの日のことをはっきり覚えている。とても悲しかった。東京の学校だったら、学年の途中でクラス替えはなかったのだろうか。地域差別がないようにするにはどうしたらいいのか。それが今後の課題だと思う。

僕たち子どもは、大切な将来の納税者だ。少子化が問題となっている現在、少しでも子どもが増えるように、国民が納める税金を、大切に使ってほしい。親が子どもを育てやすく、子どもたちが伸び伸びと元気に暮らせる国にしなければいけないと思う。僕たちが学校で勉強できるのは税金のおかげだという感謝をもって、一生懸命学び、立派な大人になって、しっかり働き、たくさん税金を納められるようにしたい。

税金は助け合いのお金

国立市立国立第二中学校 3年 弓 ひかる

七月のある朝、テーブルの上に広げてあった新聞から、『クリスマスおにぎり一個』という大きな見出しが目にとび込んできた。「え？何のこと？」私は思わず新聞を手にとっていた。

そこには、二〇一二年に子どもの貧困率が過去最高になっている事が十二才の女の子の実例とともに書かれていた。クリスマスの夜なのに電気も暖房もない部屋で母親の帰りを待って、その日初めての食事になるおにぎりを一個やっとならにできたというのだ。私は強い衝撃を受けた。私の誕生日は十二月二十五日。誕生日とクリスマスが同じ日のため、物心ついた頃から両親の配慮で、とてもたくさんのプレゼントをもらっていた。そのため私にとってクリスマスは一年中で最も心おどる特別な日だった。だけどいつしかそれがあたり前になり、大きくなるにつれ感動や感謝の気持ちも薄れてきてしまっていたと思う。「同じ国に生まれてどうしてこんなに差があるのだろうか」と私は少しうしろめたいような落ち着かない気持ちを覚えながら記事を読み進めていった。その女の子の母親は後日福祉事務所の協力により生活保護を受け、なんとか普通の生活が送れるようになったとあり、私は心からほっとした。生活保護といえば、その費用は税金でまかなわれているのではないだろうか。私は税についてもっと知りたいと思った。

『税金は困っている人達を助けるために使われているもの』とばかり考えていたが、調べてゆくうちに大きな思い違いをしていた事に気づいた。学校や教科書、美術館や図書館、病院にかかる費用や道路でさえ、私達の生活の基盤となる大切なところにはほとんど税金が使われていた。両親が働いたお給料から税金を引かれ、さらに買物をすれば消費税も払ったりと、これまで税に対して良いイメージがなかった私は考えを改めた。税金は巡り巡って自分達の生活も支えてくれていたのだ。

また、我家には今年九十才になる祖母がいる。杖をついてはいるが、週に何回か市が運営しているコミュニティバスに乗って買物や美容院に出かけてゆく。車も運転できず、遠くまで歩くのが困難なお年寄りにとってはとても重要な交通手段だ。所得の低い人達には、運賃の助成もある。これらも全て税金のおかげだ。

税金は助け合いのお金。その時に出来る人達が働いてきちんと税金を納め、本当に困っている人達に手を差し伸べてゆく。そして自分達の生活の安心と安全も保ってゆく。私は今はまだ消費税しか納められないが、将来は働いて、他の税金もしっかり納めてゆける社会人になれるように、勉強にはげみ、一日一日を大切にすごしてゆきたい。それが社会貢献としての第一歩になると思うからだ。

税によって成り立つ世界

学校法人桜蔭学園桜蔭中学校 3 年 田中 愛梨

私は今まで税について意識的に考えたことはありませんでした。唯一考えたことがあるとすれば、消費税が 5 % から 8 % に引き上げられた時です。その時は、そんなことをすれば景気は悪くなってしまうし、所得の少ない世帯が余計に生活苦に陥ってしまい、悪循環になるのではないかと深く考えず増税に反対していました。しかし、今回の作文を書くにあたり、様々な資料を調べていくうちに、それが軽率な考えであったことが、わかりました。

増税の時、私はたかだか 3 % の増税で何が変わるのだろうか、と疑問に思っていました。そこで、現在の消費税の税収を調べてみたところ、年間約十兆円で 1 % 増えれば単純計算で 2 兆円もの増収になることがわかりました。生まれて此の方、3 % がこんなにも頼もしく感じられたことはありません。また、この増税によって得られた収入は何に使われるのか気になり調べてみたところ、最も割合が多かったのは赤字国債でした。小学生の頃、親がよく、日本の借金は今大変なことになっているから覚悟しなさい、と言っていたのを思い出し、「日本の借金時計」を調べてみることにしました。

日本の借金は約九百八十八兆円もあり、今も増え続けています。このまま単位が京になってしまうのでは、と思い、想像もできないほど膨大な数字の圧力に私は恐くなりました。これほどの借金を抱えているようでは、もはや増税は致し方ないのかな、と思えました。しかし、税金は決してこのような国の都合の為だけに使われているわけではありません。

私の父の義弟は、建築に昔使われていた人体に有害な木材を吸い込んだことによる“ガン”でした。個人営業でもともと収入は少なく、病状が悪化しついに営業停止にせざるをえなくなっていました。いくら保険に入っていたとはいえ、こんな状態で度重なる手術の費用を払えるわけがありません。そんな義弟を金銭面で支えてくれていたのは、国からの生活補助金、つまり見知らぬ人々も含め、私達「国民」が支払う、“税金”だったのです。

もし、みんなが税金を払っていなければ、私の義弟のように思わぬ不幸に陥った人々は生活すらできないかもしれません。また、そんな特殊なケースに限らず、警察や消防によって街の安全が守られたり、清潔な水道水を飲む、というような、私達にとっては当たり前だと思うような日常すら営むことができなくなってしまうでしょう。しかし、私達「国民」の多くは“当たり前”だからこそ、税の重要性に気付くことなく感心も持たないのです。だからこそ、私達はこの当たり前のありがたみを理解すべきなのです。そうすれば、人々の“税”への見方は、自然と“取られるもの”から“払うべきもの”へと変わっていくのではないかと、思います。

僕の生まれた病院

横浜市立東鴨居中学校 3 年 中原 遼空

僕は今から十五年前、一九九九年六月三日に神奈川県立こども医療センターという病院で産まれました。本当は家の近くにある小さな産婦人科で産まれる予定だったのですがお母さんが妊娠八カ月の時「お腹の赤ちゃんが大きくなっていない」と先生に言われ未熟児の救命率が高い神奈川県立こども医療センターに救急車で運ばれそこで入院、出産をすることになったそうです。その病院は神奈川県の税金で建てられた大きな病院です。妊婦さんやお腹の赤ちゃんに大きな病気や異常がないと診てもらうことのできない特別な病院だそうです。

お母さんは入院中ずっとお腹の赤ちゃん、すなわち僕が何故大きくならないのか検査漬けの毎日だったそうです。先生は「もしかしたら赤ちゃんの心臓に異常があるかも知れない」と言ってその当時日本に三台しかなかった特別な機械でお腹の上から僕の心臓を調べることもしたそうです。しかし、心臓にもどこにも異常は無く、あとは産まれてみなければ分からないと言われたそうです。その結果、ずっと小さい小さいと言われていた僕は、三〇〇〇グラムを超えるどちらかと言うと大きな赤ちゃんとしてこの世に誕生しました。

お母さんは妊娠八カ月の時に突然この病院に運ばれ、毎日色々な検査を受けながら長期間入院していたのでいったい医療費がいくらかかるのかとても心配したそうです。でも、出産を終えてお会計をしたら普通の病院と比べてあまりにも金額が安かったのでびっくりしたそうです。退院する時に看護師さんにそのことを話したら「この病院は県立病院でみんなの税金で成り立っている病院だから料金が安いんですよ」と言われたそうです。

僕は今回この税の作文を書くのに何を書いたら良いのか全く分からず、お母さんに「税金なんて中学生には全く縁のない話じゃん」と言ったら「何を言っているの、あなたは生まれる前から税金のお世話になっているのよ?」と言われてこの話を書くことにしました。

税金と言えば今年四月に消費税が五パーセントから八パーセントに上がり、お父さんのお給料からも毎月色々な税金が引かれ、税金は「取られるもの」というイメージしかありませんでしたが、実際はこの税金が回りまわって自分自身が税金のお世話になっていることがあるのだということを知って税金に対するイメージがガラリと変わりました。

僕はまだ中学生なので、今は消費税くらいしか税金を払うことはありませんが、将来働いて税金を払う立場になったらこの作文に書いたことを思い出して気持ちよく税金を支払いたいと思います。

税を「おさめる」

川崎市立生田中学校 3 年 北川 歩美

なぜ「税を払う」ではなく「税を納める」というのだろうか？という疑問に感じたので辞書で調べてみた。「納める」とは、渡すべき金や物を渡す、という意味だった。なるほど、と思った。納税は国民の義務の一つであり、国民が国や都道府県、市町村に渡すべきお金が「税金」ということなのだ。

「おさめる」には他に「修める」「治める」「収める」がある。これらの意味を調べていくうちに、税のキーワードは「おさめる」ではないか、と考えた。

私たちの身の回りは、税のおかげで成り立っているものがたくさんある。学校で勉強したり、行事や部活動に打ちこんだりできるのも、税のおかげだ。学校の施設設備や毎年配布される教科書はもちろん、合唱コンクールで歌う市民館のホール、部活動の試合で訪れる市や県の体育館、マラソン大会で走る多摩川沿いのコースも税のおかげで建設、整備されている。安全に登下校できる道路、信号機があり、水道からはいつもきれいな水が出てくる。私たちは、税のおかげで充実した学校生活を過ごし、あと半年後には三年間の中学校課程を「修める」ことができるのだ。さらに私たちが昼夜問わず、毎日安心安全な暮らしを送ることができるのは、警察、消防、救急、防衛などのおかげであり、ゴミ収集事業により衛生的な環境が保たれているからである。社会を秩序のある状態に「治める」ために、税が使われているのだ。もう一つの「収める」には、受け入れる、しまう等の意味があり、「納める」が渡す側であるのに対し、受けとる側といえる。では、「収め」られた税を国はどのように使っているのだろうか。国の一般会計歳出を見ると、社会保障関係費の割合が最も高いことがわかった。消費税率引き上げで得られた財源も、社会保障の充実に充てられるそうだ。社会保障先進国と言われる北欧の国々と比較すると、街づくりなどの環境面や福祉、雇用対策など、まだまだ日本は遅れているという実情がある。子どもからお年寄りまで、すべての世代が安心して暮らすための公共サービスが受けられる社会の実現を願っている。

では、私たち中学生にできることは何だろうか。自分の将来を自分で切り拓いていくために、社会全般のことに興味をもち、自分がどんな仕事をして、どのように暮らしていくかを考えながら、やりたいことを見つけて、それについて学んでいくことだと私は思う。大人になっても定職に就かない、やりたいことがないと言って働かない人が多い社会ではしっかり仕事をして、国民の義務である税金をきちんと「納める」ことができる大人になりたいと思う。

感謝

甲府市立城南中学校 3 年 田形 乃彩

今までは、「税金」という言葉を聞いても具体的にどういうものか分からず、全くピンとくるものがなく興味すらわいてきませんでした。しかし、今年の夏で今までの考えは全て変わりました。私は今年の八月に、甲府市の海外派遣研修生として、アメリカの文化等を学ぶという貴重な体験をする機会がありました。そんな貴重な体験に自分も参加できることが決まった時、両親は私にこう言いました。

「乃彩がこの研修に参加するにあたって、市からはたくさんの費用が出ているんだよ。だから、感謝の気持ちをしっかり持って派遣団メンバーとして恥じないよう精一杯、頑張ってこないとね。」

両親からのこの重みのある言葉を聴き、私は目標を決めました。“国際性豊かな交流を図り、自身の視野を広げることを課題とし、今後の自分にも役立てられるようアメリカでの十日間を意味のある充実した時間にする”アメリカでは、この目標の達成ができたと共に外国の習慣・文化・歴史を肌で感じることができました。全ては、税金のおかげです。

今までは消費税もなんとなく払っていて、いまいち何のためなのかも分かりませんでした。消費税が5%から8%になる時も“何で消費税を高くするんだろう。意味なんて、あるのかな。”なんて考えていた私。しかし、今は違います。税金は、他にも色々な場所で使われており、とても役立っているのです。

私達は毎日学校に行くのが当たりまえ。登校の時、安全に学校へたどり着けるのも当たりまえ。学校での授業や家での勉強で教科書を使うことが出来るのも当たりまえ。こうして生きていくなかでのたくさんの「当たりまえ」。そのほとんどにはやはり「税金」が関わっています。

今は、中学三年生で働いていない私。その私を支えてくれる税金。今は、働いておらず税金を納めることができず、たくさんの大人の方々が納めてくれた税金に頼っている私ですが大人になったらしっかり税金を納めたいです。

私は将来、看護師となってたくさんの人を助けたいと思っています。病院でも、手術・入院など他にもたくさん税金が使われている所があると思います。そのような「税」が身近にある病院で働くことにより、私の「税」への興味・関心は更に大きくなるでしょう。

世の中には、税を払いたくないという方がいるでしょう。税への感想は十人十色。なのでどんな感想があっても良いと思います。ですが、「税へのありがたみ」これは、日本で生活していくため知っておいてほしいとありがたみに気付いた今、初めて思います。

今までの恩を返すため、世の中の役に立つため精一杯働き、税金を納めたいです。

「私達の暮らしに欠かせない税」

津幡町立津幡南中学校 1 年 佐野 里奈

税と聞くと、私が一番に思い浮かべるのは消費税だ。なぜなら、自分でも払ったことがあり、少し前には消費税率が上がり、いろいろなところで話題になっていたからだ。そして、消費税以外にも様々な税があり、その税は私達の生活のために使われているということを私は聞いたことがある。

私はまず、もし税金を誰一人納めなくなったらどうなるだろうと考えてみた。すると、何をするのにもお金がかかり、不便で暮らしにくい世の中が頭の中に広がっていった。具体的には、教科書が有料になったり、消防や警察などの公共サービスが受けられなくなるということだ。私は怖いと思った。生活に欠かすことができない消防や警察まで人々が税金を納めないと無くなってしまったらなんて。そして私は、一つの話思い出した。それは、実際に税金が足りなくなり、公共のサービスが提供できなくなった町の話だ。詳しく言うと、昔アメリカのカリフォルニア州で、「税金は安いほうが良い」という住民の声により、税金を安くする法律ができたため、カリフォルニア州のパーリアという町では、収入が減り警察官の給料が払えず、全員をやめさせてしまった、という内容の話だ。他にもパーリアでは、道ががたがたになったり、病院などが閉鎖されたりとたくさんの問題が起きたそうだ。この話から私は、警察官が居なくなったり、病院が閉鎖されるのはとても大変なことで大きな問題だけれど、私達にもっと身近な学校も税金が使われているのだから同じなのではないかと思った。今は当たり前のように学校に通っているけれど、税金が無くなってしまったらその生活も当たり前ではなくなってしまうのだと思うと、恐怖と不安で心がいっぱいになった。そして税とは、私達にとってなくてはならないものだと強く感じた。

私は、税が私達の生活のために使われているという大まかなことしか知らなかった自分が情けなく感じた。なぜなら、税はこんなに身近なところでたくさんの重要な役割を果たしてくれていたのに、その役割を具体的には全く知らなかったからだ。そして、税は私達のために使われているのではなく、私達のために働いてくれているのではないかと思った。私達の周りには、税の働きが様々なところに隠れているのだと私は思う。

今まで私は、税の働きに助けられ、生活し、成長してきた。誰一人、税の働きに助けられていない人はいないと思う。だからこそ、税の働きに感謝し、一人一人が責任を持って税を納め、自分自身の役割や義務を果たすことが必要だと思う。そして、役割を果たすことで自分が税に助けてもらえるのだと思う。また、税を納めることは、自分が税に助けもらうためであると同時に、税を通じて他人を助けるためでもあると思う。だから私は、将来、しっかりと税を納め、自分、他人、社会のために働いていきたい。

国民と国家の連携プレー

敦賀市立角鹿中学校 1 年 茅田 晃一郎

先日、兵庫県議会のある議員が、目的のはっきりとしない繁頻すぎる出張について会見を行い、号泣したとして話題になった。この議員が使った政務活動費の使用目的が問われている。政務活動費は、議員の調査・研究などの活動のための資金のことを言う。これは、国民が支払う税金によってまかなわれている。正しく使われるべき政務活動費。この議員は税金の重さをどう考えていたのだろうか。

税金は、身の周りの様々なことに使われている。ぼくたち中学生一人あたりの税金負担額は約九十四万七千五百円にもなるそう。この中には、教科書、学校図書館の本、学校の設備維持費（電気や水道など）が含まれている。暑い夏にエアコンのきいた教室で勉強ができるのも税金のおかげだ。だからぼくは税金を払ってくれている人への恩返しという意味でも、一生懸命学業にはげまなければいけないと思う。

他にも、税金は公園や図書館、道路の維持管理、建設などにも使われている。七月二十日、舞鶴若狭自動車道が開通した。この道路も、税金で造ったものだ。

また、四月一日に八パーセントに増税された消費税。この三パーセントの増税分は、年金や医療の安定化と充実のために使われるそう。

このように、税金は世の中の利便化やぼくたちが安心して生活するために使われていることが分かる。では、税金がなかったらどうなるのだろうか。

まず、個人の負担が増える。火事などの災害が起こったとき、被害を受けた人は多額のお金を支払わなければならない。先日、ぼくの家の前に住んでいるおじいちゃんが具合が悪くなり、救急車で運ばれた。急病や事故のことを考えると、安心して暮らすことができなくなってしまう。また、道路は整備されず、公共施設はこわれても修理されないため、とても不便な生活を強いられることになる。このように、税金は世の中でとても大切な役割を担っているのだ。

だからぼくは、国民が税金をしっかりと納め、国や県、市、町がそれを正しく使う国民と国家の連携プレーが重要だと思う。国家が税金を有効に使わなかったら、それは国民の暮らしに反映されない。国家が税金をいかに有効に使うかということもポイントだと思う。

日本の消費税はヨーロッパの国々に比べてかなり低いそう。しかし、消費税が高いヨーロッパの国々は、軽減税率などの導入により税金を有効に使っている。

このまま日本が少子高齢化の一途を辿っていくならば、ぼくが“納税者”になる頃は今よりもっと負担が大きくなることは間違いない。税金の使い方をより精査し、諸外国の仕組みを取り入れて、ぼくの父や母を含め、今会社に貢献している人たちが安心して暮らせる日本にすることがぼくたちの義務だと思う。

税に支えられて

掛川市立西中学校 3 年 原田 貴子

私は「学校」という場所が好きです。

多くの人と関わることができ、多くのことを学び体験できる「学校」に当たり前の様に通えるのは税の支えがあるからです。このことを知るのは、私が小学校三年生のときでした。

母の故郷であるフィリピンに出掛けた時、ある一人の少女を見かけました。本来、学校に行っているはずなのに少女は手造りの花輪を売っていました。母は私がその少女に釘付けになっているのに気付く「学校に行くためのお金を自分でためてるんだよ。」と説明してくれました。私は衝撃を受けましたが、一番衝撃を受けたのは、私と同年位だったということです。

他にも働いている子どもをたくさん見かけました。小学校六年生位の子、小学校一年生位の子の手を引いている子、渋滞で止まっている車を一つ一つまわっている子。その子たちの足元を見るとボロボロの素足で、一人も靴を履いている子は見ませんでした。それほど学校に通えなくて困っているのです。

日本では中学生以下の子が働いているのは見たことがありません。それは税による支えがあるからだと言った授業で習いました。税は私たちの教科書や校舎の建築費、改築費などにも使われ、私たちがよりよい設備で学習できるようになっていることも知りました。他にも生活の苦しい人を支える生活保護、老後の生活を支える年金、病気やけがをした際に支えてくれる生活保護。税が支えてくれているのは学校生活だけではなく、国民一人一人だったということも調べてみて分かりました。

それまで私は税に対して不審感しか感じませんでした。税があるから物価も高くなり、そのせいで苦しむ人がたくさんいるのではないかと思っていました。しかし、逆に私たちは税に支えられると知ると同時に嬉しくなりました。税は日本国民のだれもが払っています。幼い子でさえも何かを買う度に税を払っています。その税は国民一人一人を支えるのに使われます。つまり、お互いに助け合っているということになるのです。

最近、税が 5 % から 8 % に上がりました。近いうちまた増税する予定があります。しかし、お互いに支え合うのは変わりません。多くの人が税を少しでも払い支え合う社会になることを強く願います。

昔も今も、私は多くの人に支えられています。そしてこれからも支えられ続けられると思います。私も、納税という形で多くの人を支えられるようにしたいです。

税金が果たす重要な役割

松崎町立松崎中学校 3 年 石田 蘭

どちらかというと、私の税金に対するこれまでのイメージは「税金イコール仕方なく支払うもの」という意識が強かったような気がする。「出費」「負担」こういったマイナスのイメージしか浮かんでこない。

私たちが住む日本も、今年の四月一日から消費税が五パーセントから八パーセントに増税された。増税前には、メディアなどでよく駆け込み需要だなんだと世間を騒がせていたのも記憶に新しい。当然ながら全てにおいて値段が上がり、私たちが生活している中にいろんな面で影響を及ぼしていることは間違いない。そこで私は税金の本来の目的とは何か、どういったことに役立てられているのか調べてみることにした。

ただひと口に税金といっても、国民が支払わなければならない税金の種類はたくさんあり、中にはまだ理解することの難しいものもある。税金について調べていくうちに、よくよく考えると私たちの生活は全て税金で成り立っているということが分かってくる。まず私たちにとって一番身近なことを例に挙げるとするならば、私たちは小学校・中学校と九年間にわたり義務教育を受けさせてもらっている。そして当たり前のように教科書をもらい、当たり前のように使っているが、実は教科書の裏に小さな字で「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」と書かれていることに皆さんは気付いているだろうか。私は税金の仕組みを知るうちに、改めてこの言葉の重みを実感した。

また、自分たちの町にある学校・病院・公共施設・道路などにおいても全て税金によって賄われているのだ。消費税だけを見ると、消費者にとっては大きな負担になっているように思いがちだが、もし税金を納めない世の中になってしまったらと想像すると恐ろしい。自分の住んでいる町から警察官がいなくなり、治安が悪くなる。火事が起こっても消してくれる消防士や消防車もない。病院に支払う治療費が高額になり、学校に通いたくても通えない子供が出てくる。そう考えるとやはり税金は人が生活していくうえで重要な役割を果たしていることが分かる。

自分の利益だけを優先していたら、社会はきっと成り立たないだろう。納める金額のことばかりに目を向けるのではなく、税金の性質をきちんと理解し、どのように使われているかに関心を持って、納得したうえで納めることが大事だと思う。まだまだ理解しがたく難しいことが見え隠れする税金だが、自分の知らないところで、自分の目に見えないところで、自分も恩恵を受けているということを忘れてはならない。

会費を払おう

豊橋市立羽田中学校 1 年 鈴木 綾音

私の母は、会費制のママさんサークルで活動をして楽しんでいる。会員から集めた会費は、会場費や道具代など、皆に必要なことを皆が納得して使っているそうだ。

私がなぜこんな事を書くかというと、「国と税金」の関係は、「サークル活動と会費」の仕組みに非常に似ていると思ったからだ。国（又は地方）＝サークル、国民（又は県民・市民）＝サークル会員、税金＝サークル会費という様に置き換えて考えてみると、税金の仕組みは非常に理解しやすい。

例えば

〔サークル会費を納めない会員がいたとすると、活動はどうなるのか〕

答えは簡単だ。会場を借りる回数が減ったり、新しい道具を買い替えたりすることができなくなってしまう。従って、ママさんサークルの活動内容は低下する。これを先に述べた通り、日本国サークルにあてはめてみると、

〔税金を納めない国民がいたとすると、活動はどうなるのか〕

規模はママさんサークルとは大違いだけれど、やはり活動内容は低下すると考える。日本国サークルの活動は、公共サービスや、公共施設の提供・維持であるので、活動の低下は私達の生活に大きく影響する。この先、税金を納めない人が増えれば、公園で遊ぶのに入場料が必要となり、義務教育に授業料が発生し、一般道も高速道路の様に有料化されるなど、そんな生活になってしまうかもしれない。

「消費税があがって、損した気分。」「税金なんて払わなくていいじゃん。」この作文を書く前までは、私にはこのような考えがあった。しかし、この考えは間違いであると気がついた。どんな規模のサークルでも、会費制と決まっていれば会費を納めなければいけない理由とルールがあるのである。

ただし、ルールだからと言っても、事情があって会費を納められない会員がいたり、「そんな無駄遣いをするなら会費は納めたくない。」と思う会員がいるかもしれない。そんな時には、ママさんサークルで言えば、信頼のおけるお世話役さんが上手に取り仕切ってくれる。日本国サークルでは、議員がそれにあたる。日本国サークルのお世話役さんは、果たして、上手に取り仕切ってくれているのであろうか。今は選挙の投票率が低いとされているが、税金をつまらないことに使われたくないのなら投票へ行き、きちんとした考えの議員を選ぶことも重要なことだと思う。このことから、国と税金と選挙は非常に密接な関係があると私は考える。

国民は生まれた日から、「会費制日本サークルの会員」であるのだから、「会費」をしっかり納めて、よりよい「サークル活動」が持続することを願っている。

税の必要性

滋賀大学教育学部附属中学校 3年 杉山 佳菜絵

「税金とられるから実際手に入る給料なんか少ないし、共働きじゃないとやりくりできないんです。」

私が通学途中の電車の中で耳にした、あるサラリーマン二人の会話である。私はこの会話からいくつかのことを感じた。

まず一つ目に、税金を「とられる」という表現についてだ。普段、様々な人の会話を聞いたり会話をしたりしていると、しばしばこの表現が登場する。むしろきちんと税を「納める」と言っている人の方が少ないのではないだろうか。しかし、多くの人が口にしている「とられる」と表現は正しいのだろうか。私は間違っていると考えます。確かに自分で働いて稼いだ給料を納めるとなると「とられ」ていると感じるかもしれない。しかし、納めた税金は公共サービスという形で自分達に還元されている。その点で税は「とられ」たお金ではなく、一度国や自治体に「預ける」お金と言えるのではないだろうか。

二つ目に私が気になった点はあたかも「税のせい」で共働きであるように言っていた点だ。会話を聞いているとこの人には子供がいるようであった。ならば尚更おかしいのではないだろうか。なぜなら学校での子供達の教育費は税金でその多くを負担しているからだ。もし税の制度がなくなれば子供の莫大な教育費を負担しなければならなくなる。そうなれば共働きでは済まなくなってしまわないだろうか。

きっと皆さんも会話の話題に税があがったり、税についての会話を耳にしたりする機会があっただろう。そのとき皆さんはどのようなことを感じただろう。税は消費税等で私達の身近にありながらも、詳しく知らない人が多い。私もそのうちの一人であったが学校での租税教室をきっかけに税について関心を持ち、色々なことを学んだ。私は学習してみて税の「必要性」を強く感じた。今、私達が当然のように学校に通っているのも、道路が整備されているのも、全てが税のおかげなのである。私達が税の使い道、必要性をきちんと把握、理解していくことが税の制度を成り立たせる上で最も重要なのではないだろうか。また、より踏み込んで税の制度に問題がないか、税の使い道に問題がないかなど国民一人一人が考えていく。そうすれば税の制度はより良く、国民の納得の出来る、完璧なものになっていくのではないだろうか。そのためにももっと税について知り、周りの人にも税の知識を広めたいと思う。

『町を良くするために欠かせないもの』

多賀町立多賀中学校 1 年 龍見 幸祐

税と聞いて一番に思い浮かぶのは、消費税だ。八パーセントに増税して以来、お小遣いをやりくりして買う本や文房具が、やたら高くなったように感じる。僕の懐はますます痛み、消費税がとても恨めしいものに思えた。しかしこの夏休み、僕は町の「子ども議会」で発言する機会があり、税に関する意識が百八十度変わった。

町が少子化していることを知った僕は、次の様な質問をした。「中学校を卒業すると町外の高校に進学し、その後大学などへ行き町を離れることになる。町外に出た『子ども達が帰ってくる地域』にするため、町はどんな工夫をしているのか？」という内容で、いくつか提案もした。

この質問に対して町長自ら回答をして下さった。少子化をくい止めるため、まず子育てしやすい環境を整えていると知った。若い世代が安心して住める町にするために、町の予算を子ども達のために多く使っていることに驚いた。「町づくりは人づくり」「人づくりは教育」と掲げ、小中学校で学ぶ環境を良くするためにも設備を整えているそうだ。すでに、すべての教室にエアコン設備が入っている。さらに、新学期から I C T が活用出来る機具も備えられたそうだ。そして教員の数も増やしていると。確かに、僕が小学校低学年だった頃に比べ、環境がどんどん良くなっていると実感できる。

さらに、0 歳から中学生の医療費が全額補助されているのは、県内で唯一多賀町だけと知った。アレルギー体質で、しょっちゅう僕は病院にかかっているのに、無料で医療が受けられ、薬がもらえるのはありがたい、と親は毎回言っている。

これらのサービスは、税金が財源になっていると学んだ。町議会が発行している冊子の最新号に、町の「入ってくるお金」と「使い道」が円グラフで分かりやすく示されている。これによると、今年の歳出予算は、四十一億三千万円（想像出来ない数字！）そのうちなんと十六・二パーセントの約六億円が教育費に充てられているのだ。ほとんどが税金による収入で、約半分が町税だとグラフから分かった。町の大人達が一生懸命働いて納めている税金で支えられていたのだ。

議会では、町の将来を良くするために、税金の使い道を真剣に審議していることが体験できた。そして「子ども達が帰って来たい」と思える魅力的な町、さらに僕達がこの町で心豊かに生活するためにも、税収は、なくてはならない欠かせないものだと学んだ。

八パーセントの痛い出費は、めぐりめぐって僕と社会のために役に立っていたのだ。消費税は、僕が社会に貢献出来る一つの手段にもなることに気付かされた。買い物をするたびに、気持ち良く、誇りを持って支払える納税だと今は感じる。

税への礼儀

舞鶴市立加佐中学校 3年 中川 真紀子

スクールバス。それは私達の足であり、通学するうえで欠かせないものだ。私の足では自転車では一時間を優にこえてしまう。それを助けてくれているのはこの青い車体である。

それを動かすのは他ならない税金だ。私の払っている消費税くらいでは到底払えないだろうお金を誰かが払ってくれている。初めてバスが三年前から。それに気づいたのは中学校に入ってからだった。私は知った。今、これを動かしてくれている人達。それは一度もこのバスに乗ることのない人達。果たしてこれが平等といえるだろうか。当たり前のように乗っていたが、本当に乗って良いのか。

だから私はせめてあと一年だけでも大切に乗りようと思っている。毎日眺めている景色も、バスがあつて学校に通えるからこそ見られるものだ。それに気づいた時から、私はよく窓の外を見ている。たとえそれが目を逸らしたくなる日でも。

忘れることもないあの九月、台風十八号が私の地域を襲った。私の家は水が直接来ることはなかったが、それでも集落は孤立した。次の登校の日、車窓からいつもの通学路を見たあの時の気持ちは何とも言い表せない。泥にまみれた家具や瓦礫。あまりにひどくて言葉もなかった。そうして学校も、グラウンドまで水没していた。倉庫が水びたしだった。だが、そうした状況で助けてくれた人もいた。それは当時の三年生だった。倉庫をきれいにし、道具も使えるようにしてくれた。また、私達は全校でボランティア活動にも取り組んだ。その時には、直接被害を受けていない生徒も皆が参加した。自分の被害ではなくても黙々と作業するその姿はとても頼もしく、誇らしく思えた。

税というものは、これとよく似ていると思う。私達がボランティアに取り組むように、助けられる人が助けを必要とする人のために納めるものだ。バスも同じで、通いにくいという私達のために他の人が手を差し伸べてくれている。そうして支えあえることが本当に平等ということだと思う。私の払う消費税はほんのわずかなものだけれど、きっと誰かのために役立っている。床上浸水した家や、壊れて建て直さないといけない家は、加佐にも多くあった。そうした家には税金から補助してもらえることがあると知った。そのお金の中には私の納めたものもあるかもしれない。被災しなくても懸命に活動する友人達はとても頼もしかった。それと同じでいつか私がもっとたくさんの税金を納める日が来たら、その時は誰かを支える頼もしい大人でありたい。『義務だから仕方なく』ではなく、支え、同時に支えられてもいる誰かのことを思って税を納められる人になりたい。ただそれまでは校舎や教科書、もちろんバスも、私達に日常を過ごさせてくれる人達に感謝して使う。それがその人達や税に対する礼儀だと思う。

私の夢

池田市立渋谷中学校 3 年 青山 早恵

それは、突然のことだった。私は中学一年生の夏休み、母と一緒に祖父母の家へ帰省することにした。久々に部活が休みだということと、従姉妹達に会えるということが楽しみで、わくわくしながら家をあとにした。

「パパ、行ってくるね。」

しかし、これが父と私の最後の会話になってしまったのだ。私と母が出かけた次の日、父は急な病で他界した。最初は悲しみと驚きで涙も出ず、ただただ呆然としていた。時間だけが過ぎていき、私の心はからっぽだった。

そんな時、私の恩師が一通の手紙を届けてくれた。そこには、こう書かれていた。

「あなたの周りで何が起きて、何が変わっても、あなたの将来は変わりません。夢を叶えるチャンスはみんなに平等にあります。あなたが自分の力で、自分の夢を叶える日が来ることを、私も期待しています。」

私の目から、やっと涙が溢れて、止まらなかった。私はその時、泣きながら、絶対に夢を叶えると強く思った。

私の夢は、祖父のように立派な歯科医師になることだ。私は父の通夜の前夜、父に手紙を書いた。そこで、絶対に歯科医師になると約束した。しかし、転校などで環境が変化し、母が働き出すと現実を知った。母は私が生まれてから、ずっと専業主婦だったので十三年ぶりにまた新しく働いて、十分な生活費を稼ぐのは、とても大変なのだ。歯科医師になるには多大な金額がかかると知っていた私は、夢を諦めようと思い、母に話した。すると母は、一人親家庭のために税金で担われている児童扶養手当や、国が税金を財源に貸与してくれる奨学金のことを教えてくれた。私はその時、初めて税金について考えた。それまでは、税金が誰のために、どのようなことに使われるのか知らなかった。調べると、税金には様々な種類があり、様々な所でみんなが公平になるように使われているそうだ。私は今まで、周りの大人や友達が助けてくれていることにはすごく感謝していたが、税金にも支えられていることに気付いた。間接的ではあるが、日本で税金を納めている人々にも支えられていたのだ。私は恩師の言葉を思い出した。そして再び、このようにたくさんの人々に支えられている夢を必ず実現させると強く決意した。

今、私の夢は二つある。一つは、父との約束通り歯科医師になることだ。「歯は口を変え、口は顔を変え、顔は表情を変え、表情は人生を変える」という言葉のように、私が歯を治療して人の役に立てる大人になりたい。もう一つは、大人になってもきちんと納税をすることだ。私はこれからたくさん税金に支えられるだろう。だから、未来の子供達のたくさんの夢を叶える支えになるためにも、自覚と責任を持った納税者になりたい。今も納税者一人だが、夢を叶えて自分で稼いだお金で納税をし、恩返しをしたいと思う。

税の使い道

天理中学校 2 年 春野 莉菜

今年、私のクラスを担当してくれた体の不自由な教育実習の先生との出会いをきっかけに、今まで考えもしなかった税の使い道について思うようになりました。

先生は大学時代、運動中に大けがをされ、脊髄を損傷して以来体を自由に動かせず、車イスの生活をされています。健康な私には分からない苦勞をたくさんされていると感じました。学校にはエレベーターやスロープがあるので、そこでの移動は出来ていましたが、例えば鉄道駅やその周辺の施設などでは充実している所と、そうではない所があるように思います。私は気になったので、祖母に聞いて見たら、上りのエスカレーターがあっても下りがなかったり、エスカレーターもエレベーターも付いていない駅もあって、高齢者が荷物を持って階段を下りるのには大変な恐怖を感じるのだそうです。高齢者や身障者にとって、何が快適で、逆に何に不自由を感じるのか丁寧に調べた上で、より良い生活環境が整った町作りへの対策に税金が使われると安心して暮らせる社会になるだろうと思いました。

集めた税金で最も多く使われているものは社会保障です。高齢化が進む日本では今後ますます体の不自由な方が増え、公共施設のバリアフリー化やノンステップバス、停留所や駅のホームなどでの高齢者や身障者に優しい設備を整えることが必要です。そのためにはしっかり国民全体で税の使い道について考えて、みんなで税金を納めていくことがとても大事なことだと気づきました。

私が今直接納めている税金は消費税で、今年度からは税率が五パーセントから八パーセントに上がり、買い物をするたびに消費税が上がったことを実感しています。今後は社会保障に使われる費用を負担するために、さらに消費税の税率が上げられることが予想されます。しかし、日本の消費税率は、外国と比べてもまだ低い方で、これからもっと税の使い道を分かりやすくして身近に使われていることを知っていけば、たとえ税率が上がっても安心して暮らせる社会のためならばと、納めることが当然のように思える人が増えると思います。

教育実習の先生は、不自由な体の中でまだ動かせる部分を懸命に使って私たちに授業をして下さいました。世の中には先生のように、残された能力を使って生活している方々や若い頃のように自由に体を動かすことが難かしくなった高齢者の方々がおられ、そういった方々に優しい社会づくりに税金がどんどん使われていって欲しいと思います。

多くの人に支えられて

和歌山市立河北中学校 1 年 田中 美羽

二〇一一年九月紀伊半島を豪雨がおそい、河川の増水などの水害、土砂災害が起こり多くの人が犠牲となった。

その頃私は二学期の始業式を終え、いつものように「ただいま」という明るい声と共に帰宅した。しかし母はいつもと様子が違い、少しの間をおいて「おかえり」と言った後「おじいちゃんが亡くなったで。」と暗い表情で言った。私はショックでその後の事はあまり覚えていない。その後家族四人で車に乗り祖父の待つ新宮へと向かった。車の中で私は遠いことを理由になかなか会いに行けなかったことを後悔した。一刻も早く祖父の顔が見たいと思っていた私達の前に降り続いた雨で道路が冠水していて田辺から先へ進む道が寸断されてしまった。何時間もその場で待っていたが雨はどんどん激しさを増し、その日道路が開通することはなかった。仕方なく田辺で泊まることとなった。外では今まで見たこともない程の雨が降り、早く行けなくて申し訳ない気持ちでいっぱいだった。次の日、昼頃ようやく道が開通された。新宮への道を急ぐなか、信じられない光景が目に見え、倒れ流された木やがれきの山や、大きな岩や車までもが流されてきた様子だった。いつもの見慣れたのどかな田舎の風景から一転、変わり果てた町の姿がそこにあった。そんな道を進む中、がれきを片づけたり、黙々と作業を続ける自衛隊、警察、消防の人の姿があった。幸い祖父の家に被害はなく、無事通夜とそう儀を終えることができた。

あれから月日が流れ、帰省するたびに復興を実感することができるが国道ではまだ山肌が見え、災害の大きさと復興することの難しさを痛感した。仮設住宅の建設や自衛隊、警察によるそうさく、救助活動には多くの税金が使われただろう。そしてこれから完全に復興し、災害に強い町をつくるためにはもっと沢山の税金が必要となってくると考えられる。税金とは人が暮らしていく中で必要不可欠なものであり将来、私が仕事をし税金を納められるようになった時、その税金が人の役に立てるなら心から嬉しく思う。あの日突然起こった大災害を通して、家や大切な人をなくし、悲しみや苦しさに負けずに一生懸命、復興に力を注いだり、互いにはげまし合っている人々の姿を見て、大好きだった祖父を亡くしたばかりで毎日悲しみや苦しさに負けて泣いてばかりだった私はその人達に元気付けられ、前向きに現実と向き合い、天国で見守ってくれている祖父に恩返しをするつもりで毎日楽しく、笑顔で前向きに過ごそうという気持ちになった。そして、たとえ復興して全てが元通りになってもあの時たくさんの人の力や税金の偉大な力のおかげだということを忘れてはいけないと思う。

税金の力

広島市立安佐中学校 3 年 米澤 奏音

夏休みも終わりに近づいた、八月十九日。この日は、激しい雨と雷が鳴り止まない不気味な夜でした。紫色の雷の色と、窓も揺るがすほどの雷鳴りが怖くてなかなか寝付けませんでした。

次の朝、ニュースで昨日豪雨が大惨事になっていることを知り、テレビの映像にがく然としました。私が母と買い物に行くショッピングセンターの周辺の道路は冠水していて通れなくなっている、という情報も姉がネットで調べて教えてくれました。これは、「平成二十六年八月豪雨」とも言われる「広島土砂災害」で、私達家族の生活圏内で信じられないような被害を受けました。

二十日の朝、母が車で職場へ向かったのですが、土砂が多くて道路が寸断されているために交通規制があり、通った道をう回しなければならなかったのですが、警察の方が多勢出ていてくれて、誘導して下さったので、通ったことのない道だったけれども無事に通ることができた、と聞きました。

また、学校から帰ってきた兄からも、6 府県警の広域緊急救助隊、及び 4 府県の緊急消防援助隊が派遣されていて、他府県ナンバーの緊急車両がずらりと並んだ写真を見せてもらいました。私は写真を見てその数の多さに圧倒されました。区内機動隊、自衛隊、消防と、多くの人の力が広島に集まっているのを感じると同時に人のすごさを実感しました。

税金に関しての授業を受けて、税金が国や地方公共団体が行う活動の財源となることを学びました。税金は、国民の「健康で豊かな生活」を実現するために使われることも知りましたが、今ひとつピンと来ないことでもありました。何不自由ない暮らしができることがもうすでに「あたりまえ」で何もかもが「あたりまえ」のような思いもあったからでしょう。

被害にあってから、痛感するのは残念なことではあるのですが、今回の土砂災害があって、住民一人一人の活動では微力なことも、国や政府が動いてくださるということは、住民一人一人が有志で動く何倍もの力があることを知りました。

母が土砂かきでスコップ五杯で土のう袋がいっぱいになり、十袋で一mの道路がきれいになったそうです。それでも、大きな岩を動かしたり行方不明の方々の捜索には、警察や消防、自衛隊の協力が第一に必要だと思いました。

災害にあわれた方々が健康で文化的な生活・社会に一日でも早く戻れるように、警察や消防等の続けての活動に期待するとともに、私も「できることをすることから」始めます。

国民が納める税金が災害にあわれた方々の暮らしに有効に使われることを願います。

「今」を支える税金

萩市立萩西中学校 2 年 山中 彩耶可

今年の二月、我が家に一大事が起きた。一緒に暮らす祖母が、救急車で宇部の大学病院まで救急搬送された。祖母は、くも膜下出血と診断され、医師や看護師に付き添われ運ばれた。八時間にも及ぶ緊急手術を受けたのだ。数日後、見舞いに訪れた救急救命センターの一室では、テレビドラマのような光景に、息をのんだ。そこでは、壁面いっぱいに置かれた医療機器から伸びたコードやチューブ、そして点滴の管が祖母の命を守ってくれていた。

祖母は、二度の手術とリハビリの後、三ヶ月たった五月、奇跡的に後遺症もなく元気に戻って来てくれたが医療費の内容に驚いた。

「たったこれだけの支払いで済むの？」

思わず口をついて出た言葉だった。七五〇万円を超える総医療費。しかし支払ったのは三十万円程度だという。意味が分からなかった。

母によると、通常でも七十歳を超える祖母の場合、一割負担だという。今回のケースでは、高額医療制度というものがあり、ひと月一医療機関で支払う医療費の上限額が四万四千四百円。それに病衣代や保険適用外特別室料を足したものを支払っただけらしい。計算してみるとたったの四パーセント程度しか支払っていない。しかも、高額療養制度というもののまで存在し、ひと月の自己負担額を超えた部分は後日後払い戻されたようだ。その中で何より驚いたのは、皆の納める保険料や税金によって支えられているということだった。

何てすごい制度なのだろう、祖母の命は、直接関係した人たちだけではなく、見知らぬ無数の人たちに助けられたのだと知った。今の日本の医療保険制度や税金のシステムに本当に感謝した。もしも、これがなかったとしたら、救急車利用代や救急隊員の人件費、医療費金額支払いとなり、我が家の家計は大変なことになっていたかもしれない。いや、その前に救急車も大学病院もなかったのかもしれない。色々想像すると恐ろしくなってきた。場合によっては、大切な家族を見放さなければならなかったかもしれないのだ。

そう考えると私たちの生活にとって、「税金」は切っても切れない本当に大切な関係にあると思った。この平和な日本で過ごせるのも、税金のおかげと言っても過言ではない。道路、消防署、警察署、学校、水道、ゴミ処理、災害時の自衛隊出動など数え切れないほどだ。一人一人が納める税金はわずかでも、それが大河となり、誰をも潤すかのように私たちの生活を守ってくれているのだ。

しかしながら、税金の無駄遣い、不正受給脱税など悲しいニュースが流れてくる。救急車の適正利用を訴える市報にも絶句する。一部の人たちの行動かもしれないががっかりさせられてしまう。モラルのある大人であって欲しい。皆が大切に使い、納めることへも誇りが持てるような社会であって欲しい。税金に支えられ、「今」を過ごせているのだから。

私の命を救ってくれた税金

岩国市立平田中学校 2 年 木村 未唯

税金とはなんなのか、知る機会に巡りあえたのは、小学校 3 年生くらいの時に行われた税金教室のことでした。残念ながら、幼い頃の私には少し難しく、よく分かりませんでした。そもそも、税金とはどんなものなのか、あまり理解できなかったというのが大きいと思います。私には税金と直接かかわることになる機会はないだろうとも思っていました。

しかし、それは大きな勘違いでした。私は生後 5 ヶ月くらいから 4 歳までの間、税金にとってもお世話になっていたのです。何故なら生まれて 5 ヶ月くらいした時、「特発性血小板減少性紫斑病」と言う原因不明の難病にかかってしまったからです。この病気は、大人の女性の人に患者が多いことが調べてわかりました。この他にも私は、生まれつき体が弱かった為、色々な病気にかかったのだそうです。こんな私の治療費を全額払える様なお金をまだ若かった父と母がもっているわけありません。しかし、山口県に難病の人の治療費のほとんどを負担してくれる制度があった為、私の治療費はなんとか払えていたそうです。この時の治療費を払うために県が使ってくれていたお金が税金です。生まれた時から税金のお世話になっていたなんて思いもよりませんでした。

よくよく考えてみれば、私たちへの身の回りには税金でつくられたものがたくさんある気がします。たとえば、いつもみんなが歩いたり、車で走ったりする舗装された道路や信号機も、警察の人が事件のときにすぐ動いてくれたり、自衛隊の人がいるのも、救急車が無料なのも全て、税金のおかげなのです。他の国では、救急車を呼ぶのにお金がかかったりする国もあるそうです。

それなのに今、税金をちゃんと納めない人や、税金を自分の為に勝手に使う人、税金を納めているからといっていばったり、警察の人達を税金泥棒などと罵る人がほんの少しだとしてもいるのじゃないんでしょうか。増税のことだって、5 %から 8 %、8 %から 10 %へとどんどんあがっていくのでしょうか。そのことについて文句を言う人もいるかもしれません。私だって、消費税があがったのはびっくりしたし、文句を言いたくもなりました。

しかし、税金を納めることによって誰かの尊い命が、もしかしたら自分の大切な命が救われるかもしれないということ、そして毎日を安心して生きていけると言うことをもう一度考えてみてください。

私は、自分の命を救ってくれた税金が大人達のお金であったことを理解し、大人になった時、小さな頃を思い出し、「次は私が」と言う気持ちで、税金をきちんと納めたいと思います。

私を助けてくれた、たくさんの人の事を思い、次の世代の人達が安心して暮らせる為に私がもらった「優しさ」と次へと、税金を通してつなげて行きたいです。

この前、自動販売機に行くと、いつものお茶が少し高くなっていた。持っていたお金では足りず財布から二百円を取り出しお釣りをとった。ああ税金が上がったんだなと実感する出来事であった。

聞いてみると税は国民のために使われているんだと知った。しかし、少子高齢化が進みだんだん人口が減少している日本で、なぜ税金はだんだん上がっていくのだろうと不思議に思った。増えた税金は何に使われているのだろうとも思った。

調べてみると次のような事が書いてあった。

「現在、少子高齢化現象により現役世代の社会保険などの負担が年々高まりつつある。そんな中、所得税や法人税など特定の者に負担が集中する税よりも、高齢者、学生などを含めて広く負担する消費税の方が、高齢化社会において増税するのにふさわしい税である。」

この文章によると、増税は大人だけでなく、私たち学生にも少なからず影響を与えているのだということが分かる。私たち大人に比べればとても小さく少ないが、もう充分税金を支払い、支える側なんだということだろう。

税金は何を買っても付いてくる。大きな買い物をすればそれなりの税がついてきて高いし迷惑だと思うけど、これも自分たちのためだから仕方ないと思っていた。しかし実際税金がどれだけ自分にメリットがあるのか私は知らない。結局増税したのは増加した高齢者の介護や年金のためだと思っていた。今まで親戚や家族に大きなケガもなく、入院もない良いことなのだが、だから逆に「あの時は本当に税金に助けられました！！」などという体験が無い。だから私にはあまり税金のありがたみというものがない。母にそのことを聞くと、「子供はあまり分からんやろな。私もあんまり分からんし。」と言われた。でも実際「身の回りの税金によって作られている物、成り立っている物」について話し合うときりが無いほど例を挙げられるのだ。今ある道路も税金で作られている。学校もたくさんの人が納めた税金で作られた。教科書もそうである。こう思うと税金の恩恵は『大事がないから分からない』のではなく『身近すぎて気付かない』のだと分かった。世の中は脱税という犯罪が後を絶たないが、そんなことをする人はきっと税金の恩恵に気付かなかったのだろう、と思う。私達は自分の生活を見つめ直し、税金を払わなければならないという大切な義務の意味と役割に気がつかないといけないのだ。そして日常のいたる所にあるその義務は必ずまっとうしなければならない。なぜならその義務を今まで誰かが果たしてくれていたから私達は今まで生きてこられているからだ。

最後に私はこの課題を通してとても大切なことに気付けたと思う。今までとは違った気持ちで百八円の八円と暮らしていけるだろう。

「あなたは増税に賛成ですか、反対ですか」

高知県立安芸中学校 3 年 松村 菖

国民は、法律の定めるところにより、納税の義務を負う。これは、日本国憲法の第三十条の文章です。税金は家計に負担をかけているけれど、税金の存在自体に反対している人は少ないように感じます。それは国民の皆さんが、税金が無くなった場合の社会を想像したことがあるからだと思います。救急車や消防車を呼ぶのにお金が必要になり、公共事業がなくなるため道路は荒れてしまいます。私なら、そんな世界は絶対に嫌です。税金に支払う分のお金が自由に使えて生活が楽になるはずなのに、逆に苦しくなってしまいます。税金のおかげで、私達は安心して暮らすことが出来るのです。実際にそのような出来事がありました。私の住む高知県安芸市では、近年起こるとされている南海地震に備え、避難経路の整備を行っています。私の家から五分以内の場所にも、新たに二つ整備されました。海が近いので津波が心配でしたが、避難経路のおかげで安心感が増しました。

ところで、今年度から消費税が八パーセントに上がり、反対の声も数多く聞きました。増税をすると社会はどう変化するのでしょうか。真っ先に思い浮かぶのは、税の負担額の増加です。増税によって、贅沢な物を減らす家庭もあるでしょう。私も、好きな食べ物や商品が買えなくなると困ります。想像をそこで止めてしまうと、損ばかりのように思えますが、政府は税金で得た収入を捨てているわけではありません。少子高齢化が進む日本にとって、福祉の充実には欠かせないことでしょう。お金の心配なく医者にかかるのも、税金のおかげです。しかし、社会保障関係の支出額は年々増加しています。さらに将来は、少ない若者で多くの高齢者を支えなければならなくなり、私達の負担が重くなっていくかもしれません。それでも私は、福祉にお金をかけるべきだと思います。お年寄りや、介護しなければならない「邪魔」な存在ではありません。逆に、今までの社会を担ってきてくれた、大切にすべき存在だと私は考えます。人間は時の流れを変えることは出来ないのだから介護はしかたのないことです。いずれ私達も大人になり社会を支え、そして今度は若者に支えられるようになります。今は増税すると損をしているように感じますが、その苦労はいつか良いことになって、自分に返ってくるのです。目先のことにとらわれず、常に先を追っていけば、増税に賛成か反対か、おのずと考えはまとまってくると思います。今私は賛成ですが、数年後、十数年後の考えは違っているかもしれません。なぜなら成長すれば今の私には全く縁のない多くの税が関わってくるからです。でもそれは、よく考えて出した結論でしょう。正解は一つではないかもしれませんし、一つもないかもしれません。でも、自分で考え抜いた結果出た答えが、私は正解なのだと思います。

「あなたは増税に賛成ですか、反対ですか」

税金が救う災害

篠栗町立篠栗中学校 3 年 三船 千瑛子

大雨が降るたびに思い出す。あの時のことを。

五年前の七月、篠栗町に豪雨が襲った。特に、私の住む山間部の被害は大きかった。裏山から「ゴーッ」という音を立てながら、大量の土砂が流れ込んできたのだ。家の裏は、まるでナイアガラのような滝のようだった。また、人よりも大きな岩が流れてきて、道路を塞いでしまった。避難勧告が放送された時には、我が家は既に孤立状態に陥っていた。

翌朝雨はやんでいった。幸い、家屋が倒壊することはなかった。しかし家の周りには、大量の土砂が積もっていた。長靴をはいて外に出てみると、足はどんどん沈み、抜こうとしてもなかなか抜けなかった。「この状態では山を下れない」と、不安が募った。

そんな時、大きな重機が現れた。その重機は、岩や土砂をあっという間に取り除いてくれた。近くの旅館に宿泊客がいたこともあって、役場の方がすぐに来てくださったのだ。私は一安心した。だが、すぐに次の問題が見つかった。山を下る道の途中で、道路の一部が崩れていたのだ。時間がかかるだろうなと思ったが、わずか三日後に仮工事が行われ、車一台分通れるようになった。だから私は、すぐに駆けつけていただいた方々に、とても感謝している。

なぜ私がこの話を書いたかという、この急速な復旧には税金も関係すると思うからである。重機を動かすにも、工事をするにも、お金がかかる。それでもすぐに作業ができたのは、日頃納めている税金があったからだ。もし税金が無かったら、復旧にはとても時間がかかっていただろう。だから、税金を納めることは、とても大切だと思う。

今年四月、消費税が八%になった。日用品が値上がりしたため、負担が増えて苦しいという声もある。しかし私は増税には反対しない。なぜなら、税金は国民のために使われるはずだからだ。私が体験したような自然災害は、いつ起こるか分からない。いざという時にすぐに対応するために、増税にもきちんと取り組んでほしい。

ただし、大切な税金だからこそ、使い道はよく考えなければならない。国民が頑張って納めたお金を、全く関係のないことに使うなんて言語道断だ。しかし最近、税金が無駄にされていると報道されているのを知った。増税に苦しむ人々がそんなことを聞いたら、不満を口にするだろう。それでは、いつまでも対立が続く。私は、もっとお互いのことを理解してほしいと思う。国民は増税に協力し、税金を扱う人は責任をもって使う。そうやってお互いの溝を埋めていけば、もっとすばらしい国になるはずだ。私は、未来を担う世代の一人として、より良い国になるよう貢献していきたい。

「税金」に支えられた私達家族

佐賀県立致遠館中学校 3 年 庄司 葵

私が生まれる前、祖母が脳卒中で倒れました。I C Uに入り、一時はとても危険だったそうです。それでも意識を取り戻し、私は祖母と出会うことができました。左半身マヒ。祖母には大きな後遺症が残りました。私が覚えているのはリハビリを終えて家に帰宅した祖母です。あまり遊んでもらうことはできなかったけれど、たくさん話を聞いてもらいました。

私達にとって税金は八パーセントの消費税という印象でしかないと思います。でも私や祖母、祖母の家族にとってはなくてはならない大切なものです。私達が納める税金はみんなが安全に快適に暮らせるように公共施設やさまざまなサービスで使われています。税金がないと、急病人がいても救急車がこなかったり、病院代が払えなかったり、とても不便です。私達の生活から税金がなくなると、豊かな暮らしができなくなり、今までの当たり前の生活がなくなってしまいます。それは私達にとって想像もできない現状を見せられるのではないかと思います。

私の祖母は在宅介護サービスを受けていました。祖母も仕事をしていたので、その分も祖父が働くようになり、祖父に代わってお世話してくれたのは介護ヘルパーさんや、デイサービス施設の方々でした。祖父一人では決して出来ない介護や心のケアもしてくれました。家に入出入りする介護サービスの方々を見て体力も必要な仕事なのに素晴らしいなと思いました。症状が悪化し、二年半前から病院で過ごしている祖母は体が細くなり、今ではしゃべることもできません。それでも長い間祖母と過ごす時間を与え、私達を支えてくれた方々にとても感謝しています。祖母のリハビリ、療養を支えてくれた病院や介護サービスの方々の原点となっていたのは国民が納めてくれている「税金」であることを知り、日本国民に支えられている私達は幸せだなと感じさせられました。

しかしその税金を滞納している人もいると知り、驚きました。国民の義務として、一人の人間として自分のすべき義務をしっかりと果たせる人になりたいです。祖母が倒れてから約十五年。税金のお陰で数々の恩恵を受け、さまざまな立場から支えていただいた私達家族……。一分一秒を必死に生きている祖母……。これからの生活も様々な形でたくさんの人々に支えていただくことになると思います。「税金」という大きな存在と税金で働いてくれている方々、そして何よりも「税金」を納めてくれている国民すべてに対し、感謝の気持ちを忘れず、今日も私は祖母と共に生きていきます。かけがえのない時間と思い出を支えてくれている方々へ……。ありがとう、これが私の生きる力となっているのです。

私と「負けんだるま」と税金

長崎県立諫早高等学校附属中学校 3年 山本 樹

私が小学五年生のときに東日本大震災が起きました。激しい揺れ。津波に飲まれる街。大量に積み上げられた瓦礫。そんな目をおおうばかりの悲惨な光景を今でも覚えています。「私たちにできることは何だろう」と考え、小学校全体で節電や節水、募金を行いました。さらに、文房具や応援メッセージを福島県郡山市の小学校へ送りました。すると、お礼として「負けんだるま」とビデオレターが届いたのです。ビデオレターの中で、自分たちが作詞作曲したという歌を全校生徒が歌ってくれました。「福島が大好きだから離れたくない。前を向いて進んでいこう」という思いが伝わってきました。聴き終わって涙がこぼれました。元気づけるはずのこちらが「頑張ろう」と思えたのです。

このような交流があった福島県などの被災地の復興には税金が使われています。もちろん被災地だけでなく私たちも税金の恩恵を受けています。道路や図書館、学校、教科書。様々なところで税金は姿を変えて私たちの暮らしをサポートしているのです。税金がなかったら今のような便利で豊かな生活は送れません。現在の暮らしは税金のおかげであることをみんなが意識することが大切だと思います。そうすれば、税金を納めることができるのに納めない人はいなくなるのではないのでしょうか。私は大人になったら、税金の重要さを心に留めて納税したいです。今の子どもたちが同じような気持ちをもってくれたらいいなと思っています。

ところで、二〇一四年四月から消費税が八パーセントになりました。賛否両論様々な意見がありましたが、私は増税は少し嫌だなと思っていました。家計が苦しくなる世帯が増えるのではないかと不安だったからです。しかし、ニュースで高齢者の年金や震災の復興のために使われると知りました。私の頭の中には、福島県のあの小学生の姿が浮かんできました。私が払った消費税があの子どもたちの役に立つのかもしれないと考えると少し嬉しくなりました。だから、消費税が上がっても文句を言わずにきちんと払おうと決めたのです。今の私は消費税しか払っていませんが、大人になったら納税はしっかりするつもりです。だから、税金を何に使うのかもっと具体的に説明してほしいです。そうすれば、税金でつくられたものを大事にしようという意識が強くなるのではないかと思います。

最近、税金を自分の旅行費として使用した人がいるというニュースが相次いでいます。どうしてそんなことができるのでしょうか。税金を何だと思っているのでしょうか。そんなことに使うくらいなら、震災の復興のために使ってください。被災地の未来ある子どもたちのために使ってください。私に「頑張ろう」と思わせてくれた、元気をくれた大切な彼らのために。

税金に支えられて生きる

長崎市立岩屋中学校 3 年 山川 紗矢

皆さんは「税金」と聞いて、どのようなイメージを思い浮かべますか。私は税金にあまり興味がなく、まだ無関心だった頃は「取られるだけで嫌だ」と思っていました。しかし、その税金の使い道を親に教えてもらった日から、私の意見は百八十度変わりました。税金に支えられる日々は、本当に間近にあったのです。

私の父は、私が生まれたときから既に海の事故で身体が不自由になってしまい、身体障害者として生きていました。私が小学校低学年のころは、杖をつき、少し危うい足取りでも授業参観に来てくれたり、家族でドライブに行ったりと、特に不自由だと感じることはありませんでした。しかし、父は段々と動ける動作が限られてきました。看護師の母は違和感を覚え、大きな病院で診察を受けさせることにしました。一回目は異常なしと言われましたが、もう一度頼んで診察を受けたところ、父の病気が発覚しました。難病と言われている、「筋萎縮性側索硬化症」。今年放送されたドラマでもあったのですが、「ALS」と言われる病気です。体中の筋肉がおとろえていく一方、痛み、かゆみなどの感覚を伝える組織は全く正常のまま、二、三年の経過で筋力低下が急速に進行し、呼吸まひで死亡してしまいます。この事実を母から聞かされたときは、頭がおかしくなりそうで、とても笑って生きていけるとは思えませんでした。

それでも私達家族は、時間をかけて前を向き、生きていくことを決心しました。父の病気は、原因不明で医療法が確立されていない上、経済的な面や、人手が必要なために家庭の負担がとても重いです。しかし特定疾患と認定されている病気の一つであるため、様々な面で公費負担の対象となりました。入院費や訪問看護費、医療費や薬代、福祉用具など、必然的に母一人だけで支えていかなければならない生活費の、きっと抱えきれない相当な分を負担してくれました。それに、毎日訪れるヘルパーさん達はとても優しく、そして明るいです。寝たきりで外に出ることが出来ない父は、その人達の笑顔に元気をもらっています。私は恥ずかしくて家族には言えないけれど、そんな光景に安心感を覚えています。そして、最近になって、父は私達に人工呼吸器をつける決心をしたことを打ち明けてくれました。呼吸器をつけることは、この病気にとってはある意味辛い選択でもあります。それでも私達家族と一緒にいたいと願ってくれたことが、何よりも嬉しかったです。

私は税金について考えることをきっかけに、違う視点から父の病気と向き合うことが出来ました。そしてその「税金」が他でもない、私達の支えになることを、深く理解することができました。今の私達家族の毎日は、色んな形で支えてくれる、沢山の人々への感謝であふれています。「税金」とは私達にとって、毎日の生活を支えてくれる大切な光なのです。

「いつか支える側に」

竹田市立久住中学校 3 年 渡邊 大和

僕はこの夏、おへそから細菌が入り、病気になった。夏休み中に急に入院することが決まり、手術をすることになったのだ。僕は手術は初めてで、そのことも不安だったけど、もう一つ心配なことがあった。それは手術の費用のことだ。僕の姉はこの春結婚し、式も盛大にあげた。そういうこともあり、僕は両親に「手術とかやっぱりお金とか大変何やろ。姉ちゃんの結婚式もあったし。」と聞いた。そうしたら母は「うーん、そうなのよ。」と微笑み、父は「お金のかかる息子だな。」と大声で笑った。拍子抜けしたけど、何だか安心できた。

夏休みに入り、僕は病院に入院した。二日後に手術があると言われ、僕はまたお金のことが心配になった。父や母に大きく負担をかけているのではないかと、心配でたまらなくなった。でも、また同じ事を父や母に聞くのもためらわれたので、自分の中でモヤモヤしたままだった。

手術当日、僕はとても緊張して苦しくなった。手術が初めてということもあるが、もう一つは僕の心を大きく占めていた手術代のことだ。僕は思いきって先生に聞いてみた。

「手術って、やっぱり高い金額がかかるのでしょうか。僕の家は春に大きな出費があったので、心配なんです。」すると先生は、「もちろんお金はかかるけど、税金ももたっている保険料が使われるんだよ。困っている人がいれば、みんなで支え合うしくみが社会保障制度というものなんだ。心配せず、体を治すことに集中しようね。」と言ってくれた。

なんだかとても安心して、全身麻酔もたったの一秒で効いたそうだった。手術もすごく順調に終わったと聞いた。

目を覚ますと、ベッドの横に母がいた。ふと手術直前の先生と話した事を母に話した。

「そうよ。だからみんなに感謝して、速く治さないとね。」母はまた微笑みながら言った。夏休みのベッドの上は退屈だったけど、二週間あまりで無事退院できた。

今回のことで、僕は税金というものについて考える機会を得た。税は何のために必要なのか、うまく一言で言えないけれど、僕は街の姿を思い浮かべる。きっと日本中の街やそこに暮らす人々の生活も、お互いの助け合いと支え合いで成り立っているのだと思う。目には見えないけれど、支え合いの大きな輪がこの社会にはあるのだ。僕も将来、きちんと税金を納められる大人になろう。そして今度は、誰かを支える側にまわりたい。助け合いと支え合いの、大きな輪の中に入って。

「税」は支える

鹿児島市立西紫原中学校 3 年 鮫島 菜々子

母子家庭という名で暮らし始めたのは、私が十歳の頃であった。一見元気そうに見えた父の疲労は計り知れない程溜まっていたのだろう。くも膜下出血だった。前兆はあった。教員だった父は、ある日から体調を崩し、まだ幼かった私でもいつもと違う父に違和感を覚えたものだった。そんな日々が何日か続き、ある時の夜中から何を問いかけてもとうとう父が答えてくれることはなかった。

母と兄と私、そして父との幸せな日々は父が運ばれた日から十日程で、ついに終わりを告げた。短い闘病生活ではあったが、父は必死に戦っていたのだと、幼いながら強く感じた。

こうして、母子家庭という新しいスタートラインに立った私達家族。父を亡くした傷はそう簡単には癒えなかったけれども、悲しみに押し潰されそうな母を支えるのは、紛れもない私と兄だった。そしてまた、母子家庭の人々を支える為に税金が大きな役割を果たしていることを知ることができた。

例えば、所得税と住民税の減免である。これは母子家庭に限らず、父子家庭でも同じことである。しかしこれは、誰でももらえるものではないということも、知ることができた。

他にも遺族年金等も、母子家庭に給付されていることを知った。

今こうして、家族三人で暮らせているのは国民が納めている税金で成り立っていると言っても過言ではない。私達の身近な所には、税金という納めるべきお金でやりくりされているものがあるということも、少なくはないだろう。例えば、学生に与えられる教科書。これは、これからの未来を担う私達の為に税金で賄われている。そんな社会から大きな期待を私達は背負って、これから先世の中に貢献できるような大人になることが、私達の人生の最大の課題であるのだ。

教員としての職務をやり遂げ、最後の最後まで病と戦い続けた父は、一家の誇りであり一番に尊敬する人であったと、心から思う。

また、租税教室等を通して、改めて税金がどれ程大切なものであるか、身をもって痛感した。税は国を支え、国民を支えているということを忘れず、今度は国を支えている一員になれるように、一日一日を大切に生きていきたい。

正しい税金のあり方

宮古島市立平良中学校 1 年 砂川 智穂

税という言葉を知ると、小学生の頃学んだ「人頭税」が頭に浮かんできます。人頭税とは、その人の収入や仕事、年齢、男女に関係なく決められた金額を税金として支払わなくてはならないという、とても厳しい税金でした。私の住む宮古島では、一九〇三年に人頭税廃止が決まるまでの約二六〇年間、この税に苦しんだのです。琉球王朝によって決められた人頭税制度により、島の人々は家族が生活するための収入がなくても、自分たちの食べ物や時には家族の命を犠牲にしてまでも払わなければならない、税の支払いのために生きる奴隷のような暮らしでした。

もしも、これが今の税金システムだったらと考えると、ぞっとしてしまいます。働いて収入を得たとしても、大部分を税金として持っていかれてしまうとしたら、私はとても耐えられないと思います。

しかも、人頭税は自分に返ってくることはありません。払った税はすべて琉球政府や藩が自分とは関係のないことに使うので、何に使われているのか分かりません。

今と昔が違うのは、税金の使い道がわかるという点です。私たちの払う税金は、警察や消防、家庭から出るゴミの回収や処理などの公共サービスや、病院や図書館などの社会資本を提供します。今の税金は、みんなの暮らしを豊かにする大で必要不可欠なものなのです。

今と昔の違いは、もう一つあります。それは、人頭税は身分の低い人々の負担が大きかったのに対し、今の税制はよく考えられている点です。例えば、所得税は累進課税制度がとられており、収入の多い人はたくさん税金を収めるようになっています。また、所得の少ない人の生活を助けるために、社会保障が支出されたりします。

私たち中学生も、消費税という形で税金を払っています。以前の私は、いろんなものに税金がかかることに対し、正直税金は必要のない嫌なものだという思いでした。けれど、税金のおかげで住みよい社会があることを知りました。子供は誰でも義務教育によって教育を受けられることができ、部活をすることもできます。私が毎日部活で使うグラウンドや体育館、大会で使われる大きな競技場や体育館も、税金によって作られています。万が一、火事や事件が起きたとしても、消防署や警察署が私たちを守ってくれます。

今の税金は、一方的に奪われる人頭税ではなく、やがては自分に返ってくるものですが、今でも、昔の悪役人のように税金を無駄に使う議員や官僚のニュースをたまに目にします。それはごく一部のことであり、私たちの払った税金はみんなの暮らしを豊かにするために使われていることを信じたいです。

私はこれからも税について学び、正しい税金のあり方を判断できる大人になりたいと思います。

税による恩返し

帯広市立帯広第四中学校三年 桑原 未羽

私の曾祖父は今年で九十九歳を迎えました。そのため、最近はデイサービスというものを利用しています。そこは、歩くことや自分でご飯を食べられない曾祖父のお世話をしてくれる大切な場所です。

私達、家族はこのデイサービスにととても感謝をしています。家族全員が用事で家を留守にしなければならないとき、曾祖父を残していくことなど不安でできません。しかし、デイサービスに通い始めてから苦勞をせずに家を空けられるようになりました。曾祖父にとっても楽しい所なようで、時々見る曾祖父のデイサービスでの写真はすべて笑顔です。

しかし、このデイサービスを利用するのにはたくさんの費用がかかります。それを補ってくれているのが介護保険です。これは私達が納めている「税」から支給されています。これがなければ私の曾祖父はデイサービスを利用できませんでした。私の曾祖父は多くの人々のおかげでデイサービスを利用できているのです。

よく私は消費税なんて面倒くさいなあと思います。たしかに定価以外でお金を取られることは惜しいです。しかし、そのお金で私達家族のように助かっている人がいることを思うとそうはいってられません。こう考えていくと、なんだか私も税を納めることで人を助けたいと思うようになりました。まずは、消費税を納めることに抵抗を抱かないようにしたいです。

大人で、脱税をする人がいます。私にはなぜするのか考えられません。私は税を納めることは日本国の国民の一員になった証だと思います。私達は税のおかげで成り立っているのです。もし、税を納めない人がいるのならそれは納めている人からの優しさを裏切っていることになります。だから、どんな理由があっても税は納めるべきです。

私が大人になったら、必ず税を納めようと思います。今、私の曾祖父が税によって助けられているように私も大人になったら誰かを助けたいです。誰だって、そう思えば税を納めることが苦になりません。だから、まずはこの気持ちを父や母に伝え、税を納めないことがないようにしたいです。そして、それが大勢の人に伝わった時、私の住む日本という国は誰もが進んで税を納める国になると思います。だから、まずは私からきちんと税を納める人間になりたいです。曾祖父を助けてくれた人に恩返しをするために。

未来への「投資」

北上市立北上中学校三年 佐藤 竜馬

「102…。えっ、百二万。」

ショックと驚きで一瞬、頭が真っ白になりました。看護師さんから渡された僕の半年間の入院請求書に、七ケタの数字が並んでいるのです。僕の親は母一人です。母は、僕の養育のために一生懸命働いてくれています。こんな高額な医療費は払えるはずがありません。「どうしよう。」焦る気持ちを落ち着かせ、再度請求書をよく見ました。すると、下の欄に、「医療助成制度により、入院費、検査費、薬費、更にそれらにかかる税を免除。」と書かれています。そして、その横には「5526円」と印字されてありました。結局、食事代を含め、僕の入院費は「七万五千元」だったのです。我が家にとっては、この金額も、とても安いとはいえませんでした。これなら支払いが可能だと思いほっとしました。しかし、何故こんなにも安くなるのでしょうか。医療制度とはどのような制度なのでしょうか。

退院後、北上市のホームページで調べてみました。すると、市の予算書の中に「ひとり親医療費助成事業」という項目がありました。ひとり親が養育している子に対して、入院の場合は、一ヶ月五千元を除く全額を市が給付してくれるという制度でした。つまり、僕にかかった高額な医療費のほとんどは、市の税金から支払ってもらっていたのです。更にその他にも、教育援助費として、学用品費、給食費、校外学習費、生徒会費、PTA会費、クラブ活動費、修学旅行費、医療費等を支給してもらっていることもわかりました。

僕は、税金のことをほとんど知らずに暮らしていました。「税金を無駄に使うな」という言葉がありますが、僕は、税金を使うのは議員のような大人だというイメージを持っていたのです。自分の個人的なことにこんなにも税金を使ってもらっていたことを知らなかったことに恥ずかしさを感じます。自分こそ、税金を無駄に使ってはいないか、と自問自答しました。そして、こんなにも深く関わり、お世話になっていることを知り、税金とはありがたいものだと、納税者に感謝しています。この恩恵は自分が多額に納税できるようになることで、お返ししたいと思っています。

将来僕は、入院中にお世話になった研修医さんのような医師になりたいと思っています。それには、かなりの費用がかかると聞きました。以前は、我が家の経済状態では、よほど優秀でないと無理だったでしょう。しかし、二〇一四年一月に「子どもの貧困対策法」が執行されました。子供の将来がその生まれ育った環境に左右されることのないように、国が支援をしてくれます。税金は僕の希望です。税金は、住みやすい社会をつくるために使われ、子供の未来のためにも使われているということを、多くの人に知ってほしいと思います。納税は、輝きのある日本社会を実現させていくことにつながる、未来への投資なのです。

税について考えたこと

白河市立白河第二中学校三年 小林 友里恵

税は社会を豊かにするためにあるものです。その社会の一員として税を払うのは当然であって、私たちはその義務を果たさなければなりません。小学生の時、少しだけ税について勉強したので税の仕組みや、税を納めなければいけない理由も分かっているつもりでした。

中学生二年生の春休みに、私は市の国際交流事業で、姉妹都市のあるフランスにホームステイをしました。人の優しさを改めて感じたり、たくさんの美術品や建造物を間近で見られたりと、私にとって素晴らしい経験になりました。私は応募する前から知っていたことですが、今回の交流事業にかかる費用のうち、五万円は市の税金から補助金として出されていました。両親にも「税金で行かせてもらうのだから、しっかり学んできなさい。」と出発前に何度も言われました。私も自分はとても恵まれていると感じました。でもどこかで、「五万円だけ？」と思っている自分もいました。市の税金は何百億円とあるはずなのに、旅費の五分の一程度しか補助してくれないなんて…。

帰国してからは、フランスでしたことや感じたことなど、たくさん家族に話しました。その中で、私がフランスにいる間、ずっと気になっていたことを聞いてみました。「フランスって何を買っても日本より高い気がするんだけど、どうして？」すると母は、「ああ、フランスは消費税が二十パーセントだからだよ。」と教えてくれました。二十パーセント！私は八パーセントでも高いと思っていたのに。どうりでやたらと高い訳です。私は日本は消費税が八パーセントで良かったと思いました。

でもよく考えてみると、自分の考えが矛盾していることに気がつきました。私はフランスへ行く旅費に対して補助金が少ないことに不満を持っていました。ところが、消費税を払うのは嫌なのです。つまり税金は払いたくないのに、税金によるサービスは受けたいというわけです。

今まで私は税は大切だとか、みんなのために払うのだとか、分かっているつもりでした。でもこうして振り返ってみると、私は目の前のお金の動きだけを見て考えていました。やっと今、私は税の本当の意味や大切さに気付きました。補助金を受け取ったり、公共サービスを受けたりと、私たちが安心して豊かに暮らせるのは、税があってこそです。そしてその税を自分もみんなも、同じように負担するからこそ、意味があるのです。私もこれからは、きちんと税について理解し、社会のために、そしてもちろん自分のためにもしっかり税金を払いたいです。また、自分が払った税金を正しく使ってもらうために、選挙にも行きたいです。それが明るくて豊かな暮らしにつながるからです。

税による支援

水戸市立第三中学校一年 ト部 日菜

それは、三年前の九月二十二日の夜の事です。私たちは急いで近くの城東市民センターへ向かいました。台風十五号の影響により、水戸市内を流れる那珂川がはんらんのおそれがあり、避難勧告がでたからです。

私の家は、那珂川のすぐそばで、その日は夕方から水位が上しようしているという情報やサイレンの音を聞いてとても心配していました。母から「もしかすると、避難するかも知れないから準備していた方がいい。」と言われて、リュックに貴重品を入れて備えていたけれど、本当になるとは思っていませんでした。市民センターには、次々と近所のお年寄りや子供たちが集まってきました。そこでは毛布が配られて、みんなで寄りそっていました。

すると、午前0時に川の水位が八メートルの危険水位に達したために、流域の一万二千世帯およそ三万人を対象に避難指示が出されました。さらに真夜中に高台に避難しなければならず、私たち家族と祖父母は、水戸二中の体育館で一夜を過ごしました。そこでも、毛布や水が配られ、ようやく安心して寝ることができたのを覚えています。翌朝になってもまだ水位が下がらず、そこで朝食のお弁当など私たちの必要な情報や物を頂いて避難解除になるまで過ごすことができて、本当に助かりました。

あの時は分からなかったけれど、今考えてみると私たちの過ごした施設や頂いた物は、みんな税金でまかなわれていることに気がつきました。税金のありがたさを、改めて感じました。

今年も台風により、各地で土砂くずれや洪水がおきています。救助するための自衛隊や消防、避難所への物資の供給など国や県や市の支援も税金によるものです。また、東日本大震災の復興でも、多くの寄付や税金が使われています。一人一人納める税金は少なくても、みんなの税金が集まると大きな力になります。税金は、国民の安全を守り、安心して暮らせるために、私たちの生活になくてはならないものだと感じます。

納税は、私たち国民の義務となっています。私も以前は、「なぜ納税しなくてはならないのか」、「納税したお金はどのように使われているのか」よく分かりませんでした。税金の使い方については、県や市の広報やホームページでいつでも確認することができます。大切な税金が正しく使われるように、もっと興味を持って理解したいと思います。私も大人になったら必ず納税をして、未来も安心して暮らせる国になってほしいと思います。そして、今までしっかり納税をしてくれた方々に感謝したいです。

税金に支えられて

壬生町立壬生中学校三年 筒井 菜緒

一〇八円。いつも行く百円均一のお店の値段が変わった。百円均一だけではない。四月から全ての消費税が五％から八％に変わった。これは、私の少ないお小遣いでは高い出費になる。お小遣いは値上げしないのに、なぜ消費税は上がってしまったのだろう。

まず、税金とは何か調べてみた。収入を得ると納める所得税、会社や事業主が納める法人税などがある。消費税の他にもたくさんの種類があることを知った。こんなにも多くの税金を、一体何に使っているのだろうか。

国民から集められた税金は、国や地方自治体の事業に使われる。個人ではできない様々な公共サービスの費用を、みんなで負担し合っているのだ。

もし税金がなくなってしまったらどうなるだろう。私が払っているのは消費税だけなので、あまり考えたこともなかった。今思うと恐ろしい。消防車も、救急車も、呼べばお金がかかってしまう。公民の授業で教わったが、医療費も半分以上が税金で補助されている。税金がなくなったら、全ての費用を自分で負担しなければならないのだ。

また、教育費についても、税金によって支えられていることを知った。教育費は、私が知らず知らずのうちに最もお世話になっているものだ。ふと教科書の裏表紙を見ると、こんなことが書いてあった。「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待を込め、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」調べてみると、五教科全ての教科書の裏に同じことが書いてあった。今年度で九年間の義務教育を修了する。この九年間ずっと知らないうちに、両親だけでなく、税金を納める全ての人に支えられていたということだ。当たり前のように思っていた自分が恥ずかしく、勉強できることが本当にありがたく思えた。もし日本に税金の制度が無かったら、教育を受けることができなかったかもしれない。教育を受けていなければ、こうして今作文を書くことだって、できなかっただろう。

今、日本では少子高齢化が進んでいる。二十一世紀半ばには、国民の二・五人に一人が六十五歳以上の高齢者という超高齢化社会が予測されている。高齢者が増えるということは、その分医療費が増えるということである。しかし、それを支える若者の数が減っているため、一人一人の負担が大きくなるのだ。四月の消費税増税は、この負担を少しでも小さくするための対策だと、社会の授業で学んだ。

私が大人になり働くようになる頃、日本はどうなっているだろう。今の私があるのは、税金のおかげであり、税金を納めている方々のおかげでもある。それを忘れずに、今度は私も日本を支え、今までの恩返しをしたい。そして、また次の世代へつなげるよう、社会の一員としてきちんと税金を納められる人になりたいと思う。

ふるさとのためにできること

群馬県桐生市立中央中学校一年 石原 大地

今回、税金についていろいろと調べてみたところ、税金には、国が集める国税と、地方の県や市が集める地方税があることを知り、とても興味を持った。地方税は県民税・市民税など、そこに住んでいる人や企業がその地域に納める税金だ。人口や企業が集中する都会には多くの地方税が集まる一方、人口が減少している地方都市では地方税が減っていつてしまう。税収入が減ってしまえば、その自治体の行政サービスも低下してしまうことになる。そうすると、更に人がいなくなり、地方に元気がなくなってしまうのではないかな。

僕が住んでいる桐生市も人口が減ってしまっている地方都市の一つだ。父の話では、若者が都会などに出ていつてしまう傾向が強く、今では群馬県内でもトップクラスの少子高齢化都市になってしまっているらしい。若者など働く人が桐生から減るということは、税収入が減ってしまい、高齢者が介護サービスを受けたりするのも難しくなってしまうということだ。桐生市はとても住み良いまちだし、僕も大好きだけれど、このまま人口減少が続けば、どんどんすい退していつてしまうのではないかと心配になった。僕は税金のことを調べながら、どうしたら桐生市が税収入を増やし、すい退をくいとめられるのか、真剣に考えた。

人口減少に悩んでいるのは、桐生市だけではない。国では、地方都市を活性化させるためにいろいろな取組を行っていて、その一つに「ふるさと納税」という制度がある。ふるさと納税とは、ふるさとを離れ、他地域で暮らしている人が、自分が納める地方税の一部をふるさとに寄付できるという仕組みで、僕はとても良い制度だと思った。桐生出身で東京などに住む人たちの中には、桐生に強い思いを持ち、ふるさとが発展するために貢献したいと考える人もいるはずだ。そうした人たちがふるさと納税制度を利用し、桐生に納税してくれれば、市のためになるだろう。しかし、今のふるさと納税制度は、特産品のプレゼント合戦になってしまい、その地域に縁のない人が、特産品目当てに税金を寄付する傾向があるそう。それは、おかしいのではないかと僕は思った。なぜなら、地方を発展させるためにあるふるさと納税なのに、その地方に縁のない人が特産品目当てにその時だけ税金を寄付しても、本当に地方が発展するのか疑問に思ったからだ。

僕は、ふるさと納税も良いと思うけれど、地方が発展するためには、人や企業を地方に増やして、地方税を納めてもらうことが一番大切なことではないかなと思う。それには、人や企業が集まってくるような魅力あるまちである必要がある。僕は将来、どんな仕事をするかはわからないが、桐生に住み、納税して、桐生の発展に役立てる人になりたいと思う。

僕の弟は、歩くことができません。彼は、障害を持っているのです。そして、歩くことができない他に、1人で食事をすることも、話すこともできません。そんな僕の弟は、それでもとても楽しく毎日を過ごしています。家族に介助をしてもらいながら、たくさんの人に助けてもらいながら、毎日生活しています。

弟は、毎日の楽しい生活をおくるために、税金からも支えられています。僕の弟だけではなく、障害者の生活を支えていくことは、とても大変なことです。実際に、自分の母も、弟の世話に追われ、多忙な日々を過ごしています。1人でトイレに行き、排尿することができないので、オムツ替えなどの作業もあります。自分は協力するようにしていますが、母はその他に家事もしなくてはならないのでとても大変です。また、その負担を軽減させるために、障害者用のデイサービスを利用することもあります。歩けないので、車いすも必要ですし、介助されて歩くときには足につける装具も必要です。このように、金銭面でも時間の面でもたくさんの苦労がありますが、金銭面での問題を、たくさんの方が納めてくれた税金から支えてもらっています。車いすや装具、オムツなどを買うお金は、税金によって、負担してもらっています。障害と言っても、いろいろな種類の障害があり、症状も人それぞれなので、その人1人1人に応じたサービスや保障が必要です。これらのお金を税金によってサポートしていただけるのは、とてもありがたいことです。さらに、その税金は、駅や病院などの施設のバリアフリー化や、道路の整備などの、どんな人でも住みやすい町づくりに使われていると知りました。これは、本当に素晴らしいことだと感じました。

今年の四月に、消費税が五%から八%に上がりましたが、その分のお金が、どれだけ社会保障や、住みやすい町、暮らしやすい社会づくりに活かされているのか、とても楽しみです。増えた三%、いや、それ以上の社会保障の充実を期待したいです。

僕の弟は、障害を持っていますが、家族からの支え、周囲の人からの支え、そして税金の支えを受けて生活しています。僕の弟も、その他のたくさんの障害をもった方も、もっと住みやすい日本にしてほしいです。そのために、僕が大人になったらきちんと納税し、たくさんの障害を持った方の助けになりたいです。日本の社会福祉が、もっと充実することを願っています。

みんなのために納める税

関川村立関川中学校三年 大島 清楓

「税金なんて払いたくないなあ。」

私の周りでも、このように思っている人がいるかもしれません。私も、春から消費税が上がり、うんざりしていました。しかし、ある日をきっかけに、考えが変わったのです。

私の学年では、先日、税の学習が行われました。私は、講師の方のお話やその時の資料を通して、今まで知らなかったことを学ぶことができました。

それは、税金は私たちを支えてくれるということです。「支える」といっても、多くの意味があります。例えば、税金によって設けられる信号機・横断歩道、冬の除雪サービスなどは、私たちの身の安全を「守る」ためにつくられました。また、近所の公園、遊園地、公共アリーナなどは、住民が「楽しく生活する」ためにあると思います。さらに、私が毎日通う中学校、弟が通う小学校、保育園などは、人を立派に「育てる」ための、大切な場所です。

このように、税金は、私たちのそばで様々な役割を果たし、暮らしを支えてくれる大切な存在なのです。

「税金なんて払いたくないなあ。」

このように思っている人でも、実際はしっかりと、税を納めているではありませんか。この考えの片隅では、「税は払いたくない、でも大切なものなんだよなあ」という気持ちがあると思います。だからこそ、国民はきちんと税を納め、それを義務として生きているのです。

国民は、自分の納めた税が、自分や誰かのために使われることを願っています。しかし、その願いも虚しく、税金の悲しい使われ方も存在します。政治家が不正にお金を使ったり、無駄な施設を設立したりと、税金の本来の目的が忘れ去られている事例があるのです。

税を「納める側」である私たち国民。そのほとんどは、税の大切さを充分過ぎるほどに理解しています。

一方で、税の使い道を選択する「納められる側」は、その信頼を裏切ってはなりません。その過ちにより、多くの人の願いや希望が消えてしまうことを、よく知っておいてもらいたいと思います。

中学生の私は、消費税など、小さな税しか納めていません。それならば、私は、多くの税金をみんなのために納める大人に感謝の気持ちを忘れないでいたいのです。自分の親や親戚、どこかですれ違った誰かであっても。

私は、税を身近に感じて、その存在を大切にできる大人になりたいです。それは、私が、納税の義務をもつ「国民」だからです。

私もしっかりと税を納めて、国に、地域に貢献したいと思っています。

介護と税

佐久市立臼田中学校一年 深沼 ほのか

私の父方の祖父は生前、病気がもとで介護の認定を受けていました。特別養護老人ホーム（特養）に入所したかったのですが、空きがないということで、ショートステイをすることになりました。たった 30 日間でしたが、家族の負担が減ったと父が言っていました。

また、祖母は車椅子の生活をしていました。夏場は、自分の力で車を運転していました。冬場は、雪が降るので、運転をしませんでした。そんな時は、ヘルパーさんに来てもらって送り迎えをしてもらっていました。祖母は「大変ありがたい」と言っていました。

このような介護制度は、自己負担金や介護保険料はもちろんですが、税金が大きな役割を果たしています。私の祖父が入りたくても入れなかった特養。もっとたくさんの税金を使って施設ができればよいと思うのですが、そう簡単にはいかないようです。

厚生労働省は三月、特養に入所できていない高齢者が、2013 年度は 52 万 2000 人に上るとの調査結果を発表しました。前回調査の 2009 年度から四年間で約 10 万人、24%増えたそうです。自治体は新しく特養施設を整備し、入所者数の枠が 2009 年時点から 7 万 4800 人分広がったそうですが、それ以上に「待機者」が増えたようです。

特養ホームは、全国に約 7800。長野県には、140 の特養があり平均約 270 名の待機者がいます。多い所では、900 名もの待機者がいます。

民間のホームもありますが、手厚い介護を受けられる半面、自己負担額が高くなります。自治体等が運営する特養は、民間ほどのサービスは望めないかもしれませんが、負担額が少なくて済む良さがあります。半面、入所者一人当たりの給付額は、月 30 万円近いそうです。これには驚きです。

私のいとこは今年の春、特養に就職しました。あまり時間が無一中、入所者の方々との会話をするよう努めているようです。また、夜勤があり大変ですが、やりがいがあると話してくれました。

この四月から消費税の税率が 8 %に上がりました。国はその使い道を福祉に役立てるとしています。私は、その税金を使って新しい施設を建てたり、ショートステイなどのサービスを充実させたりして、介護を受ける人やその家族が幸せになってほしいです。そういうことを国民にもっと知ってもらえれば、納得して税を納める人が増えると思います。

また、賃金を増やしたり、職場の人数を増やしたりすることで、福祉の場所で働く人がゆとりをもって介護を受ける人に接することができるような環境を整えられたら、長寿国として海外の良いお手本になるのではないかと願っています。

これからも、税金が社会福祉に役立っていることを忘れないで、私の責任のある行動をとっていきたいです。

考えよう ～税との関わり～

市川市立第七中学校三年 田尻 駿

「消費税率 引き上げ」このような文をテレビニュースで見て、僕は「困る」「嫌だ」こんな気持ちを抱いていた。この時の自分は税が重要なものだとは思っていたが、そもそも何に使われているかほとんど知らなかった。しかし夏休み前、税についての講演会で専門家の方の話を聞いて、そうとは言っていられないことに気づかされた。その話の中で特に心に残っているのは「税がない世界」についてのアニメーションだ。このアニメーションを見て、消費税増税に対して嫌な印象をもっていた以前の自分が恐ろしくなった。自分の身の回りには税が関わっているものがたくさんある。自分の生活は税によって支えられている。このことに初めて気付いた。

例えば僕たちは、一日の中で顔を洗ったりお風呂に入ったりする。この時に使われる水はすべて税金で整備されている。また毎日、通学や通勤の時に使っている道路や信号機などもすべて税金がなければ、そこには存在しないものだ。もっと言えば、街の安全が保障されていることにも税が関わってくる。それは警察や消防隊も税金なしには成り立たないからである。

また、その講演会の中では僕たち生徒と税の関わりについても知った。公立学校の中学生一人につき一年間に約百万円もの税金が使われている。千葉県では平成二十六年の歳出総額のうち、四分の一以上が教育費に当てられている。さらに義務教育九年間の中で一人あたり約八百六万円という多くの税金が使われていることも知った。

このように僕たちが生きている日本に当たり前のような日常がやってくるのも、すべて「税」が僕らの気付かないうちに毎日の生活を支えてくれているからだ。つまり税という存在がなければ当たり前の日常がやって来ない。自分たちの暮らしを豊かにするための税は、なくてはならないものだと思う。さらに僕が使っている教科書の裏にはこんな言葉が刻まれている。「この教科書はこれからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています」税金を通して送られた国から僕たちへのこのエールを大切に受け取った。そして、将来のためにより一層真剣に学んでいきたいと思っている。

消費税は若い人からお年寄りの方まで、日本で物を買ったすべての人が納めていくものだ。だから増税をしても他の種類の税金と違い、どんな人にも公平で、ある条件の人だけが大きな負担になるわけではない。一人一人の小さな負担の積み重ねが世の中を良いものへと変えていくのなら良いことだと思う。これからも増税があるかもしれないが、その時にはただ「困る」「嫌だ」という気持ちを抱くのではなく、なぜ増税が必要になったのか、その税金がどのようなことに使われているのか、そこに興味をもち続けていくことが大切ではないだろうか。

「ばあばが急に動けなくなった。今、救急車を待っているから今日は子供らを預かれない。」五年前の五月の土曜日の朝、いつも早起きの祖母が、朝起きてこなかったことに異変を感じた祖父が救急車を手配し、母に電話をかけてきました。その後すぐに、私も母に連れられて病院にかけつけました。

母の日に、母と一緒に、祖母にプレゼントを届けに行った時には、とても元気だった祖母が、ベッドの上に横たわり、左半身が動かない状態になっていました。右脳梗塞でした。びっくりして言葉が出ませんでした。あんなに元気だったのにどうしちゃったのだろう。

それでも祖母は、「あんたらも来たのか。学校はどうした？」と私達に気づかって話しかけてくれました。そのまま祖母は入院しました。

そして二週間後、今度は左脳にも脳梗塞を発症し、話すこともできず、体もほとんど動かない状態になってしまいました。私達孫の面倒を見てくれたり遊び相手になってくれたり、いつも元気で私の大好きな祖母でした。それから五年間ずっと入院治療しています。

医療費や介護費用にも毎月相当なお金が必要です。それらに税金が使われていることを父から聞きました。七〇歳以上の方が、一定額を超えて支払った時は国民保険から戻してもらえる高額医療費のことや、障害者手帳一級を持っているとその一定額も負担してもらえとのことでした。

両親もいつかは年をとって、病気になったり何年も入院したりした時、私達子供はどこまでしてあげられるのだろうと漠然と不安になりましたが、税金によってこの社会保障制度が成り立っていることを知って安心し、ありがたさを実感しました。

「病院や介護施設にお世話にならない健康な老後を送りたいよね」と母にいつも話している父の給料からは、意外なほどの割合の税金が引かれていました。健康を望む父が、なぜ社会保障費を備えるのかという疑問に対し、「病気にならないことが一番良いことだけど、万が一そうになった時の安心のための保障みたいなものだ。子供達にあまり負担をかけないようにね。」と話してくれました。

国や県の歳入の約半分を占める税金、その使われ方の一番多いものである社会保障関係費によって、祖母や私たちの安心安全な生活が守られています。

しかし、私が親の年になる頃には、超高齢化社会が到来することが予想されます。税金を納める人が減ることで、税金が不足することが心配です。

私は将来結婚してからも、生まれ育ったこの町で親と子供と一緒に暮らし、仕事を続けたいと思っています。そして、祖父母、両親、私や子供の安心安全な生活が、より充実したものになるように、しっかりと税金を納められるような大人になりたいと思います。

学校に通う。それは、小学校の時から何の疑いもなく、ぼくが毎日続けてきたことだ。授業料がかからないことも、教科書が無償であることも当たり前のよう生活している。

しかし、世界には学校に通うことはおろか文字の読み書きすらできない子供が大勢いるという。

マララ・ユスフザイさんがタリバンに撃たれた後、「全ての子供に教育を受ける権利を」と国連で訴えたスピーチはあまりにも有名だ。スピーチを聞いた時は、正直まだ他の国で起こっている出来事だと思っていた。

しかし、ぼくはマララさんの『わたしはマララ』という本を読んで衝撃を受けた。今では自分の命の危険も恐れずに教育を語るマララさんだが、タリバンの妨害がはじまるまでは、教育の大切さをきちんと理解していなかったという。タリバンは、人々の情報源であるラジオを使って、人々の心をつかみ、その上で偏った教えを広めることで自由や平和をうばっていったというのだ。本当のことを知るためには、一つの情報だけではなく、様々な情報を利用しながら物事を判断するということが、必要なのだ。だから、マララさんが「学校へ行き、本を読み、宿題をすることは、時間をただ費やしているのではなく、未来を作っているのだ」と書く文章には重みがある。

日本国憲法第二十六条には、「すべて国民は法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負う。義務教育は、これを無償とする」とある。そしてその教育の費用は、ぼくの父も納める税金から捻出されている。調べてみたら、中学生一人あたり年間にして約九十八万円を負担してもらっていることが分かった。税金を使って、勉強をさせてもらっているのだと思うと、教育がとても大切であると考えられているのだと改めて感じる。同時に、未来を作るぼくたちは、期待をされているのだという責任感がわいてくる。

ぼくが毎日学校へ行き、勉強をすることは自分のためだけではない。日本の将来が今よりもよくなるために、みんなが知恵を出しあい、力を合わせるためなのだ。

マララさんが生まれたパキスタンで、今起こっていることは、決して他人事ではない。現実世界で起っていることだ。ぼくたちは、しっかりとそれを受けとめて、世界の中の日本のあり方を考えていく必要がある。

今、ぼくたちはみなさんの税金によりたっぷりと勉強をさせてもらっている。こうした日本でずっとあり続けるために、これからも勉強していくことがぼくの使命だと思う。そして将来は仕事を持って税金を払い、日本の未来を作る一人になりたい。

お互い様

品川区立荏原第一中学校三年 長田 清楓

二十三億二千三百万円——これは、八月二十七日付で広島県に交付された交付金の合計です。八月二十日に起きた広島土砂災害がもたらした被害は、想像をはるかに絶するものでした。地域は土砂に飲み込まれ、たくさんの犠牲者を出しました。こうした大規模災害に見舞われた自治体には地方交付税交付金が当てられます。この交付金には、私達が納めている税が含まれています。災害を受けた人々だけが復興のための費用を負担するのではなく、日本全体で協力し合って負担するのです。被災地のみなさんが多くの苦勞を背負うよりも、国民一人一人が少しずつのお金を出し合うことにより、被災者の経済的負担は軽くなります。被災地に出向いて直接手助けすることができなくても、税を納めることで復興の力になっているのです。

私は三年前、宮城県仙台市で東日本大震災を経験しました。私が住んでいた地域は津波の被害はありませんでしたが、そこから少し離れた地域は津波に飲み込まれ元の姿を失っていました。震災から二週間程過ぎた後、父と私は津波による大きな被害を受けた仙台市若林区荒浜地区を訪れました。何台もの車が横転していて、家や建物は跡形もなく崩れ、どこを見てもがれきの山が立ちはだかっていました。その景色に私は重苦しい気持ちとなったのと同時に、何もできない自分の無力さを痛感しました。震災から間もなく、復旧作業が始まりました。テレビでは連日、避難所への物資支援の様子が映されていました。その時は深く考えませんでした。がれき撤去、物資支援、仮設住宅の建設など、すべてが被災地を越えた国民の税によってまかなわれていました。今、津波の大きな被害を受けた地域は完全に元の姿に戻った訳ではありませんが、少しずつ復興が進んでいっています。ここまで復興できたのは、すべての国民のおかげだと思っています。

消費税が八パーセントとなり、消費者の負担が大きくなると不満の声を聞きましたが、納税が立場の弱い人々を支えていることを知れば、税への理解も深まっていくはずです。今回の広島土砂災害の報道を見て、被災地に何もすることができなくて、もどかしく感じている人がたくさんいると思いますし、私もそうです。しかし、私達の納税こそが被災者を支え、励ましていることを忘れてはいけません。税は、私達と被災地をつなぐ架け橋にもなることを私は知っています。仙台の学校では東日本大震災の時に広島、全国から励ましの手紙や品物を受け取りました。新聞によると今回は、仙台を含む宮城、岩手、福島からたくさんの支援が広島に贈られていると知りました。まさに——お互い様——これが納税なのだと実感しています。

たくさんの思いに支えられて

武蔵野市立第六中学校三年 糟谷 奏海

「学校にあるものは、皆のお父さんお母さんが一生懸命働いて得られるものなのだから、大切にしてください。」

私が小学生だった頃、学校の物が壊されたり、無駄に物が使われたり、物を乱暴に扱う生徒がいたりした時に先生がよく言っていた言葉だ。この言葉から私は「公共のものは税金によってある」ということを知り、公共のもの以外でも言えることだが「ものは大切にしなければいけない」ということを学んだ。と同時に税金が私たちの生活を支えている大きなものであるということを知った。

中学三年目の一学期、公民の授業で税理士の方から税に関する話を聞いたことで税に少し興味をもった。その日から新聞やニュースで税に関することがあれば自分から見聞きするようになった。ある日、新聞の社説に掲載されていた記事が目に入った。子供の「貧困問題」について書かれていた。幼児教育は、集中力や好奇心、話す力、聞く力のような学びの土台となるものを作っておく役割がある。しかし、その幼児教育を受けることができていない子供が日本全国で十六パーセントを越えているのが現状で、もっと子供への投資をするべきだという内容だった。高齢者はますます増え、年金や介護、医療費は膨らむ。その中で子供や教育への投資を増やすことは多額の借金を抱える日本にとって簡単なことではない。そんな大きな問題を国が背負っていることを理解したうえで、子供の貧困問題や教育に手を差し延べようという考えをもつ人がいるということだ。記事の中には「子供への投資は未来への投資」とも書かれていた。投資された子供たちが将来自立できれば、その本人は勿論のこと、社会保障のコストが下がり、社会全体の利益になるという意味らしい。税金を払っている人（暮らしを支えている人）がこのような考えをもっていたことを、支えられている側の私は初めて知った。多くの大人が誰もが住みよい社会になることを願い、これからの社会を担っていく私たちを支えてくれているのだ。

中学三年生になった今、改めて税について学んだことで小学校で先生がよく言っていたあの言葉には、もっと奥深い意味があるように思う。「あなたたちが生活をおくることができるのは、皆がより豊かで安全な国をつくるために頑張っているからである。税金は国民一人一人の気持ちだ。その気持ちに自分が支えられていることを忘れてはいけない。この暮らしに感謝してください。」何げない毎日は国民の思いに支えられていることがわかり、その思いに応えられるような大人になりたいと思った。また、それこそが私たちの義務であると思う。私は五年後成人になるが、その時に今私たちを支えてくれている多くの人に恩返しをしたい。そして、その多くの人の未来を思う気持ちを私ももち続けたいと思う。

税を納めるということ

川崎市立西中原中学校三年 原 あかり

納税。それは民主主義国家の国民である私達の義務である。それにより日本の社会は増進し国民生活が守られている。だがその納税そのものを苦痛と感じる人も多い。江戸時代、京都で間口税といい間口五、四メートルごと納税するという制度があった。しかし人々はそれを少なくするため間口を小さくしたそう。それが現在、縦に細長い造りの家が立ち並ぶ京都の街並みに反映されている。また同時代百姓一揆も多発した。百姓は命を懸けて減税を求めた。自分の汗水たらして作った白い米を半分しか食べれないの考えると同感しざるを得ない。これら二つの出来事から重税を逃れたいという人々の主張が大いに伝わってくる。それは現代にも通じるものだ。

私達が普段お金を払うと実際に物として現れるが税金をどれだけ納めても実感は確かにわからない。でも私は税金を納税する事から逃れようとするのは日本国民の一人として恥じるべき事だと思う。今、自分がこうして生きていられるのは私達に税金という義務が課せられているからだと思うからだ。税を納める事で教育、福祉をはじめ社会を維持し豊かに発展させる。そして豊かになるのは私達自身である。逆に納税を怠る事で税収不足に陥り国の運営に支障がでて最終的に困るのは納税を怠った私達であるだろう。そう考えると今の暮らしがあるのは前の世代の日本国民が税を汗水たらして納めてくれたからだ。だから私達も次の世代のため、将来の日本国のために納めなければならないのだ。

そんな中で税金が無駄に横流しされているという事実が存在する。例えば国会議員の住むマンションにかかる多額の建設費だ。また交通量の少ない道路、橋を作っているという事実もある。これらは全て私達が長年納めている税金により作られる。もしそれらに費やす税金をもう少し安くすれば低所得者や野外で生活する人々を救えると思う。こういう実態があるからこそ税を納めるという事に抵抗を持つ人が出てくるのだ。税の使い道に目を向け、監視する事は納税者つまり主権者の一人として重要な事だと思う。でも税金の無駄遣いというのは私達もしているのだ。例えばゴミのポイ捨てをしていると「ポイ捨て禁止」と呼びかけるポスターが貼られるだろう。このポスターは全て私達の納めた税によって作られるのだ。つまり自分達がルールに反する行動をする事で税金は本来の納税者の望みとは逸れた目的に使われてしまう。このように自分が納めた税を自分自身が無駄にしまっているのだ。だから社会マナーを守る事が私達に求められていると思う。

納税は一見、負担や苦痛に感じられるかもしれないがしっかり使い道を理解すれば自分の暮らしを一層華やかにする基盤を作るととても大切な義務と捉えられると思う。今、私が納めた八パーセントの消費税はきっといつか日本の発展に繋がる事だろう。そう信じて。

癒やしの空間を守るために

川崎市立富士見中学校三年 浅香 柚月

サワサワと風で葉が音をたて、太陽が顔を出し、鳥がさえずる。森の中に居ると、心が安らぐ。壮大で、緑豊かな森を守るためにはどうすればよいのだろうか。

数年前、父が神奈川県森林研修会に参加したことがある。当時、私が父から聞いていた仕事の話の中に、興味深いものがあった。「かながわ水源環境保全税」。平成一二年の宮ヶ瀬ダム completion をきっかけに、水源林の保全などを目的に検討された新しい税制である。国内産木材に比べ、外国産の輸入木材が安く仕入れられるようになり、日本の森林は手入れされにくくなってしまった。それを防ぐために水源環境保全税が始まったそうだ。神奈川県に都会のイメージを持っていた私はとても驚いた。

父によると、森林保全は木を「切る」ことだという。しかし、森林を再生させることが、なぜ木を「切る」ことなのだろうか。

森に雨が降ると、その雨は土に蓄えられ、川の水にもなる。河川の水はダムに貯められて発電に使われたり、人工水になったりして私たちの生活に密接に関わるそうだ。しかし、木を切らなければ土に日光が当たらない。草木が生え、丈夫な土壌にならなければ水を蓄えることは困難になる。土に水が貯められなくなると、土砂崩れが起きやすくなり森林破壊につながる。だから、木を「切る」ことは大切なのだ。そして、森林がなくなれば私たちの生活にも影響が出ることを知り、森林をより身近に感じ、大切にしたいと思った。

最近ニュースで、土砂災害で家が崩れている様子や、山から野生動物が人里に降りてきて農作物に被害を及ぼす様子がよく放映されていることを思い出した。これらは全て森林破壊が原因だったことを改めて知るとともに、他県よりも一早く水源環境保全税に着目した神奈川県の政策を素晴らしく感じた。

平成一九年から、神奈川県では水源環境保全税導入の試験期間となり、その後効果がみられたため、期間が延長された。私も、父から聞かなければ知らなかったことだ。県民にとって重要なこの税の知名度が低いことは非常に残念に思う。

現在、森林破壊や林業人口の減少は深刻な問題になっている。森林のため、森林で暮らす動物や植物たちのため、そして、私たち人間のために県全体に広め、後世に伝えていくことで、「癒やしの空間」は守れるのではないだろうか。

「水源環境保全税」が森林保全意識を高め、地球温暖化についても考える大きなきっかけとなることを願っている。

納税について

甲州市立勝沼中学校三年 内田 江美

今年二月のバレンタインデーは記録的な大雪に見舞われた山梨でした。私は生れて初めて百センチを優に超す大雪を体験しました。後でわかったことですがそれは祖父も初めての明治二十八年以降一番の大雪だったそうです。最初はただその雪の凄さにはしゃいでた私でしたが少しずつ事の重大さを知ることとなりました。

その日、北海道に出張中の父が帰ってくる予定でしたが東京で足止め、中央線、高速道路は全く機能せずで帰れませんでした。私の自宅がある勝沼でも主要道路の除雪が精一杯で、市道まで手が回らない状態。母は職場まで歩いて行くこととなりました。テレビや新聞でだんだん状況の深刻さが浮き彫りとなり、山梨は『陸の孤島』と報道されるほどでした。私の住んでいる町ではぶどうをハウスで栽培している農家も多いのですが、ハウスは雪の重みで、見事に潰れてしまいました。その被害は全ハウスの80パーセントを占めていたとのこと。絶望的な表情の農家の方々をみると、私もすごく心が痛みました。うちは幸いハウスはなく小さな小屋が潰れたくらいで済みましたが、やはり祖父はいろんな葡萄を栽培している専業農家で葡萄をまるで子どものように可愛がって育てているのを知っています。ハウスが潰れてしまって今年の葡萄どころかこれからのハウス葡萄栽培が危ぶまれる事態となってしまう農家の方々の落胆はどれほどかと考えます。実際壊れたハウスを撤去するだけでも大変な労力が必要でした。これを機に葡萄を作ることを諦めてしまったご高齢の方もいらしたようです。

そんな中これからどうしたらいいかと悩まれる農家の方々のために国からの農業施設復旧支援対策があるということをネットで知りました。再建のための長期資金実質無利子で貸すというものです。他にも被災ハウス復興支援事業などがあり再建のための補助を行っていくとのこと。このような支援事業に私たちの支払う税金が活用されるのはとても嬉しいことだと思いました。また別の形で豪雪による農業被害の復旧に関する取り組みも知りました。「ふるさと納税」という制度です。ふるさとへ寄付した金額から規定額差し引いた額所得税を軽減するという制度です。ふるさととはとても大切なものです。そのためにダイレクトに手助けできる納税の仕方も知り、いろんな方法で私たちは支えあっていることがわかりました。

災害に遭われた農家の方々に少しでも希望をもってもらえることにも使われる税金。そんな税金をしっかりと納められる大人に私はなりたいと思います。

私たちと税金

大野市開成中学校二年 大塚 美鈴

今年の四月のとある日、
「お父さん、今年も税金が返ってきましたよ。」
と母が父にいつているのを耳にしました。
「えっ？税金が返ってくる？消費税が8%になって、税金を多く払わないとい
けないと思っていたのに……。」

私は不思議に思い、母に聞いて見ることにしました。

母が言うには、祖母を自宅で介護しているのと家族のみんなが病院でかかっ
た医療費が多いので、税務署に申告したら、それが返ってきたとのことでした。
母は、返ってきた税金で、祖母の身のまわりのものを買ったりできるからあり
がたいと言っていました。

私は、税金は納めるだけのものだと思っていました。しかし、きちんと手続
きすれば、返ってくるということが分かりました。納めすぎた税金のことを、
母は還付金と言っていました。

私は先日、大野税務署で職場体験をさせていただく機会を得ました。そこで
私は、税金のありがたさを多く学びました。税金がなかったら、街が汚れる、
道路が整備されない、学費が高くて学校にいけない、警察を呼ぶにもお金がか
かるなど大変なことが起こり、私たちは、快適な生活をするできません。
しかし、私たちには税金があります。税金で私たちは快適な生活を手に入
れているのです。

職員の方々の仕事で特に印象に残ったのは、申告に偽りがないかを調べる仕
事です。折り込みチラシや知人からの情報を収集して、資料にまとめ調査し、
申告に偽りがあつた場合は徴収します。

申告により、税金の納めすぎには還付し、申告を偽っている場合は徴収する、
そのような、しっかりとした税金の制度があつて、とても安心しました。

四月に消費税の税率があがりました。それによって、ニュースや新聞などで
は、高齢者の方々が、「節約しながら、年金で細々とやってきたのにもう、限界
だ。」などと言っている報道を目や耳にすると心が痛みます。私の家でもやはり
影響が出ているみたいです。みんなが苦勞して納めなければいけない税金は本
当に必要なのかと疑問に思います。しかし、増額になった税金は全て、社会保
障に使われるということですが、少子高齢化がどんどん進んでいくこの日本の
現状を考えると、やむをえないことだと思います。今、中学生の私には、判断
が難しいことだと思います。租税教室などで、税金の使い道を決めるのは、議
員の方だと教わりました。今から、多くのことを学び、大人になったときには、
私たちの暮らしを豊かにし、明るい未来のある日本のために税金を使ってくれ
る人を選びたいです。そして、正しく納税できる大人になりたいと思います。

自由と平等が仲良くするために

学校法人日本体育大学浜松日体中学校一年 半田 祐大

父の仕事の都合で外国に住んでいたことがあります。一年中暖かかったり、食べ物が辛かったり、日本とは違うところがたくさんありました。その中でも、とても印象に残っているのが、貧富の差が激しいということです。

街には数軒の在留日本人向けスーパーがあって、多くの日本人が利用します。日本食ブームもあり、現地のお金持ちも利用します。そこには日本から空輸された直輸入品コーナーがあって、日本のおいしい食品が手に入ります。でも、日本から直輸入された食品はとても高価なのです。例えば、日本で五百円ぐらいのイチゴが二千元ぐらいします。だから、日本産の甘いイチゴが食べたくても、現地産の酸っぱいイチゴで我慢します。他方、現地のお金持ちはとても裕福なので、そんな高価な日本産の食品をポンポンと買い物かごに入れていきます。僕はいつもその光景を羨ましく見ていました。

でも、スーパーを一步出ると、まったく違う光景が広がります。路上では、お年寄りや体の不自由な人が物乞いをしています。僕より小さな子供が、物を売ったり靴を磨いたりして働いています。雨が降り始めると、スーパーの出口から車まで傘を貸してチップを貰う少年たちも集まってきます。裕福な人と貧しい人のここまでの違いは、日本では見られません。

貧富の差を測る指標の一つにジニ係数というものがあります。日本のジニ係数は先進国の中でも低く抑えられていて、貧富の差が少ない平等な社会なのだそうです。そして、この平等な社会を実現するために、税金が大きな役割を果たしていることを知りました。

日本では、お年寄りや体の不自由な人も元気に生活できるように、税金が役立っています。みんなで使う施設や道路を造るのにも税金が使われています。子供がみんな勉強できるのも、安全な社会で暮らしていけるのも税金のおかげです。このように、みんなが少しずつ納めた税金を、本当に必要な人に届けたり、みんなのために使ったりすることによって、平等な社会を作っています。これを、税による所得の再分配というのだそうです。

税金を正しく納めなかったり、税金が適切に使われなかったりすると、所得の再分配がうまくいきません。日本が平等な社会でいられるのは、正しく税金を納めている人たちや、その税金の使い方を考え、適切に役立ててくださる人たちのおかげなのだと思いました。

「自由と平等は時に喧嘩をする」と、テレビの世界史の番組で、大学の先生がおっしゃっていました。自分のお金は自由に使いたいけれど、それだけでは平等な社会は実現しません。自由と平等の両方を実現するには工夫が必要で、その一つが税による所得の再分配なのです。みんなで少しずつ税金を納めて、自由と平等の両方を実現する日本の社会は、素晴らしい社会だと思います。

税を知る大切さ

半田市立乙川中学校二年 榊原 すずか

私が税について関心を持つきっかけになったのは、小学校六年生の時に学校で受けた租税教室だ。税務署の方の話を聞いたり、アニメを見て、もしも税金がなかったらどんな生活になってしまうかを考えさせられた。

それまで「税金」と言えば、「取られるもの」としか思っていなかったから、例えば消防やゴミ収集など、自分の身近で当たり前になされていたことが、税金が使われているからこそできることだと知って驚いた。

そして今回この作文を書くにあたり、税について調べ、様々なことを知った。一番興味深かったのは税金の使われ方だ。意外なことに、医療や年金、福祉、介護、生活保護などの社会保障関係費に一番多く使われていた。

私は小さい頃体が弱く、喘息だった。遠くにある大きい病院に何年も通っていた。入院したこともある。でも当時医療費の助成があったから、随分助けられたと母に聞いた。もし助成がなかったら、かなりの負担になっていたらしい。今私は喘息が完治し、健康に過ごせている。大好きな運動も思い切りできている。医療のために税金が使われているお陰だと実感した。心からありがたいと思った。

消費税が8%になった時、新聞等のメディアや自分の身近なところから不満の声を多く聞いた。私自身も自分の小遣いで買い物をするなら、できるだけ安く済んだ方がいいとは思う。でも税金として払うのであれば別だ。私は全く嫌な気持ちにならない。わずかであっても、私のように病気を抱えた子のもとへ届いてほしい。素直にそう思える。

また調べて分かったのは、日本の消費税率8%はかなり低いということだ。韓国でも10%、ヨーロッパでは20%を超えている国もある。しかし高い税金を払っている国では、医療費や教育費が無料であったり、65歳以上の人には掛け金なしで年金が支払われていたりする。ただ単に高い税金を払っているだけではないのだ。社会福祉など生活に反映されているのであれば、決して損なことではない。

また、消費税は国民に広く公平に税の負担を求めるもので、一部の世代に負担が偏らず、景気変動の影響を受けにくいから、安定して税収を確保できるものであることも知った。正直今までに「消費税がなければいいのに」と思ったこともあるけれど、これらのことを知ったらとてもいい制度であると思った。

これから少子高齢化が進むと言われている。ニュースなどで耳にすると、私たちが大人になる頃、さらには高齢者になる頃はどんな社会になり、自分たちにはどんな負担がのしかかるのだろうと不安に感じることもある。でも皆が税金をきちんと納めて、それをよりよく生かせば、豊かで暮らしやすい社会をつくることができるのではないだろうか。

大切なのは、税金がなぜ必要なのかを正しく理解し、どう使われていくのかに常に関心を持つことだと思う。

私も税金に助けられていた

愛知淑徳中学校三年 福寄 舞乃

この夏休み、私は、母に矯正歯科に連れられ、噛み合わせの治療を始めることになった。

いろいろな検査を終えると、母と共にカウンセリングルームに呼ばれた。院長先生は治療方針の説明の後、母に「矯正治療費は医療費控除の対象になるので、確定申告まで領収書を大切に保管しておいてくださいね。」と話していた。私には何の話か理解できなかったの、帰り道に母に尋ねてみた。「確定申告って何?」、「医療費控除って何?」と。すると、「医療費控除というのはね、医療費が多くかかった年に、その負担を少しでも軽くするために、一部を税金から差し引いてもらえるっていうシステムなの。歯列矯正って、結構お金がかかるでしょ。だから、今年は確定申告っていう手続きをすると、パパが納めた税金から一部お金が返してもらえるのよ。」とのことだった。

私は、今まで、税金が何に使われているか考えた事もなかった。歴史の授業で習った、「租・庸・調」や「年貢」など、人々を苦しめる厳しいものという知識、消費税の税率が5%から8%に上がり、10%への引き上げも検討されている、人々に負担を与えるものという“悪役”としてのイメージしか持ち合わせていなかった。だから、我が家を助けてくれる税金について、調べてみなくてはならないと思った。

「税金」とは、お金をみんなで出し合って負担し、「みんなのために役立つ活動」や「社会で助け合いのための活動」に使われるという、みんなで社会を支えるための「会費」のようなものらしい。もしも税金がなかったら、救急車も有料、ごみ収集も有料、交番も有料、医療費がすべて自己負担など、みんなが豊かで安心して暮らしていくには程遠い社会になってしまうだろう。また、上下水道や道路や公園の整備など、公共事業にも税金が使われていて、そのおかげで毎日暮らしやすい環境をつくってもらえているようだ。現在、わたしたちの暮らしのために使われるお金のうち、5割が税金、4割が公債金によるものらしい。だが、「少子・高齢化」が重要な問題になっている日本の将来は、医療・年金・介護など歳出が増大することは間違いないだろう。また、正規雇用者が減り、非正規雇用者が増えている雇用形態の変化や、独身の人や夫婦二人だけの家庭が増えるなど家族構成も変化している。そこで、今までのような豊かで安心して暮らせる社会を持続させるためには、社会の変化に合わせて、税のしくみについて、私たち一人一人が考えていかなければならないと分かった。

今の私は、消費税を払うことしか納税義務を果たせないが、近い将来到来するであろう超高齢化社会を支えるために、しっかり勉強して、労働力人口の一員とならなければならないという責任をひしひしと感じている。

くらしを守る税金

甲賀市立信楽中学校三年 吉村 優希奈

母は「乳幼児医療費助成制度には本当に助けられた。」と話していました。

私は産まれてすぐに医師から「心臓に雑音が聞こえる。」と言われ、検査の結果、心臓に穴のあいた「心室中隔欠損」という病名を告げられました。幸い、手術などをせずに数ヶ月で自然に穴がふさがってくれて完治しましたが、何度も病院へ行きました。その後も、気管支炎やアレルギー性鼻炎、食物アレルギーなど、いつも病院に通ってお薬をもらう日々が続きました。

その時に助けてもらったのが「乳幼児医療費助成制度」です。この制度のおかげで私は無料で病院の診察を受け、お薬をもらうことができました。この制度は税金によって成り立っているのです。私は税金を納めてくださっている国民の皆さんのおかげで、今こうして元気に過ごせているのだと感謝でいっぱいです。母は「小さな我が子が病気の際は精神的にも不安でいっぱいなのに、これで金銭的な負担が大きかったら、もっとまいっていたと思う。本当にありがたい制度だわ。」と言っていました。

そして、今は学校に一日も休むことなく元気に通えている私ですが、よく考えてみると教科書は無償で配られ、授業を受けるのに授業料もいりません。これが塾だったら、習い事だったらもちろん授業料を払います。先生から教えてもらうという事はそれに対してお金を払うのはあたりまえです。実際に小学校でも中学校でも先生はボランティアで教えてくださっているわけではありません。ですが教えてもらっている私たちはお金を払っていません。つまり全てのお金が税金によって賄われているのです。小学校から高校まで公立に行った場合、生徒一人当たり約千百万円近い税金が使われていると知り、その金額の多さに驚きました。

また、その他にも事件や事故、犯罪など身の回りの危険なことからは警察の人たちによって守られ、火事時には消防車が、病気や怪我で動けなくなったら救急車が必ず来てくれます。こんなに安心して暮らしていけるのも全て税金で賄われているからです。もし、来てもらうのに個人でお金を払わなければいけなかったら…そんな不平等な世の中は想像しただけで怖くなってしまいます。

安心できる暮らしがずっと続いていけるように、私も成人して納税する年齢になったときには、次の子供たちのために喜んで納税します。もし、将来私が他府県に住んでしまっても「ふるさと納税」をして恩返しがしたいと思います。

私たちの将来と税

京都市立深草中学校三年 吉田 真尋

今春、消費税の税率が五パーセントから八パーセントになり、スーパーで買い物をするたびに表示されている税抜価格と実際にレジで支払う価格の差に増税を実感する人は多いことでしょう。

このように消費税の支払いのやりとりをひとつの例にとってみても、税とは、とても身近なものなのです。

しかし、今回、税について考えを深めるにつれ、その集め方や使い方によって私たちの暮らしや私たちの将来、これからの日本の方向性にまで影響を与えてしまうほど大事なことはないかと思うようになりました。

日本は借金大国と言われていますが、その借金の多くは、社会保障費と社会保障費確保のための国債の利払い費です。つまり、借金を借金で返済しているのです。

これは、戦後の高度経済成長期の経済ベースで福祉政策を行い続けた結果なのだと思います。しかし、祖父や祖母の世代は、戦争で大変な苦労をした世代であり、その世代の福祉政策であったことも理解しなければなりません。

なぜ、このような状態でも、日本の経済や国家が破産しないのか不思議に思いましたが、日本には、比較的安定した政治システムや最先端の科学技術などの産業が世界から評価されているから大丈夫なのだという事も分かりました。

これから、勤労世代が父や母から私たちに世代交代し、私たちは、私たちや子孫の世代が安心して暮らせる国を作っていく義務を負うのです。

国民の三大義務として、教育を受ける（受けさせる）義務、勤労の義務、それと納税の義務があります。私は中学三年生なので、将来、勤労の義務を果たすため勉強に励んでいます、次世代の国づくりの義務もあるのだと思います。

税の使い方を決めるのは議会であり、議員を選出するのは選挙権をもった国民です。私たちが理想の国づくりをするには、まず、貴重な税を国民のため、日本のために使える政策を持った議員を選ぶことが大切です。役所は、その政策を実行して新たな産業や雇用を創出する手助けをします。また、役所が適正に税を使っているかどうかをチェックすることも、私たちが議員の選出を通じて監視する仕事のひとつです。

最後になりますが、私たち国民ひとりひとりが税に関心を持つことが納税の意識を高めることに通じ、この国をより良くしていくうえで大切なことなのだと思います。

「目立たないが、社会を下支えするもの」

堺市立三国丘中学校三年 辻 篤志

税を考える、という課題に直面した時に真っ先に思い出したのはこの言葉である。私は小学校一年から二年間闘病生活を強いられた。幼いころなので覚えていないことも多いが、医師や看護師たちの献身的な医療や看護、毎日面会に来てくれた両親は強く印象に残っている。しかしそのほかにも私を助けてくれたものも多い。

例えば、スポーツ選手。彼らは日々の試合の空き時間に全国の小児科病棟を慰問したり、ビデオで難病の子たちを励ましたりしている。セレッソ大阪の主力選手が慰問に来てくれた時は病院の救急に担ぎ込まれた直後だったので記憶にないが（母から聞いたのである）、巨人の高橋由伸選手の励ましはうれしかった。がんばれ！とのメッセージに苦い薬をがまんして飲んだ記憶がある（だから阪神ファンの私だが高橋選手の打席だけは、心の中で応援している）。また、阪神の赤星選手は盗塁するたびに車椅子を贈り、それが病院で大活躍している。このように世間には知られていないが、がんばっている子供たちを応援してくれている人たちがいることを入院生活で知ったのだ。

もうひとつ。退院してから知ったことがある。それは入院費の多くを税金で補助してもらったことだ。正直家は貧しく、発病した時は相当の負担があると両親は覚悟したらしい。しかし、厚生労働省の難病指定だったので、多くが免除になったそう。いや、免除になったというより、税金で賄われたのである。私は国民が納める税金で助けられたといってよい。そういう視点でネットや情報を調べてみると、世の中には知られていないが社会を維持する多くの仕組みに税金が活用されていることに気が付いた。学校、公園、道路、下水道…。あるのが当然、整備されてないのがおかしいと思うくらい当たり前のことかもしれないが、世界へ目を向けると、国の貧困のために整備されている国の方が少ないくらいだ。スポーツ選手も税金も目立たないが社会を下支えしていることはもっと知られても良いのではないか。

この間、家族で食事をしている時、世の中から「感謝」という言葉を聞くことが少なくなったということが話題になった。私たちは、いや私は自分一人で生きているわけではない。現に死にかけた時に、多くの人や仕組みに支えられたので、今ここに生きていられる。そのことに感謝し、逆にいつか責務を果たさねばならない。

今はまだ、将来の生き方を決めていないが、仕事に就き収入を得るようになると税金を払うことになる。税は義務だが、一方で一人前の人間としての責任を果たすという意味もある。私にとっては、何より過去に受けた恩を少しでも返すという意味がある。税を通じて次の世代に貢献し、陰ながら感謝されることが私の誇りになるはずだ。

「助けてくれて、本当にありがとう」

茨木市立平田中学校三年 中島 弘貴

私は生まれて四日目に一度死にました。自分では記憶にないですが、心臓が止まったそうです。その後、医師や看護師の皆様が懸命に蘇生させてくれて、産院から大きな病院へ救急車で運ばれ、NICU（新生児特定集中治療室）に入りました。退院後も大学病院に通っていました。その時の後遺症があったのか、その後自宅で発作を起こして何度も救急車で運ばれたことや入院していろいろな検査を受けたことを覚えています。それ以外にも出生時の影響で、幼稚園の時は右目があまり見えなかったため、眼鏡をかけ、アイパッチをして矯正もしていました。今は中学生になり体も大きくなったこともあって、発作が起これなくなりましたが、原因が分からないので、今でも定期的に検査を受けています。

今回、「わたしたちの生活と税」を読んで、学校教育はもちろんのこと、医療費や消防費に多くの税金が使われていることを知りました。中学生に一年間で約百万円の教育費が税金で賄われていることに驚くと同時に、同じ中学生の中でも私には今まで医療費と消防費でいくらかかったのか想像もできません。

発作を起こした時は大学病院に連絡すると大至急救急車を呼ぶようにとのことで、十回近く救急車に乗りました。小児特定疾患の認定も受けていたこともあるので、基本的に窓口での医療費負担はほとんどありませんでした。でも今年の四月に愛知県から大阪府に転居して来て、病院へ定期健診に行ったところ、採血と脳波の検査で自己負担が七千円以上ありました。その時は単純に「何て高いのだろう。」と思いましたが、改めて考えると今まで自分が払っていなかっただけで、すべて税金が投入されていたことに気が付きました。

自分一人が病気でしんどい思いをして、家族や医療機関の皆様助けられて、何とか中学生まで生きることができたと思っていましたが、さらに見えない税金にも助けてもらっていたことを実感し、心から感謝の気持ちで一杯です。

自分は中学生なので、税金を納める立場にはありません。税金は取られるというイメージで語られることも多く、あまり好きな言葉ではありませんでした。でも、自分が税金にお世話になっていることを認識することで考え方が変わりました。自分だけのことでなく、小さい時に小児病棟で多くの子供たちが長い間大学病院で入院生活を送っていました。あれだけの数の子供が治療を受けられるのも、税金のおかげです。医療費に限らず、将来の年金や公共事業にも、税金がいかされています。同学年の中でもかなりの税金が投入された私だから、働きだしたらきちんと納税したいと思います。

最後になりますが、税金を負担してくれた皆様、「助けてくれて、本当にありがとうございました。」

「どうしたらいいの。このままじゃ帰国することもできない。」

先日、海外から来日した友人が、空港から市内へ向かう列車の中で鞆を紛失した。長旅の疲れからうっかり車内に置き忘れて下車してしまったらしい。大変なことに、鞆の中には現金のほか、パスポートを含む身分証明書までが入っていた。見知らぬ異国の地で全てを失い、取り乱し落ち込んだ様子の彼女は見ているのも辛いほどだった。もちろん私達はすぐに電鉄会社に電話して事情を話した。親切に話を聞いてくれた電話口の人はずぐに関係各所に連絡をとって列車の中に鞆が残っていないかどうかを調べてくれた。残念ながら鞆は無かった。

置き忘れられた鞆。貴重品が入った鞆。見つかるはずがない、と泣き腫らした目で抵抗する彼女を説得し、警察へ紛失届けを提出した。

ニュースが舞い込んだのは翌日だった。「見つかりましたよ。列車の中で忘れ物に気付いた乗客の方が駅に届けてくださいました。」

友人は再び涙を流した。今度は喜びと感謝の涙を。「なんて素晴らしい国なんだろう。信じられない。」彼女が、世界に知られる安全な国日本とその国の正直な人々について再確認を得たことはもちろんだが、もう一つ彼女の心を捉えたのは日本における警察組織の機能の高さだった。前日失った鞆が翌日にもう発見され手元に戻る。

はっとした。私達が当たり前のように享受している高水準の公共サービスは、実は世界のどこででも受けられるものではないのだ。

納税の方法について、またその税金の使途について様々な意見があることは承知している。しかし、私達が安心して穏やかな日々の暮らしを送ることができる支えとなる公共の仕組みも私達の税金によってまかなわれるものの一つだ。

いつだったか母がつぶやいたことがある。「もう辞めたい・・・。」そのとき母は仕事で壁にぶつかっていた。しかし、翌朝「やっぱり働く。働くことのできる状況にある限り、働く。働いて納税する。そうしてこそ自分の意見を述べる権利を持つことができるから。」あの時はよくわからなかったが、今回の一件で思い出し、考えた。働く、そして納税する。そうすることによって、自らが、家族が、公共の相互扶助のシステムに加わることができる、母はそんなことを思っていたのかなと思う。むろん、健康や家族の事情で働くことができない状況は誰にも起こりうる。決してそのような状況を、そのような人々を批判するのではなく、できるときに、できる人が働く、そして助け合う。私の母国にはそういう国であってほしい。そのような国を作りたい。

国民の三大義務の一つである納税。私も立派にその義務を果たすことのできる大人になりたい。

僕の納税義務

加古川市立浜の宮中学校三年 谷 健介

僕には、難病指定を受けたお婆ちゃんがあります。税金のことを考えるとき、いつもこのお婆ちゃんの言葉を思い出します。

「お婆ちゃん家は、何にも残ってないけど、孫の話を聞くのが一番の楽しみなんだよ。私みたいな年寄りでも、何とか暮らしていけるのは、世間様のおかげなんだ。ありがたいことだ。」

と口癖のように言っていました。最初聞いた時は、「世間様」って誰のことだろう。具体的には何のことか、さっぱり分かりませんでした。

でも、検査入院に付添った時に、父親から詳しく話を聞くことが出来ました。今のお婆ちゃんの命と生活を支えている、主治医の往診や検査と治療、訪問介護サービスなどは、本来高額のものである事。でも、自治体によって、自分で負担しなければならない金額の上限が決められている事。自宅のバリアフリー化や介護用品を買うときに、補助金がとても役立った事。けして裕福ではない我が家でも、難病を抱えた人一人の面倒を看られるのは、日本の社会保障制度が、「共済」の理念で運営されているお陰なんだと、教えてもらいました。

共済とは、「お互いに助け合い、力を合わせて事を行うこと」だそうです。お婆ちゃんの言う世間様とは、近所の人ということではなくて、広く日本社会全体のことを指していて、全ての人に感謝しなければならないと言っていたのです。

外国の中には、日本と違う医療制度の国があるそうです。アメリカなどは、医療保険の加入の義務が無いので、個人の意思と判断で選択するのが普通とされています。でも実情は、社会的に成功した勝者には都合が良いけれど、突然の病気や怪我で、本当に保険が必要な人々には、無慈悲な制度になってしまっているそうです。

僕は、日本の医療保険の考え方に、賛成します。その方が安心出来るからです。何かあっても支えてくれる制度があるからこそ、仕事や研究に、全力で取り組めるのだと思います。安心を安定して保証する制度が、日本の経済や文化の力を、高めてくれるに違いありません。

社会保障制度の出発点は、みんながそれぞれの努力を、認め合うことです。そして、その制度の原動力として、欠かせないのが税金です。僕の大好きなお婆ちゃんを、助けてくれているのもみんなの税金です。こう考えるまでは、買い物をして消費税を払う時、「取られる」と思っていたましたが、正しくは「納める」だと実感するようになりました。中学生の僕でも、納税の義務を果たすことが、誰かの大切な人を助けることになり、世間様への恩返しになるのだと思うようになりました。

私たちの生活と税

香芝市立香芝北中学校三年 小山 美咲

「税金」といわれて私が一番初めに思い浮かべるのは消費税で、あとは所得税があるくらいで、税についてはどのような役割を果たしているのかあまり何も知りません。

そこで、税金について少し調べてみることにしました。すると、私たちの周りにはたくさんの税金で成り立っていて、大切なものだと分かりました。私が理解するのは難しいことも多いけれど、はっきりとわかっていることは、税金のおかげで社会が成り立っていて、私たちの生活が守られていて、本当に豊かな恵まれた生活が送れているということです。

もし、私たちが誰も税金を納めなかったらどうになってしまうのか、と考えてみました。犯罪が起きても警察官がいなかったら町の治安は悪くなってしまいます。火事が起こっても、消防士がいなければ消防車もありません。安心して水道から水を飲めません。義務教育がなくなり、学校に通えない子も出てきます。ゴミの回収が行われなくなり、ゴミでいっぱいの方に病気の人があふれ、修理がされない道路では、目的地に行くのも難しくなります。年をとっても生活の心配があります。そんな社会では人間の心もすさんでいき、自分勝手な人間が自身の私利私欲に走りみんなで協力することの大切さを忘れてしまうのではないかと、税金制度は、いつも誰かに助けられて、自分自身も誰かを支える、という生きていく上でとても重要なことが根底にあり、それを教えてくれているように思えます。

私はまだ中学生で税金の使い道については自分はまったく関係のない話と思っていました。納める税金といっても消費税だけだし、それも親がかせいでくれたお金で払っています。しかし、あと数年ほどすると私自身が働いてかせいだお金から納税することになります。払った税金がどのように使われていくのかについて強い関心をもって見守り、確かめ、正しく使われているのか、監視していく姿勢が大切になってくると思います。そして、積極的に税金に対する知識を持つように努め、自分の考えを持てるようにならなくてはならないと思います。

消費税もまた、引き上げられるようです。今まで働いて税金を納めてきてくれた祖父母や父母の世代に続いて、これからは私たちが誰もが安心して暮らせる社会作りの大事な役割を果たさなければなりません。みんなの幸せのために社会を支える一人の人間として、私はきちんと税金を納めようと思います。税金は、みんなに平等で、みんなの生活をよりよくしてくれるものだと思います。

暮らしと税

日高町立日高中学校三年 松原 実由

私の曾祖母は、今九十六歳で、ひとり暮らしをしています。「いったい生活費はどのようにしてまかなっているんだろう」と、私は疑問を持ちました。高齢なので、自分で働いてかせぐことはできないし、収入源はないはず。そこで私は、祖母にたずねてみることにしました。

祖母によると、生活に必要なお金は、年金でまかなっているのだといいます。いわゆる、年金暮らしということです。私は、年金には、税金が使われているということを知っていました。そこで、曾祖母の暮らしを支える税金について興味をもち、調べてみることにしました。

年金は、社会保障という公的サービスであることが分かりました。社会保障は、税金の使い道のなかで、一番多く使われています。私は、社会保障には、年金以外にどのようなサービスがあるのだろうと思い、更に調べてみました。

社会保障には、医療や介護、福祉などのサービスがありました。介護や福祉のサービスは、私にはまだ必要ありませんが、曾祖母の場合、このサービスも利用しています。また、医療という面では、私も税金に助けられていることになります。病院でかかるお金の一部には、税金が使われていると分かって、税金は、色んな形で私たちの役に立っているのだと感じました。

他にも、道路や下水道などの整備、私たちが通っている学校にも、税金は使われていました。私は中学生ですが、公立学校の児童、1人あたりの年間教育費の負担額は、中学生だと、947581円にもなるそうです。約95万円もかかっていたなんて、私はとてもおどろきました。今まで、税のおかげで学校で勉強ができたのだと、税がすごくありがたく感じます。

私は、私の曾祖母は年金暮らしをしているうえに、介護や福祉などのサービスを利用して、たくさんの場面で税金に助けられているのだなあ、と思っていました。しかし、詳しく調べてみると、税金にたくさん助けられているのは曾祖母だけではなく、私の暮らしにも、税金に助けてもらっていることはたくさんあることが分かりました。

もしも税金がなかったら、と考えると、私たちの社会や暮らしは、とても不便になると思います。税金は、私たちの社会と暮らしを支える、とても大切なものだと感じました。

これからは、税金の大切さを忘れず、曾祖母のような高齢者の役に立つためにも、納税の義務を果たし、社会貢献ができるような大人になりたいと思います。

私たちを支える税金

岡山市立操山中学校二年 村上 綾

私は今まで税金について深く考えたことがありませんでした。しかし、今回この作文を書くにあたって初めて自分なりに税について考えてみました。しかし私の中では「増税」や「税金の無駄使い」といったマイナスのイメージしかありませんでした。特に今年の四月からは消費税が五パーセントから八パーセントに上がり、少ないおこづかいでやりくりしている私にとっては辛い現実です。

そこで私は、自分を納得させるために、本来税金とはどのようなものか調べてみました。すると、とても身近な所で使われていることを知りました。まず、普段何気なく歩いている整備された通学路や歩道橋、そして信号機なども全て税金でまかなわれているのです。

私はふと、小学生の頃の通学路を思い出しました。登下校で必ず使う歩道橋のステップの滑り止めが何段も外れ、とても危険な状態になっており、低学年だった私はとても登りづらく、雨の日には怖い思いをしながら通っていました。しかし保護者の方がそれに気付き市役所に連絡をして下さって、ほんの数日できれいに修理されていました。修理された歩道橋はとても登り降りしやすく、安心して通学できるようになったことを覚えています。

また、兄の高校の通学路にある信号は大勢の生徒が渡り切るまでに赤に変わってしまい危険であるということから、市が工事をして、青の時間を数秒のばしてくれたそうです。一つの信号をほんの数秒変えるということは、その付近、いやもっと離れた所までの信号を全て調整しなければならなく、大変な工事なのだそうです。しかし学生の安全が第一だということで迅速に工事をして下さり、歩行者も自転車も余裕をもって渡れるようになったそうです。

普段私たちが安心して通学できるということは当たり前のことではなく、まわりの人々の支えがあるおかげなのだと感じました。そしてその支えとは皆が納める税金から成り立っているということです。

最近メディアでは政治家たちの政務調査費の問題や、増税に対する不満を述べる人々の映像をよく見ます。実際日本は赤字がつづいているため、税金を増やすことは対策の一つなのかもしれません。しかし国民の一人一人が不正をせずしっかりと税金を納めることにより少しずつでも改善されるのではないのでしょうか。

私はまだ中学生ですが、いつか大人になり仕事をするようになったらこれまでの恩返しのためしっかりと税金を納めていこうと思います。

「ロシアの税に比べると、日本のは低い方だ。」

突然、祖父が私に言った。祖父は大のロシア好きで、気がつけば仕事でロシアに行っている。そのおかげで、というよりは、自然の成り行きなのか、私はロシアとのクォーターである。

「ロシア政府はガツンと税率をかけて、後に税率を下げた。日本はじわじわと上げているから優しいものだ。それでも文句を言う人達はあまりに国の状況を理解していない。」

祖父の言葉が気にかかり調べてみた所、ロシアの消費税は二十%。導入した年には二十八%も払わねばならなかった様だ。何に使用されているかを見てみると、概ね日本と変わらない。医療費、教育費などに使われている。

二十%のロシアと、来年十%になる日本。違いを比べてみたい。

日本は、医療費が三割負担である。一方でロシアはなんと全額免除である。また、日本は公立の小中高校の学費が無償化した。ロシアはというと、納税者、つまり大人が国の認可した学校へ行く際にも免除されるという。その他にも、ロシアでは認可を受けた任意年金基金へ支払った納税者、配偶者、扶養する両親や子供に関する年金積立も控除になる。日本ではどの商品を買うにしても一率だが、ロシアでは食品の一部、肉、魚、野菜、ミルクなどは優遇税率十%となっているそう。

ぱっと考えると、百円の物を買うのに百二十円払うより百十円払う方が生活は楽になる。しかし、教育費や年金、学費のことまで計算に入れると、どちらが住み易い国なのかといえは難しい問題である。

消費税率アップと言われると、なんだか苦しめられている様な気持ちになってしまうが、よく考えればそのお金はほとんど私達に返って来ているものだ。同じ国で生きる人々が貧富の差によって、教育や医療の面で大きな差がつかないのは、間違いなく税金のおかげである。消費税を上げても、それを還元するとどちらの国も赤字になるそう。

国民全体の事を考えると、消費税率引き上げも仕方のない事だと思う。しかし、我が家の食卓事情を考えると、ロシアの様に優遇税率を取り入れて欲しいとも思う。生活をして行く上での嗜好品の税率は、もう少し引きあげても良いかもしれない。しかし、そうするとある一定の分野に携わる会社が不景気に陥ってしまうかもしれないので、それもまた問題となるだろう。税はとても興味深い。

国を動かす人々は様々な事を踏まえた上で税を決めていくが、それでもまだ足りないというのが実情であることが分かった。私達が大人になり、また私達の子供が国を支える時代に、より良い日本になっている様、私も税について真剣に考えていきたい。税についてもっと勉強し、出来れば将来国税庁に入り、全力で税に取り組みたいと思う。

税金について

大洲市立平野中学校三年 福泉 平里

「税金とは何か。」そう聞かれたとき、説明が思い浮かばなかった。辞書で調べてみると「租税として納めるお金」「政府の主とした収入」と書かれてあった。所得税や法人税、相続税など種類もさまざまだが、中学生の私にとっては、正直遠い存在のように思えて、興味を持ったことはなかった。

ところが、四月に一気に税金を身近に感じる出来事がおこった。消費税が5%から8%にアップしたのだ。マスコミでも、この話題が毎日のように取り上げられていた。たかが3%と思っていたけれど、毎月読んでいる雑誌も、大好きなお菓子も、全てにかかってくる税金なので、ばかにならないことに気が付いた。両親におこづかいの値上げを頼んでみたが、だめだった。消費税の分だけ、お給料は上がっていないというのだ。理解はできるが、なんだか腹が立った。

それに、もう一つ私が残念に思うことがある。

例えば、百円ショップに行くとする。以前は一個で百五円、二個で二百十円……とお年寄りや小学生でも楽に計算できていた。ところが、8%になると数字が微妙で、計算がしづらい。買い物の金額が合っているのかどうか、計算機でも持っていないと不安に感じてしまうのだ。

消費税の表記の方法についても問題があるようだ。母がスーパーのチラシを見て、つぶやいていた。A店では税込みの値段で表示しており、B店では税別の表示。一目でどちらがお得かが、わかりにくいというのだ。小さなことではあるけれど、毎日のこととなると、かなり家計に影響があるらしい。

このように今回の消費税アップは、様々な問題があったと思う。では、5%のままで良かったかという、そうでもない。

最近、新聞やニュースで、日本が大きな負債をかかえていることをよく耳にする。国の赤字がこれ以上増えて、私たちが大人になる頃に、日本が経済的に崩壊することだけは避けなくてはならない。

だから、この冬にも議論される消費税を10%に上げるという方針は、仕方がない気がする。未来が良くなるのなら……。

小さい頃に読んだ童話に、「アリとキリギリス」というお話があった。冬に備えてコツコツと努力を重ねるアリ。今、私たちは同じ思いで未来に向けて一歩を踏み出そうとしているのかもしれない。

だからこそ、国も税金の使い方を真剣に考えて、無駄を省き、弱者に優しい税制を作ってほしいと願っている。そして、私たちが大人になって収入を得るようになり、様々な税金を納めるようになったら、笑顔で、喜んで納められる日本になってほしい。

税金を納める喜び

須崎市立朝ヶ丘中学校三年 鈴木 叶笑

税金を納めるのが大好きだという人はいないでしょう。人より多く税金を納めることができ嬉しいという人もあまりいないでしょう。少なくとも私はそういう人に会ったことはありません。

そんな中、自動車会社の豊田社長の記事を読んで衝撃を受けました。豊田社長は二〇〇九年六月就任以来、国内では五年間も税金を納めていなかったというのです。あんな大きな会社なのに税金を納めていないなんてことがあるのだろうかと驚きました。でも、もっと驚いたことが税金を納めることができた時、豊田社長は「企業は税金を払って社会貢献するのが存続の一番の使命。」と語り、「一番嬉しいのは納税できること。納税できる会社としてスタートラインに立てたことが素直に嬉しい。」と書いてあったことです。会社は社会の一員である以上、税金を納めるということは、会社としての責務だということです。また、海外に比べて日本は法人税が高い中、拠点を海外に移さないのは、日本人として日本に税金を納めたいという信念があるからだと思いました。日本の企業の中には日本の高い法人税を納めること避けて、法人税の安い国へ拠点を移している会社もあるようです。だから今、日本では法人税を下げようとする動きがあるようです。法人税を下げたこれ以上企業を海外に出さずに、少しでも日本で税金を納めて欲しいからだそうです。また、海外の企業を日本に誘致させる目的もあるようです。

よくテレビで会社の脱税のニュースを見ます。経費の水増しや何を経費として認めていくのかによっても、税金は違って来るそうです。芸能界においては、個人の髪の毛が薄い場合、カツラは経費として認められているけれど、増毛の費用は認められていないなどテレビで見ました。脱税までいかなくても、節税という言葉も耳にしたりします。だから会社は少しでも税金を納めたくないものだと私は思っていました。もちろん私も、今年の四月から消費税が五パーセントから八パーセントに上がったことで自分の買える物が減ってしまうから嫌だなあと思っていました。

でもそんな中、私は豊田社長の記事を読んで考えが変わりました。税金は国に納めているのではなく、将来の自分自身の為に納めているということです。税金は確かに一度、国に集められているけれど、いずれ私たちに返ってきます。もし、税金が無くなれば私たちの生活は成り立たなくなることでしょう。社会にとってどうしても必要なものである以上、私は避けることをせず、積極的に納めることができる大人になりたいです。税金を納めるということは社会に貢献しているということになると思うからです。

税に守られて

福岡市立城南中学校三年 小池 秀明

突然、平和な日常が壊れたとする。その時に自分の身を救うのはいったい何だろう。年々増えている高齢者の方々は、いつ何が起きてもおかしくない。そういう場合、日常が壊されるのはその親族だ。

一年前、伯父の母が突然、病で倒れこんでしまった。当然、息子の伯父は、しばらく介護を続けなければならなくなった。しかし、伯父は、ただでさえ所得が少なく当時はとても職場を離れられる状況ではなかったという。近くに頼る親戚も住んでいない。

伯父は、仕事を手離すかどうかまで悩み抜いたそう。そんな時に、伯父が知ったのは、在宅サービスの存在だった。伯父の住む市では、在宅サービス利用者負担助成制度というものがあり、所得の少ない人に対し、負担を減らしてくれるそう。その事を知った伯父は早速、手続きを済ませ、無事、在宅サービスを受けることができた。伯父は、

「市の助成には本当に助かった。」

と感謝しているようだった。まさに、伯父の日常は壊されずに守られたのだ。

今回、僕は、伯父の言った助成金が税金で賄われていることを知った。この助成金は、社会保障給付金の一部であり、その内、介護は一パーセントにも満たないということも同時に知った。近頃、ニュースや新聞で見られる介護や福祉に関する記事は、伯父の体験談のような物は、少ないのが現状だ。これから若者の負担は重たくなっていくというのも避けられない事かもしれない。

その現状を打破すべく、今、話し合われているのが消費税増税だ。増税によって得られるとされるのは、社会保障の充実と安定である。つまり、これからの二パーセントの増税で伯父のように救われる人々が大幅に増えると考えられる。それは、間違いなく社会保障を受ける人にとって良いことだ。

正直、消費者の立場からして、消費税の増税は喜ばしい事とはなかなかとりづらい面がある。税が、社会で生活するための会費ならば、豊かに暮らす権利がある。だが、忘れてはいけないのは、国民には税を納める義務があることだ。税を自分勝手な理由で納めないということは、豊かに生活する権利を失うことになると思う。守られるからには納める義務がある。

誰もが突然の日常の変化の脅威にさらされる可能性を持って生きている。そんな時に最後の頼りになるのは税だろう。明日、自分の身にも起こるかもしれない日常の変化の脅威から救われる人が一人でも多くなるように、僕は納税の義務を果たせる人間でありたい。

皆の税に助けられ、私は今を生きる。

久留米市立屏水中学校三年 石橋 里菜

私は、皆の税金でとても助けられています。なぜかと言うと自分が病気で、治すための薬はとても高価で保険適用外の薬だからです。でも慢性特定疾患医療証という医療証のおかげで薬を飲み続けることが出来ます。

私は、自分が今中学三年生になり受験しなくてはいけないということ。そして自分の持つ持病が、最近再発が続いていつもの薬では効かなくなっていて体調が悪いことで不安な気持ちでいっぱいでした。

中学三年間で今年はどんな事があっても頑張らないといけないと思っていたのに体がきつくて思うようにいかなくて辛い気持ちで毎日を過ごしていました。

そんな時担当医の先生から新しい治療法が出来て治療が始まり、私もその治療を受ける事が出来るという話を聞きました。

私は、これで頑張れるかも知れないという明るい気持ちになれました。

私は、今まで税について真剣に考えたことはあまりなかったけれど、自分がこのような形で皆から助けられていると思うと、税金とは国民皆が健康や安全に、そして幸せに暮らしていけるように皆がお金を出し合っているのだと私は思います。

世の中には色んな事で助けを必要としている人がいます。

震災で生活出来なくなってしまった人たち、

障害やケガで生活出来ない人、

家族もなく一人寂しく生活している人、

私のようななかなか治らない病気の人、

自分の身近な人の中にもそんな人達がいるのではないのでしょうか。

私が初めて病気を発症した時、両親はとても心配して、ちゃんと治るだろうか、この子の人生はどうなるのだろうか、と眠れない程心配したそうです。

でも今は今回のように新しい治療を受けられる事になったり一人じゃない、皆に支えられていると感じ心強く感じました。

自分で働き税を納め困っている人を助け国を豊かに出来る税は素晴らしい仕組みだと思います。

私は今自分がたくさんの人に助けられているという事を決して忘れません。

そして治療を受け健康な体になり社会の一員になったら一生懸命に働き、少しでも困っている人の力になれる様に税をきちんと納めたいです。

受験という大事な時に心が折れそうだった私が「頑張ろう」という気持ちになれたのは皆の支えで良い治療を受ける事ができるという希望と喜びでした。

今この作文を通じて税を納めてくれている全ての皆さんに感謝の言葉を伝えたいです。

本当にありがとうございます。

祖父の健康を支える税

学校法人筑陽学園筑陽学園中学校三年 福留 健志

最近「健康寿命」という言葉をよく聞く。

健康寿命とは、健康上の問題で日常生活が制限されることなく生活できる期間で、厚生労働省によると、平成二二年の日本人の健康寿命の平均は、男性が七〇．四二年、女性は七三．六二年だそうだ。私の祖父は昨年八月に七〇歳になり、まさにこの健康寿命を越える時期に突入し、立て続けに病院のお世話になることになってしまった。

初めは、前々から具合の思わしくなかった左手小指の関節の手術。次に、小指の手術で整形外科に入院中の二週間余りで、心房細動という病気が確定し、前立腺癌の疑いも浮上した。祖父は、退院してからも、指のことでは整形外科に通い、しばらくしてリハビリも始まって、心房細動は服薬を開始、そして心配な前立腺は、入院や通院など検査が続いた。結局、前立腺癌だという結果が出て、それも悪性度が高めでリンパ節への転移も疑われるリスクの高い状態だと分かり、今はホルモン療法を選択し治療中である。

祖父は二週間余りの入院の後、いったい何度病院に通っただろう？とにかく病状が心配だったが、通院にかかる費用についても気になった。これからも長い治療が続くというのに、いったい家計は大丈夫なのだろうか？不安な私に、祖父はこんな話をしてくれた。

「社会保障の制度で、医療費の一部には税金が使われとうのは知っとるよね？一部と言っても、私の場合は一割の負担やけん、九割分も税金で払ってもらっとると。それに、高額療養費制度もあるけん、一ヶ月の自己負担限度額も決まっとうし、超過分も税金が使われる制度になっとうとよ。ほんと、ありがたいことやね。」

私も税金のありがたさを感じ、税金のことを改めて知りたいと思った。

そこで、中学校で配布された「わたしたちの生活と税」の冊子を手にとった。国や市町村が行う様々なサービスの費用の一部を、国民が「税金」として出し合い負担していることが分かった。

祖父の医療費は、いったい何人の方の納税に支えられたのだろうか？私も、買い物をする時には消費税を払っている。こんな少額な納税も含め、積もり積もって祖父の健康を支えてくれているのかと思うと、ますますありがたい気持ちになった。

一方で祖父は、今も現役でお店を経営し、納税もしている。でも次は、私たちの番だ。私も将来社会人になったら、納税の義務をしっかりと果たし、家族や多くの人の健康を支えられるようになりたい。

「最近、髪の毛が増えたっちゃんない？」

と、私が祖父をからかうと、

「そうか？治療の副作用もいいもんやね。」

と祖父は笑う。税の支えのおかげで、祖父は今日も、そして明日も笑う。

私達の未来

佐賀大学文化教育学部附属中学校三年 中島 陽美

スタッフ十五名と一緒に両親は自営業を営んでいる我が家です。月末になると、口癖のように母は「忙しい。」を連発します。給料計算、業者への支払い、税務署への納税等、忙しくなるからです。

両親は以前、公務員だった為に全て税金等、給料からの天引きで、あまり「税」に対する意識が少なかったそうです。しかし、経営者となり、毎月、毎月、スタッフや自分達の給料から天引きする、所得税、市・町村民税等を納める事になり、強く興味を持つようになったそうです。我家の冷蔵庫のとびらに張ってあるカレンダーには、赤いマジックで「納税忘れるな。」との文字が書かれています。「納税」は母にとって重要な仕事のひとつとなっています。

日本国民の三大義務である一つに、「納税の義務」があり、「国民は法律の定めるところにより納税の義務を負う」というものです。

私が身近に感じる「税金」といえば、消費税です。平成元年春から施行され、現在は八%の比率となっています。将来的には、一〇%～十五%位までになるであろうと言われています。デンマーク・スウェーデンの消費税は二十五%です。福祉関係が充実しており、老後も安心した生活を送れると言われていています。将来を見据えて、高齢化、少子化傾向を含めた政治の動きに注目です。他にも、いろいろな「税」があり、現在、私達が豊かな生活が成り立っている大きな柱と言えます。

しかし、納税の義務を果たしていない国民がいることや、「税金」がやや不透明な使われ方をされているのは事実です。テレビや新聞で、「脱税」や「税金の無駄使い」等のニュースを目にすると、父は「きちんと納税している国民がいるのに。働く意欲もなくなるな。」とつぶやいていました。国民が汗水流して働き納めた「税金」を、「よりよい日本」「世界に貢献できる日本」の為に、大切に使ってほしいと切望します。そして、何よりも大切なことは、国民一人一人が納税義務を果たす事です。

私も自分で品物を買った時に、わずかですが消費税を払っています。このお金がどこで何に使われているのか、今まで何度か聞いたことがありましたが、深く興味を持つことはありませんでした。

今回の課題でより「税」について身近に感じ、意識するきっかけとなりました。

「日本」を動かす国民の力が集まった「税」、今を生きる私たちの為に、そして、子孫の為に明るい未来を見据えた社会貢献をしていきたいと思います。

「ひいおばあちゃんから学んだこと」

和水町立三加和中学校三年 一丸 詩織

私のひいおばあちゃんはおとし、92歳で亡くなった。

ひいおばあちゃんは高齢だったから体も弱く、家で寝たきりだった。でも、私が来るといつも窓から笑顔で名前を呼んでくれる。

ある日、祖父母たちがひいおばあちゃんを介護施設に入れようと言いだした。私は、ひいおばあちゃんと離れるのは嫌だし、本人だって、きっと施設なんか嫌だろうと思ったから反対だった。

でも、確かに介護が大変なのは分かっていた。ひいおばあちゃんをお風呂に入れ、トイレに行かせ、ご飯を食べさせ…その時の世話をする人達はきつそうな様子だった。特によく世話をしている祖父母たちにも自分の仕事など、他にやらなければならないことがある。それでも毎日お世話をしていた。ひいおばあちゃんの子供は多かったけど地元にいるのは二人だけ。そんな間にも話は進み、とうとうひいおばあちゃんは施設に入った。

それからというもの予想通り、ひいおばあちゃんには会わなくなった。施設は遠いし時間もない。だけど、母がひいおばあちゃんの所に行った時、

「おばあちゃん楽しそうに笑ってたよ。」

と話していた。そういえば、祖父母たちにも少し余裕ができたみたいで楽しそうだった。

それから一年くらいたって、ひいおばあちゃんは施設で帰らぬ人となった。

学校で税の勉強をしている時、そんな亡くなったひいおばあちゃんが行ってた介護施設のことを思い出した。私は今まで税なんて払いたくないとかめんどうだと思っていた。だけど、ひいおばあちゃんを最後までしっかりお世話し、笑顔にさせてくれる介護施設の一部には税が使われていると勉強してからは、税を払うのが心なしか苦ではなくなった。それと共に、税がなくなると色々な物が不便になる事も学んだ。

介護施設がなかったら、ひいおばあちゃんはもっと早くに亡くなってたかもしれないしお世話をしていた祖父母はもっときつい思いをしなければいけなかったかもしれない。

私は今まで税のことを軽く考えていたし、まだ子どもの私達がどうして払わなければいけないんだろうとばかり思っていた。しかしそんな私の考えは間違っていると生活の中で教えてくれた。生きていくうえで、人が笑顔になるため、命を守るために必要なのだと学ぶことができた。

みなさんは税のことをどう思っているだろうか。やっぱり嫌だと思ってる人は多いだろう。けれども本当にそうだろうか。きっと自分の大切な人が危険な目にあったり、いなくなったりした時、気づくことができるだろう。税は私たちの幸せを守るものだ。

「お父さんは増税反対じゃないんだ。」

お父さんの言葉に衝撃を覚えたのは、とあるファミリーレストランでの出来事である。

「だって、消費税が上がると物価が上がってしまって欲しい物が高くなっちゃうじゃん。」

「結局、増税とは自分達のためでもあるんだ。」

そう言われるとそのような気もしてくるが、そもそも税を高くすること自体、納得がいかない。自分達のためと言われても、いまいちピンとこなかった。ただ、増税に賛成する人が身近にいたことが驚きだった。

「なんで増税は自分達のためになるの？」

「社会保障って知ってるかい。」

シャカイホショウ。中学受験の時、覚えたが、もはや忘れかけていた言葉だった。お父さんが言うには、現在のお年寄りの方がたの社会保障費は税金でまかなわれているという。高齢化により、お年寄りの数は増えてきているので、社会保障にかかる費用も増えてきている。このままでは国のお金がなくなる。そう考えた政府は消費税を八パーセントに増やして、増えた三パーセントの分を社会保障費に使おうということなのだ。

「でも、お年寄りの方がたに対する社会保障がどうして自分達のためにもなるの？」

「実用的な面で言うと、現在の社会保障を、増税することで続けられるなら、今後自分達にも社会保障で国が保護してくれるから安心だよな。」

ははん。なるほど。確かに社会保障が自分達の老後にもあったら、将来安心して暮らしていける。そのために増税をするのなら、僕も賛成だ。

「他にも、増税には今のお年寄りへの感謝の気持ちもあるんだよ。」

「感謝の気持ち?!」

「そうだよ。今、社会保障を受けている高齢者の方がたは、戦後ボロボロだった日本を引っばってたて直してくれた人達だ。もし、あの人達がいなかったら、今の日本はないよ。そんな恩人への感謝の気持ちを増税という形で表せるんだったらこっちもうれしいよね。」

そうだったのか。増税で増えた三パーセントは、今の日本を作ってくれた人達への感謝の気持ちなのか。とても感動した。普段買い物をする時に何も考えず払っている消費税八パーセントでも感謝の気持ちの集まりだったのだ。ならば、買い物をする時も、「今の日本を作ってくれてありがとう」という意識をもって消費税を払えば、八パーセント以上の効果になるというわけか。

あるファミリーレストランで習った増税の真の思いを僕は一生忘れない。来年も消費税が十パーセントに上がりそうだと聞いたが、お年寄りの方がたが少しでも楽になるのならば、予定通り進めてほしい。

これからは、百円ショップで払う八円にも思いを込めて八援として払いたい。

「命を救う車」

浦添市立浦添中学校三年 前川 真美

姉が事故に遭った。夜十時、突然掛かってきた電話に、私達家族は慌てました。運転していたのは姉の友達でしたが、「姉に何かあったら…」と私は気が気ではありませんでした。すぐ母は病院に行き、姉の無事を確認してくれました。数時間後、私は元気な姉に会い、命あることを喜び合いました。

車は半壊。幸いにも、姉は腕の傷だけですみ、姉の友達は無傷でした。

その時のことを、何度も姉は話してくれます。私に会えなくなると思った、と。私はそれを聞いて、適切な対応をしてくれた通行人、すぐに駆けつけ病院に運んでくれた救急隊員、救急車への感謝でいっぱいになります。大袈裟ではなく、生きた姉に会えたのは、その方々のおかげなのです。

姉を運んでくれた救急車は、正式名称を「救急自動車」といい、税金で動いています。事故や事件が起きたとき、一一九番をすれば確実に駆けつけてくれる、頼もしい存在です。まさに、私達の命を救うための車といえます。出動回数が増加している近年、要請の過半数が入院加療を必要としない軽症だということがわかりました。電話一つで呼ぶことができ、国民全員が無料で利用できるのは、誇れることです。しかしそれが、“タクシーのような利用”へとつながっています。「虫歯が痛む」「深爪した」「病院まで歩くのが苦痛」などのくだらない理由の不適切な要件を、拒否できないことも大きな要因です。

一件の出動では、平均約四万円ほどの経費がかかります。そのお金は地方税で賄われているので、無料なのです。世界では、救急車利用が有料なのは珍しくありません。日本でも現在、軽症事案増加の影響で、消防庁が救急車出動を有料化にする検討をしています。救急車を利用するために、お金が必要になるかもしれません。そのため、母子家庭、父子家庭、一人暮らしのお年寄りなどは救急車を呼びづらくなります。自分の生活、家族への負担を思い、迷いが生まれます。その迷いが、“救えたはずの命”の原因になってしまうのです。

姉を迅速かつ無料で運んでくれた救急車。救急車は病院までの道のりで、患者の容体を確認したり、調べることもできます。そして、病院へ着いた後の早期の検査、治療を可能にします。そのおかげで、救える命が増えるのです。そのためにも、全ての人が課せられた税金を納める努力と責任が大切だと思います。適切な利用への近道は、救急への理解、利用者への思いやりではないでしょうか。私達の税金をムダにしないためにも、きちんとした知識が重要になっています。

救急車は、協力と納税の証です。私は無料で気軽に救急車利用ができる社会が未来、その先も続いてほしいと、心から思います。

私の街では今日も、命を救う車が走っています。救いたい命を乗せて…。

幸せを届けてくれる税

札幌市立札幌中学校 1 年 渡邊 恵莉

来年の秋には消費税が 10 パーセントに引き上げられるという。「税金は本当に役立っているのだろうか。」そんな疑問から税金の使い道について調べてみると、一番多く使われているのが、社会保障であることがわかった。社会保障とは、私たちの健康や生活を守るために欠かせない公的サービスのことである。

健康な私にとって、なかなか実感できずにいたが、先日、母親のいとこが子どもを連れて家に遊びに来てくれた。もうすぐ二歳になる男の子だ。彼が生まれた時も病院へ会いに行った。彼は人工呼吸器を付けていて、ガラス越しでしか会うことができなかったが、小さくて、とても可愛かった。その後、しばらくして母から彼が障害を持っているということを聞かされた。「ダウン症候群」染色体異常から、顔つきに特徴があり、身体や、知能の発達が遅れたりする先天性の病気だそうだ。

障害があるとしても、私にとっては可愛くて、大切な人。これまでの成長をずっと見守ってきた。

その中で気がついたことがある。彼のお母さんが時々、口にする支援制度、福祉サービス、障害者医療助成などという言葉であった。「もしかしたら、この制度も社会保障の一部なのでは。」と思い深く調べてみると社会福祉費という分類に入り、障害者が社会生活を送る上で様々なハンディキャップを負っている人々が克服し、安心して社会生活を営める様、公的な支援を行う制度で、公費つまり税金で成り立っていることがわかった。

家に来ていた彼のお母さんが、「最近、児童ディサービスを利用できるようになり、助かっている。」と話していた。私は思いきって、どんなことが助かっているのかを聞いてみた。週に四日、午前中、障害児を預かってくれて、日常生活における基本動作の指導、集団への適応訓練を受けられるそうだ。彼も楽しそうに通っているらしい。お母さんにとっても、預けている間に他の用事を済ませることができると喜んでいて。そして何よりも助かることは、費用の面だそうだ。この様な福祉サービスもそうだが、医療費なども一部公費で補ってもらっているの、自己負担が減りとても感謝していると話してくれた。

障害のある子どもを育てる親たちの大変さが、納税によって、軽減できるのだ。

近い将来、自分たちが納めていく税金が、どのように使われているのかを知り、税金に対するイメージや気持ちが、私の中で大きく変わった。納税は国民の義務。そしてその税は形を変え、幸せを届けてくれる「税」となるのだ。彼には、これからもたくさんの人と接して、色んなことを学んでほしいと思う。そして、いつまでも笑顔で過ごしてほしい。

納税は自分の意志で

羽後町立羽後中学校 3 年 石山 日和

必要なものと分かっているはずなのに、税金に対して否定的な思いをもってしまう人が多いのはなぜでしょうか。

例えば義務教育間の教科書代などの教育費、例えばゴミ収集など、私たちの日々の日常生活と関わっている多くが、税金によって賄われています。このようなことを中学生の私でも知っているくらいですから、大人たちが税金によって生活が支えられているということを知らないはずがありません。それなのにどうして、誰もが積極的に税金を支払おうとしないのでしょうか。

この疑問について、私がたどり着いた答えが一つだけあります。それは、納税を

「税金をとられる」

と表現することです。とられるという言葉は、聞く人に、自分の意志ではなく、無理矢理に強引に支払わされるというような印象を与えます。私は、それがいけないのではないかと考えました。税金についてほとんど何も知らない人が、ただ漠然と

「税金はとられるものだ」

と聞かされたとしたら、税金に対して否定的なイメージを抱いてしまうのも無理はないと思います。

だから私は、この税金を取られるという表現をなくし、税金を預けるという表現を多くの人に広めていったらいいと思います。税金のない生活、それは、国民一人一人の金銭的負担が、今の生活の比ではないほど大きい、とても苦しい生活です。医療費、教育費等は全て自己負担、公共サービスなどもないから自分たちだけで何とかしなくてはなりません。そんな生活に耐えられる人はゼロに等しいと思います。だから税金を預けるのです。一人では無理でも、全国から預けられた税金でなら、現在のように公共サービスをみんなで利用することができます。預けた税金以上の価値を持つものが、公共サービスとして形を変えて返ってくるのですから、納税で損をするどころか、むしろ得をすると考えられるのです。

私も今までは、どちらかというと税金を払わされるというイメージを持っていました。しかし、この作文を書いて、いかに税金に支えられているかを知り、納めた税金が、より私たちに役立つものに形を変えて返ってきて、私たちを助けてくれているというふうに考えることができるようになりました。

税金に感謝して、人々が笑顔で、そして自分の意志で税金を払うようになるときは、日本中から、

「税金をとられる」

という表現がなくなったときだと思います。そのときが少しでも早く来るよう、もっと税について勉強して、税金の大切さを多くの人に伝えていきたいです。

感謝のサイクル

学校法人小林学園本庄東高等学校附属中学校 1 年 田母神 このか

私は今まで税金の種類をよく知りませんでした。しかしこの作文を書くことになり家族と一緒に税金についていろいろ調べました。税金は納める場所により国税と地方税に分けられることを知りました。私が地方税でお世話になっていたのが子ども医療費でした。私は体が弱く、赤ちゃんのころからずっとアトピーで毎日、薬を飲み体にはぬり薬をつけています。病院に行き子ども医療費受給証をみせると診察も薬も無料になります。それを今まではラッキーとぐらいにしか思っていなかったのですが、そのお金は本庄市の税金から出ていることを知りました。何年間もお世話になっていたんだと本当に感謝しています。

それから私にとって一番身近な消費税が5パーセントから8パーセントになった時は文房具を買う時などに高くなったと不満に思うこともありました。でもその税金の一番の使い道は社会保障で、それは私たちが安心して暮らしていくのに必要な公的サービスだと分かり、少しでも不満に思った自分が恥ずかしいと思いました。ノートやお菓子を買うことで私のような子どもでも誰かの役に立っているのかもしれないと思うと誇らしいような気持ちになりました。

そしてもうひとつ税金に感謝していることがあります。数ヶ月前、私は曾祖母を亡くしました。九十七年の最後の数ヶ月を曾祖母は介護施設で過ごしました。仕事が好きで若いときは助産院を開いていたと聞いています。その後はタクシーの会社を作り、八十代後半までその事務所で働いていた気丈な曾祖母。その曾祖母がだんだんと体の自由がきかなくなり祖父母の家で暮らすようになりました。はじめはディサービスでお風呂を一日おきに入れてもらって気持ち良いと話していました。転んで骨折してからはさらに不自由そうになり、固形の食べ物が食べづらくなり、とうとう介護施設の方でお世話になることになりました。私の家も祖父母の家も共働きでそれまで以上の介護は難しかったからです。たまに会いに行くとヘルパーさんと楽しそうにするお年寄りの中に曾祖母もいて、そんな姿を見ると私たち家族は本当に安心することができました。きめ細やかな介護をしてもらって曾祖母は幸せな最後だったと思います。仕事を頑張って色々な形で税金を納めてきて、最後はその恩恵も受けることが出来て曾祖母は安らかな顔で旅立てたんだと思います。

私は税金は感謝のサイクルだと思いました。私が働いてたくさん税金を納められるようになったら子どもの時に受けた恩を先輩や後輩、困っている人に使ってもらえるように税金をしっかりと納めたいです。そして年をとったら後輩からお礼を受け取ります。税金によって助け合って暮らしていけるのは素晴らしいことだと思います。

ただ義務だからではなく、今までの感謝をこめて税金を納める大人になりたいです。

新しい恩返しのカタチ

江戸川区立葛西第二中学校 3年 菊池 優香

「私ふるさと納税に興味あるんだ。」

あるとき、おばがこう言いました。これが、私とふるさと納税の出会いでした。「ふるさと」という言葉は聞いたことがあるけれど、「ふるさと納税」という言葉は聞いたことがありませんでした。きっと、聞いたことがない人がほとんどだと思います。意味はよく知らないけれど暖かみを感じるこの言葉に惹かれて調べてみると、それはとても画期的なシステムでした。

ふるさと納税とは簡単にいうと、自治体への寄附金のことです。しかし、寄附金とはいっても普通の寄附金ではありません。調べていくなかで魅力的だと思ったところが四つあったので、少し紹介していきたいと思います。一つ目は、「特産品がもらえる」ということです。納税した地域の特産品がもらえるそうです。納税をして地域に貢献できて、さらに特産品ももらえるなんて一石二鳥ですね。二つ目は、「生まれ故郷でなくてもできる」ということです。このおかげで、過疎化や高齢化が進む地域にも納税される可能性が充分にあり、良いと思いました。三つ目は、「税金がある一定の金額免除される」ということです。ふるさと納税と普通の税金かけもちするのはキツイ、そんなことを考える人も多いことでしょう。しかし、実際はこのような特徴があるので安心して納税できます。そして、四つ目は「使い道を指定できる」ということです。私はこれが一番魅力的だと思いました。例えば、「海をきれいに維持するお金に」と指定すれば、その通り海をきれいにするために使われ、「子供たちのために」と指定すれば、子供たちのために使われます。

ふるさと納税とは今までにあまり無かったもので、とても魅力的に感じたと思います。皆さんの中に、「税金なんて払いたくないのに」と思っている人もいるかもしれません。しかし、それは自分の払ったお金がどこで使われているか分からないから、実感がないから、ではないでしょうか。実感があればきっと「払いたくない」という人が減ると思います。「どうせなら、自分の払った税金は自分の希望するところで使ってほしい。」そう思う人はふるさと納税について調べてみるべきだと思います。

税金、と聞くとマイナスのイメージをもつ人が多いかもしれません。しかし、税金についてよく調べてみるとふるさと納税のような素晴らしく魅力的なものがたくさんでてくると思います。私たちの生活の中に、税金から成り立っているものはたくさんあります。税金が世界からなくなってしまうたら、今よりも不便な世界になってしまうかもしれません。税金は「縁の下の方持ち」のような存在なのです。私が大人になったとき、高齢化が進み増税していたとしてもしっかりと払っていききたいです。そして、ふるさと納税もしてふるさとに恩返しをしていききたいです。

「当たり前」に支えられて

小浜市立小浜第二中学校 3 年 村松 さつき

昨年九月十六日、私は耳を塞ぐような音で目が覚めた。バケツをひっくり返したような大雨に、家ごと吹き飛ばすような強い風。初めての経験に、私はとても興奮していた。

台風十八号だった。

台風は、そんな私に更なる衝撃を与えた。通学路として利用していた橋が川の氾濫により流されたのだ。それだけでなく、被害が甚だしい所は床上浸水、土砂くずれ、家屋の倒壊等、台風は私達の街に大きな爪痕を残していった。初めは浮かれていた私も、剥き出しになった橋のコンクリートや鉄骨を見る度に怖くなった。川沿いの道は砂に埋もれて草木は流され、河原から色が無くなった気がした。橋には立ち入り禁止のコーンが置かれて、私はいつも遠回りをして通学した。冬になってもそれが続いた。もう二度と、あの橋を渡って学校へ行くことはないかもしれない。そう思った。

しかしそれは、私の杞憂に終わった。春になり、橋の再建工事が始まったのだ。毎日少しずつ変わっていく橋を見て、私はうれしかった。その時の私にとって、壊れている物を直すのは当たり前で、その「当たり前」がどれだけすごいことなのか、考えもしなかった。

その考えを根底からくつがえすきっかけとなったのが、租税教室だった。税金は、社会を支えるもの、国を豊かにするもので、生活する上で欠かせない制度だという認識はあった。しかし、私達の学費や公務員の賃金が税金で賄われていたり、病気や負傷した際の診察費までも税金が充てられているのには驚いた。一体、税金でどれだけの人が支えられ、助けられてきたのか。きっと私の想像を遥かに越えるだろう。そしてあの橋も、税金によって再建工事が為されているのだ。そう気付いた時、私も、税金によって支えられ、助けられているのだと、改めて実感した。あの橋は、まだ未完成ではあるが、工事は着実に進んでいる。それを見て私の税金に対する想いも、大きくなっていく。税金という制度、それが「当たり前」ではないということを租税教室で学ぶことができた。

これまで、税金といえば「納めなければならない」重荷というイメージが強かった。現に、消費税増税に対する不満を聞いたことがある。しかし、それは違うのではないかと私は思う。税金が生活を苦しくさせるのではない。税金は生活を豊かにし、税金が無い方が苦しむのだ。

私達は、税金でたくさんの恩恵を享受していることを忘れてはいけない。そして私も、税への感謝を忘れず、想いを込めて納税したい。私が支えられ、助けられた分、社会に貢献できる大人になれるよう努力していこうと思う。

「祖父の笑顔のために」

名古屋市立名塚中学校 3 年 池田 佳乃

私には、七十代の祖父がいます。祖父は、年金で生活し、離れて暮らしています。祖父は数年前から持病を抱えているため、定期的な検査や毎日の薬の服用が欠かせません。そんな祖父が先日、「病気はしたが、歳をとって医療費負担が減って有難い。」と喜んでいました。私は祖父の話の内容が分からず、両親に聞いたり調べたりしました。その結果、高齢者や病気にかかった人が安心して生活できるための社会保障制度というものがあると知りました。そしてまた、高齢化の時代に合わせた介護制度もあり、祖父のような高齢者の医療費が、一般の人々と異なるシステムであることも理解できました。今後の祖父の病気や、介護が必要になった時のことを考えると、このような制度は、当事者の祖父だけでなく、離れて暮らす私達家族も安心できて有難く、素晴らしいものだと感じました。

しかし、問題もありました。それは、社会保障制度が保険料や税金で成り立っていて、高齢化によって給付額が増加する反面、少子化で納める側の人口が減っていることです。現実には、父たち負担者の一人当たりの負担が大きいことが問題視されています。しかし、今世紀の半ばには、日本の人口の約四割が高齢者となり、少子化が進んで、私達が社会を支える頃のことを思えば、父たちの事態を『対岸の火事』とは言っていられません。

私は今まで、税金について真剣に考えたことがありませんでした。しかし、通っている公立学校の授業料や医療費が無償であることなど、私自身、少なからず税金の恩恵を受けていることに気づきました。そして、今では、社会保障制度だけでなく、生活のあらゆる面で人は税金によって守られていると思うようになりました。そう考えると、様々なものに課せられている税金は、人が人らしく生きる『共助』のための資金だと思え、納める義務感だけでなく、感謝の気持ちもわいてくるように思えます。

社会保障制度を保ち、充実させるには、今後も少子高齢化は大きな課題になると思います。それでも、日本の高度経済成長を支え、豊かな今の生活をもたらしてくれたのは祖父たちの世代です。だからこそ、高齢者となった祖父たちには、安心して、より楽しめる日々を過ごしてほしいです。私もこれから、税金や社会のしくみについて、より知識や理解を深め、それらの意義を正しく認識できるようになりたいです。そして、『共助』を全うするためにも、人としての義務や責任を果たせる大人になりたいと思います。それは、こうした一歩やその積み重ねが、祖父たちへの恩返しにつながると思うからです。そしてあとは、祖父の安心が続き、祖父の笑顔を一日も長く見られることを願い、祈るばかりです。

税

新見市立哲西中学校 2 年 藤野 倫覇

僕が身近に感じる税は、やはり一番に消費税が 8 パーセントになったことです。

今年に入り、5 パーセントから 8 パーセント上がった事で、親はもちろんのこと僕にとっても消費者としては、お財布の中が非常にきびしいです。

僕の今の小づかいは、正月にもらうお年玉と、たまに知り合いからもらえる小づかいが今の僕の小づかいです。だからその小づかいの中で欲しい物を買おうとすると、たとえば千円の物を買えば 80 円という税を余分に払わないといけなくなる。

それは、僕にとっても僕の財布の中身にとってもきびしい状況ようをまねいている。

でも、この消費税の引き上げで日本という国がうるおうことになるのは、なぜなんだろう。

物を買って消費税がついてくことに、支払いをする僕の財布は悲めいを上げるのになあと、とても不思議に思う。

ということで、僕は学校で税の勉強をまともに聞いていなかった事もじじつであるので

この作文を通して、インターネットを使って再び調べる事にした。

インターネットで、税に関してとけんさくすると、むずかしいことばかりが、ズラズラと出てきて、これまた僕の頭の中が悲めいをあげる。

あの時ちゃんと授業を聞いておけばよかったと深く反省をする。

でも、こう考えてみると、税に関して僕はそのくらいの程度でしか関心がない、知識があまり無いのも事実だ。

日本は、なぜこんなにお金が足りないのでしょうか。 お金が足りないから税を増やせばいいという考えは、僕はなぞでした。調べていくなかで、少しずつ税金が上がってきている今、少しずつではあるが僕たちの生活は豊かになりつつあり、僕達の祖父母が受け取る年金にも、税金が増える事で財源がうるおう事になるのかなあと思いました。

この作文を書いて思った事があります。

消費税は、たしかに僕達にとって一番身近に感じる税の一つですが、まだまだ増税する事で負担が大きいと感じる人はたくさんいます。それは税に関しての知識が、僕もふくめすごく薄いものだからです。

よりよい社会が築けるよう、なぜ税が必要なのか、何に対して使われるのかを明確に知る必要があると感じました。

そして、その増税によりどのように国が豊かになっていくのか、納税義務の大切さを知る必要があるのです。

これからは、税を負担と考えず、僕達の未来の投資だと思うように考えを変えていくことだと思います。まだまだ難しい事ではありますが、考え方を変えることで税は、僕達の生活を助けてくれる大きな味方だと僕は思います。

未来の私にできること

八幡浜市立松柏中学校 1 年 中島 葉月

中学生になって、関心を持ってニュースを見るようになると、税に関する報道が目につきます。税金が目的とは違う使われ方をされたことを指摘するニュース。脱税や申告もれが見つかったというニュース。

今年の四月から消費税が五％から八％へと増税されたこともあり、税金が正しく使われているか、正しく徴収されているか、ということへの関心が高まってきているのだと思います。私はまだ中学生なので、それらのニュースに関する難しい内容は分からないのですが、税金のニュースに触れるうちに、増税によって余分に払うようになった消費税は、どのようなことに使われるのだろう、という疑問を持つようになりました。

そのことについて、早速調べてみました。すると、増税によって集められたお金は、社会保障費や福祉の支援、公共サービスなど、私たちが安心・安全に暮らしていくためや、苦しんでいる人に寄り添い、その生活を守るために使われているそうです。

私には妹がいます。妹は体が弱く、小さい頃によく入院をしていました。病名は、「突発性発疹」というもので、幼い頃によく発症する病気だそうです。私もこの病気にかかったのですが、症状が軽く、入院せずに治りました。しかし、妹は症状が重く、入院せざるを得なくなってしまったのです。四十度の高熱が続き、少しでも早く回復するように、お父さんとお母さんが交代で看病をしていました。その時、病院では先生や看護師の方々が一生懸命に妹を治療してくださいました。いろんな人に支えていただいたおかげで、妹は元気になることができました。

妹が入院した病院の施設や職員の人件費にも、税金が使われているそうです。妹は両親や先生、看護師の皆さんだけでなく、税金にも支えられて回復することができたのです。税金のことを詳しく知らなかった今までは、増税という話を聞くと、消費者や納税者への負担が大きくなるだけだと思っていましたが、今回調べてみることで、税金の大切さを実感することができました。税金は、みんなが安心・安全に生活するために必要なものだったのです。

私たちは、成人するまでの間、両親をはじめ、たくさんの人たちが一生懸命働いて支払った税金という土台に支えられ、守られて、生活していくことができます。そのことに、心から感謝したいと思います。そして、次は私たちが社会を支える土台をつくる番です。私は大人になったら、人のために役立つ仕事に就くとともに、納税という形でしっかりと社会を支えられる人になります。これが未来の私にできることだと思います。みんなで支え合うという強い意志を持ち、きちんと納税すれば、日本は必ずよりよい国になると思います。

税を知り、父を知る

福岡市立松崎中学校 3 年 大江 里実

「世の中には富める人もいれば、貧しい人もいる。要するに、税金を富める人から集め、貧しく弱い立場の人に使う。そういう富の再配分という側面が成り立って、支えあっているから、たくさんの人達が住むこの日本は成り立っているんだ。」そう父は私の目を見て話す。

父は毎日忙しく、帰るのが遅い。だから、帰る時にはもう私は寝ているため、話す機会は少ない。夏休みの課題で、“税についての作文”が出たため、何も知らない私はもう父に聞くしかないと思っていた。父は税理士として働いていた。税についての知識のない私は、父の税理士の仕事などもっと知らない。税について教えてもらった後、父の仕事のことも聞いてみたい。そう思っていたが、まずあの頑固な父が私の課題に協力してくれるのだろうかや、そんなタイミングはあるかなど、次々と不安になっていった。そんな中、思い切ってその事を父に話すと意外と快く引き受けてくれた。逆に楽しみにしているようで、次の日の朝には父の方から「始めるぞ。」と言って協力をしてくれた。

そして、話が終わり私は全てじゃないが、税とはどういうものなのかを理解する事ができた。なにも税について知識のない頃は、「消費税上がるの嫌だな。」とか思っていた。だけど、日本の国民の人たちが払い、集められた税金の使い道を国の政治家が話し合い、毎日通う学校や授業で使う教科書、病院や市役所や警察署も必要な身近なことほとんどが、税金によって成り立っていたことを知った。そのとき、日本中のたくさんの人達が本当は支え合い、つながっている気がして、不思議な気持ちになった。税には車税だったり色々な種類があり、その中にも消費税があったんだと気付かされた。暮らす上での施設や整備された道路や橋も、みんなに必要なものをみんなで作っている。協力して大きな力となっている。税の力はすごいなと感じた。さまざまな人が税に関わる仕事に就いている中で、父の税理士という仕事は納税者の申告課税を補助する専門という役割だと教えてもらった。あまりいつも話さない父だが、話してくれている時、私の目をまっすぐ見て、私に伝わりやすいように言葉を選びながら話す父が忘れられない。父の仕事に対する熱意と、税理士という仕事が好きなんだということが伝わった。「税って難しいな。」改めて思ったようにそう笑って言う。税についても知り、父のことをまたひとつ知ることができて良かった。

「税って難しいけど、知る事で大きく自分の視野が広がるな。税を知る事は大事だな。」そう強く思った。私は将来の夢は、父のような税に関わる仕事に就きたいなと今回思うようになった。そんな仕事に就いて、これから日本の未来と一緒に協力して支え合って、より明るく平和なものに築いていけるよう、頑張りたい。

税金は必要？

鹿屋市立串良中学校 1 年 向井 優梨香

税金はなぜ必要なのだろうか。税金といっても、種類は一つではない。誰もが払っている、商品を買うときに含まれる「消費税」をはじめ、土地を所有していると発生する「固定資産税」、車を所有している場合に払う「自動車税」などがある。これらは税金の種類の一部で、数え切れないほど税金は存在する。このことから、私たちが税金をこんなに支払わないといけないのはなぜなのだろうと思った。一体、税金とは何のためにあるのだろうか。

私の疑問を解決してくれたのは学校で行われた「租税教室」だった。「税金のない世界について」というテーマのDVDを見ることになっていたので、私は見る前に考えていた。「税金の無い世界とは、どんな世界なんだろう。税金が無いから楽な世界なのだろうか。」そして、DVDが始まった。始めは私たちと同じ、税金のある暮らしの紹介だった。次に税金の無い暮らしになったとたん、私の想像を絶する光景が表れた。それは、きれいに整備されていた道路がひび割れ、使えなくなっているというものだった。さらに事故や事件、火災が起きて通報しても、警察や消防は出動しなかったのだ。現実世界とは全く違うものだった。当たり前だったことが、消えていた世界に私は少しおびえてしまったぐらい、びっくりしてしまった。このことがきっかけで、私は初めて税金の必要性を知ったのだった。公共施設や警察、消防など公共で使われるもののほとんどが税金でまかなわれていて、もし税金が無くなると、運営がストップして、様々な所に支障が生じるというわけだったのだ。だから、税金は大切なものなのだということがよく分かった。そして、税金の種類が多さにも意味があるということも分かった。様々な所で税金を集めて、いろんなところで利用しようとしているのだった。

税金の大切さは分かったけれども、やはり負担は相当大きい。そこで一つ考えてみたいと思う。みんなが平等に払っている税金もあるということだ。それは「消費税」のことである。人生の中で買い物というのは必要不可欠である。買い物をすると今は必ず八パーセントずつ消費税が含まれる。これは誰もが平等に払う税金だろう。子どもから大人まで平等だと思うと少しでも気持ちは変わらと思う。このように全国民が協力しているおかげで、日本は安心で安全な国になっていると思うととても素晴らしい。確かに、税金の負担はとても大きい。だが、この税金で日本中が良くなっていくと考えれば、税金は必要だと私は思う。これから私は、消費税だけでなく、たくさんの税と関わるだろう。大変だと思わないで、これからの私たちと日本のために必要なことであると考えて税金と向き合い生きていきたいと思う。

「たばこのあり方」

うるま市立あげな中学校 3 年 宮良 祐梨奈

私の親戚のおじさんは、会うたびに、たばこを吸っています。

そんなおじさんを見てきた私は、たばこは吸っても体に悪影響しか与えないし、良い事なんて何もないだろうと思っていました。

しかし、たばこについて調べてみると、たばこは国の税金にとっても役立っているということを知りました。体には悪い「たばこ」ですが、そのたばこを買う消費者のおかげで、国に役立ち、私達はこうして生活しているのだと知った途端、とても不思議な気持ちになりました。

また、親戚のおじさんは最近こんな事を言っていました。

「最近、たばこが値上げして大変だな。」

と、母に言っているのを耳にしました。

その時私は、どうしてたばこは値上げしたりするのだろうと思い、おじさんに聞いてみました。

たばこが年々値上げしている理由は、二つあります。一つは、確かにたばこの利益は、2兆円にもなり国の大きな収入源となっているそうですが、そのたばこを買って病気になっている消費者が多くいるそうです。そしてそのたばこが原因とされている医療費は、3兆円を超えていて、税収よりも負担額の方が上回っているということです。二つめは、たばこ税を上げる事によって、未成年の喫煙抑制にもつながるということが実際に判明されているからです。

「日本でのたばこの値上げは高すぎる！」

という消費者もいるようですが、実際他の外国ではたばこ税が日本よりも高い国がいくつかあるそうです。

例えば、カナダでは次のような成功例があります。たばこ税を10年間で8倍にも上げ、それと同時に、未成年の喫煙者が40%だったのが、16%にダウンしたり、一人当たりのたばこ消費量も37%も減少しているそうです。

そのような対策で、健康にもつながり、非喫煙者にとっても、喫煙をしようと考えている人にとっても良い方向に変えていくことができるんだと感動しました。それと同事に、たばこの会社はたばこ税を上げるにつれて大変になるのだろうか複雑な気持ちにもなりました。

しかし、身近にたばこを買う消費者を見ると、体が悪くなっていくのが目に見えてとても苦しいです。

税を上げたりするだけで、その人の命が長くなり、税のことに無関心な人が増えれば増える程、その国はだめになるばかりなんだと思います。また、税があるからこそ、今を生きることができる、私達は、税がなければ笑って過ごすことはできないと思います。

中学生である今の時期だからこそ、もっと税に興味をもち、将来、社会に貢献していける大人になりたいです。

進化を遂げる納税

恵庭市立恵明中学校 3 年 得地 咲良

近年、テレビでよく取り上げられている「ふるさと納税」だが、様々な地方の特産品がもらえ、現在納めている税金が安くなる。という簡単な印象しかなかったもので、自分なりに詳しく調べてみた。

「ふるさと納税」とは、自治体への寄附金の事で、個人が二千元を超える寄附を行った時に、住民税のおよそ一割程度が所得税と住民税から控除される制度である。個人によるが四万円納税（寄附）をして三万八千円の税金が控除される事もある。二千元損するのでは？と思うが、「ふるさと納税」をすると特産品や特典をもらえる自治体が多数ある。もらう物によっては二千元以上の物もあるので決して損をする制度ではないと思う。

さらに、自分の生まれ故郷でなくても良く納税も自分で細かく指定する事ができる。例えば『A町の震災復興に向けた〇〇の建築』や同じ市町村だったとしても『B市の歴史を継承するための図書館建築』『B市の子育て環境を整えるための基金』など様々な使い道がある。

現在、私たちの両親や周りの大人が払ってくれている税金だが、大切な自分のお金から差し引かれる税金が何に使われているか分かっている人は少ないのではないかな。もちろん住民票のある地域に納められ、その地域がより良くなるために使われているのだと思う。

自分の地域が向上する事もとても大切な事だが、自分の納めた税金がどの様に使われ、どの様な人たちのために使われるのかが明確に分かる事は素晴らしいし、誇らしい事だと思う。見知らぬ土地の人たちだったとしても納税することによって、地域間格差や過疎などによる税収の減少に悩む様々な地方をすくう事に一役買えるなら、こんなに嬉しい事はないだろう。中には特産品や記念品をもらえるからと納税する人もいるだろう。納税イコール寄附である以上は本来の目的ではないが様々な地方の特産品を知り、他の人に紹介したり次は自分で買う。その地方に旅行へ行ってみる。という事になればとても良いことではないかな。企業も納税可能なので、会社をPRでき自治体も高額の納税を受け取る事ができる。

たった六年前の二〇〇八年に創設された制度が、こんなにもメディアに認知され、国民に浸透したのは、日本人の助け合いの精神や思いやりの気持ちに寄りそった納税制度だからではないかな。私も五年後、二十歳になった時にどこの自治体に納税しようか、今から楽しみに探してみようと思う。

税は自身のためのもの

岩手県立一関第一高等学校附属中学校 2 年 平野 麻鈴

私の祖父母は、鮮魚商を営んでいる。小さな商店で、儲けも少ないが、その魚はとてつもなく美味しい。まさに、ほっぺたが落ちそうになる美味しさ。三十年かけて得た祖父の魚を見る目は、本当にすごいのだ。そして、それを売る祖母の売り方と笑顔もすごい。お客さん曰く、ついつい買いすぎてしまうのだそうだ。

しかし、祖父は今年七十五歳、祖母は七十三歳、そろそろ店を続けるのにも限界がある。昨年のお盆で忙しい時期、徹夜で働いていた祖父が倒れ、救急車を呼ぶ事態となったことがあった。体のことを考え、もうあと数年で店を閉めることにするのだという。もうお店のお魚を食べれなくなるのは悲しいが、仕方ないと思う。そして、こうなると祖父母は、主に年金で暮らしていくことになる。しかし、今年の四月、消費税が五パーセントから八パーセントに上がった。さらに、二〇一五年には十パーセントになるらしい。頑張ってきた祖父母には、後はゆっくり旅行に行ったり、好きなものを食べたりしてほしいので、少し残念に思った。それに、私も正直嫌だった。このことを母に話すと、母は私にこう言った。

「その増税して集めた分のお金、何に使われてるか知ってるの？」
そこで私は、この消費税の増税について、少し詳しく調べてみた。

まず、母に言われた、消費税増税分のお金の使い道について調べた。すると、使われる金額が一番大きいのは「社会保障費」というものらしい。では、社会保障費とはなんなのだろうか？これは、医療や年金、老人福祉を中心としたサービスに使うお金なんだそうだ。そう、まさに、私の祖父母のような人達のための費用なのだ。

次に、なぜ増税する必要があったのかということ調べた。その理由は、高齢化が進み年金を受け取ったり介護を受けたりする人が増え、社会保障にかかる費用がとて増えたから。特定の者に負担が集中せず、高齢者を含めて国民全体で広く負担する消費税が、高齢化社会における社会保障の財源にふさわしいと考えられたのだ。

私は、これらのことを知り、増税は年金や介護に頼り生活してる人の暮らしを安定させ、さらに若者へ負担をかけないための、とても大切な政策だったことが分かった。増税した頃、日本国民のおよそ四十八パーセントが、それに反対したという。税金は私達を苦しめるものではなく、むしろ私達のためのものであることをよく知っておくことが、私は大切だと思った。これからは、祖父母のため、私自身のための税に感謝し、税を納めていきたいと思う。

大切な命を救うもの

境町立境第二中学校 3 年 関 日奈美

千人に一人から二人。日本では千人の赤ん坊の内、一人から二人程度の子が亡くなるのだそうです。しかし、世界的に見るとこの数はとても少ないものなのだということを、私はつい最近まで知りませんでした。その少なさを実現させているのが税金であることも知らなかったのです。

日本での赤ん坊の死亡率の低さに税金が関わっていると知ったのは、学校で助産師さんのお話を聞いていたときのことでした。助産師さんは言いました。「日本に産まれてくる赤ちゃんたちは、千人に一人から二人程度しか亡くなりません。医療技術が発達したことと、国から妊婦さんの検診に助成金が出るようになって、今まで検診を受けられなかった人たちが検診を受けることができるようになったことにより、救われる命が増えました。助成金は税金で賄われています。」

驚きでした。まさか日本の医療がこんな所まで税金で支えられているなんて、夢にも思っていなかったし、こんなにも身近な所で税金が使われているということを実感したのも初めてでした。

子どもに対する税金の使われ方に、興味を持った私は調べてみました。

私の住んでいる境町の病気に対するワクチンの中にいくつか無料で受けられるものがあります。日本脳ワクチン、麻しん風しん混合ワクチン、ジフテリア・破傷風の二種混合ワクチンなどが町で受けることができるようです。いずれの病気も、かかってしまうととても危険なものです。この危険な病気たちを防ぐワクチンが税金で賄われているそうです。

このワクチンのおかげで助かっている子供は多いにちがいありません。日本の子どもの死亡率が低いのには、このように恵まれた環境にあるからなのでしょう。

調べれば次から次へと出てくる税金の使い道。そのいずれも、私たちの生活に必要なことばかりで驚くと同時に、もし税金が無かったらと考えたらゾッとしました。税金が無ければ人はバタバタと死んでいき、平和な日本は存在しないでしょう。

今まで私は税金なんて知らないしじゃまな物だと思っていました。様々なものについてまわり、物などの値段を上げてしまう、じゃま者。しかし、この作文を通して税について調べ、考えることによって、その大切さを身にしみて理解することができました。

私たちが税金を払うことによって救うことのできる命がある。そう知った今では、税金がじゃま者だとは思いません。むしろ、払うべき大切な日本の財産なのだと思うようになりました。

今の私が納める税金は少ないけれど、大人になったらしっかりと納め、日本というこのすばらしい国が平和で安全でいられるように努めていきたいと思います。

「ふるさと納税」でみんな笑顔に

横浜市立舞岡中学校 3 年 加藤 宗一郎

みなさんは、「ふるさと納税」について知っていますか。私が興味を持った理由は、テレビなどでよく取り上げられているからです。「ふるさと納税」の話題でよく耳にするのは、地方へお金を寄付すると、その地方の特産物がお得に手に入るという事です。始め、私はなぜ、お得になるのかが分かりませんでした。が、調べていくうちに、この「ふるさと納税」が素晴らしい仕組みだと感じました。

日本が抱えている問題の一つに過疎があります。この地域では、高齢者が多く若者が少ない状況です。また、人口も少ないためその地域に集まる税金は、私達が住む横浜や都会と比べ、はるかに少なくなっています。そのため、公共施設などを整えるための費用が足りていない状況です。私達にあまり馴染みはないと思いますが、税金が少ないと、その地域の道路や水道管なども整備されなくなってしまう。このままでは、ますます過疎の地域が不便となり、人口が減っていつてしまうなど感じました。そんな時に、制度化されたのが「ふるさと納税」でした。

このふるさと納税を行うのは、都会の人々が多らしく、その都会では、それほど税金が足りなくて困っている事はありません。そんな都会の人々が、本来、地元にも納めるはずの税金を地方へ寄付する事で、過疎の地域で公共施設が整っていきます。

また、寄付のお礼として送られてくる特産物を生産している人々にとっても、メリットがあると思います。売り上げが伸び、地域の経済が良くなるだけでなく、高齢者にとって特産物を作る事が生きがいになるかもしれません。

私の家では、島根県に寄付をする事にしました。島根県は過疎地域が全国の中でも特に多いからです。この寄付で少しでも地域が良くなって欲しいなという願いを込め、産業の振興にこのお金を使って欲しいと申し込みをしました。税金の使い道を選べるという点は他に方法はなく、このふるさと納税の素晴らしい特徴だと思います。お礼のシジミはおいしく頂きました。他にも特典があります。広報紙が毎月送られてきました。地元のニュースを届けてもらい、その地域を知る事ができて嬉しいです。

私は、この制度によって日本がより良い暮らしをつくる手助けになると考えます。そうする事で、高齢者が安心して毎日を過ごせることでしょう。また、過疎問題が解決する日が来るかもしれません。

この制度の寄付という形で、地方の困っている人達の暮らしを支えませんか。みなさんのその寄付が、日本全体を豊かにしていきます。

ぜひ一度「ふるさと納税」をしてみてもどうでしょうか。

「税金についてよく知る」

敦賀市立栗野中学校 2 年 釜谷 理永

私が税金について知ったのは、とても幼い頃のことでした。私は小さい頃から本が大好きで両親によく市内や県内にある図書館に連れて行ってもらっていました。私はその場所を遊園地や動物園などと同じ感覚で使っていたので、幼いながらも気になったことがありました。それは「図書館はお金がかからないの？」ということです。それを父に尋ねると父は「税金」についてほんの少しだけ教えてくれました。

このことがきっかけで私は税金について興味を持ち、調べようと思いました。

図書館の他にも公園や公民館などの公共施設、警察署、消防署、学校。更にはお年寄りや心・身体に障害のある人を助けるため、ということにも税金は使われていました。聞いた事があるものもたくさんありましたが、書きだしてみるととても多かったので、改めて税金の必要性を実感しました。

私が税金について調べている中で、一番驚いたことがあります。それは、日本は税金を日本だけでなく、世界の貧しくて食料不足などになっている国の人々のためにも使っているということです。苦しみ困っている人達を助けるため、お金を貸してあげる他にもダムや病院を造ったり病院で使う薬や注射器を送ったりしてあげています。私はこのことを知った時、なんだか心が温くなりました。

そこでひとつ思ったことがあります。

それは税金についてよく知ることが、これから皆さんが税金とうまく、そして気持ちよく付き合っていくために大切なことなのではないかということです。税金があるとお菓子や文房具などを買う時、税金の分だけ少し値段が高くなってしまいます。しかし、私はそれが私達の暮らしに役立ったり貧しい国の人々を救うことになったりしていると知りました。だから、税金について知る前よりずっと気持ちよく税金の分のお金をはらうことができます。そして、前よりももっと感謝して大切に公共施設などを使うことができると思います。私達が今、安心して暮らせているのは警察署や消防署の人が安全を守ってくれているからです。病院があって、そんなに高くない金額で手当てをしてくれるからです。他にもいろいろな人達が働いてくれているからです。でも、税金がなかったら警察や消防、他の多くの人達も活動できません。病院も治療代が高くてなかなか行けなくなってしまう。私達の生活は税によって守られているのです。

税金は迷惑なものかもしれません。しかし、みんなが笑顔で暮らしていくためには必要なものだと思います。

大切な税、未来につなぐためにできること

東海市立名和中学校 3 年 酒井 愛実

私は、中学二年間の夏休みに「税に関する作文」を書き、税のしくみや大切さについて真剣に学び考えることができました。

私たち日本人の暮らしは、税によって成り立っていると言っても過言ではありません。だから、私は消費税が上がったとき、きちんと使ってもらえるのなら、自分が買い物をしたときの税金も役に立つのだと思い、まったくいやな気持ちにはなりません。しかし、テレビの中の大人たちは、消費税増税に異議を唱える人が多くいたので、なぜだろうと思いながらその人たちの意見を聞いてみると、そのほとんどは税金の無駄遣いについてふれていました。

今年、私の祖父が定年退職しました。祖父は仕事一筋の人で、仕事以外の友達は少ない感じがしていたので、そんな祖父を私は少し心配していました。しかし先日祖父の家に遊びに行き驚きました。私の心配をよそに、生き生きと生活していたからです。祖父は市で募集されるいろいろな習い事をしていました。とくにテニススクールは低価格で誰でも習うことができ、また平日限定なので若いお母さんたちや、シニア世代が集まり、とても幅広い交流ができているそうです。そしてそこで、自分たちのサークルを作るように催し側で勧められ、今はその人たちとテニスに出かけたりして、いろいろな会話を楽しんでいると話してくれました。その他の日は、夫婦で図書館に行ったり、市の施設にある百円ジムに通ったり、すごく充実しているようでした。それはすべて税によって成り立っています。

教育、警察、消防、ごみ収集にいたるまで、税のしくみは私たちの生活の基盤になっていることを前に学びましたが、この世代を超えた交流や心の満足まで与えてくれる税の使い方は本当に素晴らしいと感心しました。老人が増加している日本の社会において、このような素晴らしい税の使い方を続けさせるためには、絶対に税のしくみを壊してはいけません。

テレビで増税に異議を唱えていた人たちもみんな、税のしくみはなくてはならないものだとは分かっているはずです。少子高齢化のため年金や医療費などの社会保障費が足りないというのも理解しているはずです。それでも、そのような不満がでてくるということは、税を使う側にも問題があるのかもしれません。この先も少子高齢が進むとすれば、よりいっそう多くの税収が必要となります。だからこそ、税の無駄遣いは絶対許されません。少しのことでも信頼関係が崩れるからです。

そして税を納める側も、その納めた税金がどのように使われているのか、少しでも関心を持つことができれば、自分の生活がどれだけ税によって支えられているかを気づくことができます。同時に納税する必要性も感じるはずです。そんな双方の信頼関係こそが、この心まで満たすことのできる税のしくみを未来にまでつなげていけるのだと思います。

あの日の体験

四條畷市立四條畷西中学校 3 年 岡村 祐輔

「ペタペタペタ」と音がした。何の音かと外を見ると、それはごみだらけの荒れた道を裸足で走る子ども達の足音だった。横には、水が見えないほどごみで埋め尽くされた川。傾き今にも崩れそうな家。

これは、昨年フィリピンで働く父に会いに行った時に見た光景だ。そして父は僕にこう言った。

「これはフィリピンの一般的な暮らしで、こうやって生活している人はたくさんいる。」

僕は雷に打たれた様な衝撃を受け、言葉を失った。世界には、このような生活をしている人がいるということを、ニュース等で少しは知っていたが、実際に目の当たりにすると、何とも言えない悲しさがこみ上げて来た。

そして考えてみた、自分達の暮らしを。整備されて綺麗な道路、ごみは決まった日に回収され、夜になれば街灯が付き、緊急時には消防車や救急車が駆けつけてくれる。時期が来れば学校へ行き、多くの知識を得て、夢を追うことができる。なんて幸せなんだろう。そこで気が付いた。僕達の暮らしと安全、そして夢までも税金により支えられているということを。

これまでは、税金は少なければ少ない程人々の暮らしは楽になると思っていた。しかしよく考えてみると、税金を納めるということは、国の持つお金が増える。つまり、結果的には人々の暮らしを豊かにするのだ。

さらに、税金は日本の国民の暮らしを支えるだけでなく、海外の助けを必要としている人をも助けることができる。以前フィリピンで、台風により多数の人々が膨大な被害を受けた。中には家を失った人、家族や友人を亡くした人なども大勢いた。その時も、日本の自衛隊が駆けつけ、救助や援助活動を行った。それにより、どれだけ多くの人々が助けられたことだろう。

僕には海外で働くという夢がある。そして、あの日見た様な子ども達に直接的ではなくても、役に立てる様な仕事に就きたいと思っている。そのために今、夢に近づく第一歩として、英語を一生懸命勉強している。

これからも、僕を応援してくれる人と、支えてくれる税金に感謝し、夢に向かって努力していくつもりだ。そして、大人になったら責任を持ち、明るい未来をつくるために税金を納めていきたい。また、税金を納めることの大切さを、後世にも伝えていこうと思う。

職場体験

山陽小野田市立厚狭中学校 3 年 廣中 里衣

私が中学校二年生の十一月十二日。白い息を吐きながら、自転車で税務署へと向かいました。私はこの税務署の前に立って、「白くて綺麗な建物だ。」という第一印象を受けました。そして、ここから二日間の厚狭税務署での職場体験が始まりました。

体験初日、自己紹介とあいさつの後、さっそく税について簡単な知識を教わりました。「税の種類で知っているものはありますか。」初めにそう税務署の方から質問された時、その頃、ニュースでよく出る「消費税・増税」という言葉と、祖父がお酒が好きで、たまたま知っていた「酒税」の二つしか浮かびませんでした。しかし、前者は友達が先に答えたので、私は後者を答えました。その時に税務署の方は「よく知っていますね。」と苦笑してました。今、思い返してみると、中学生の口から出た言葉としては、「酒」は不つり合いだったのかもと恥ずかしくなりました。

また、学校でも挨拶の重要性は言われてきていて、私もその大切さは分かっていましたが、税務署の方は、姿勢から全く違うものでした。また、相談に対しても丁寧かつ的確な受け答えで、とても格好良かったです。職場体験を終えて、詳しい仕事内容については、今の私ではよく分からなかったこともありましたが、この接遇についてはとても印象に残りました。そして、これだけきちんとされているということは、それだけ「税金」を扱う仕事が大切なものであり、人から信頼されるべきものであるということなのではないかと思いました。

家に帰ってからも、質問された税の種類が気になったことと、税とは結局何なのかということが気になったので、このときいただいた資料を家に帰ってからめくってみました。

一口に税といっても実にたくさんの種類があり、また、私たちが「消費税」とひとまとめに言っているものも国に納められているものと地域に納められているものに分かれていることなどを知って、税に対する見方が大きく変わりました。

集められた税が使われているのは、本当に私たちの身近なものでした。今の私に一番身近なのは学校です。この職場体験も生徒という立場だったことと税金のおかげで得られた貴重なものだとは強く実感しました。

税金が、みんなのために使うために集められたものであるからこそ、その取り扱いには注意が必要なのだと感じました。例えば最近W杯のあったブラジルです。W杯への事業費にたくさん使ったため、生活の貧しい国民は苦しくなりました。

七年後、日本でオリンピックが開催されます。それに向けて消費税が上がっていく中で、税金を正しく使って欲しいです。私もこの社会で税に関わっていくんだと思いました。

この体験は税と社会生活を深く考える第一歩となりました。ありがとうございました。

台風被害に遭って

那賀町立驚敷中学校 2 年 新居 杏菜

八月十日、台風十一号が徳島県内を縦断しました。私の住んでいる那賀町では、今までにないような那賀川の水量のために、約三百棟が浸水するという、大災害に襲われました。今でもあの日の恐ろしさは、忘れることができません。私の友達の家も、床上浸水や床下浸水の被害に遭いました。二階から、救助のボートで脱出したという話も聞き、本当に大変だったんだと心が痛みました。

私の母は、地域のボランティアとして、避難している人たちのために、炊き出しに行っていました。たくさんの人たちが避難場所にいて、母らは精一杯、できるだけのことをしたと言っていました。私は母から避難所の話を知ったり、炊き出しの様子を知ったりする中で、その炊き出しに使った食べ物は、だれが費用を負担するのかなと思いました。そして炊き出しから帰った母に、「炊き出しに使った食べ物のお金は、だれがはらうの」と聞いてみました。すると母は、「税金から出るんだよ」と教えてくれました。

また、台風が去った翌日、私が洗面台で手を洗おうと水を出すと、水の量がいつもより少なくなっていました。水道が壊れたのかなと思い、母に聞くと、母は「台風のせいで浸水したけん、家の中を洗ったり流したりして、水不足なんじゃわ」と言いました。三十分くらい断水していた地域もあったそうです。那賀川のそばに住む私たちが、水不足になってしまうほど台風は私たちに大きな被害をもたらしたのだと、つくづく感じたのでした。

たくさんの傷を残した那賀町に、災害救助法が適用されたと、ニュースで知りました。税金が私たち那賀町を助けてくれるのです。国も県も、それぞれが那賀町を助けてくれています。災害ボランティアに来てくださった全国の人たちの温かい心に感謝すると同時に、私は税金にも感謝しました。税金の意義をこんなに感じたことはなかったのです。

もし税金がなければ、家の一部が壊れてしまっても、自分で負担しなければなりません。浸水しても、安全な避難場所で休むことも、ご飯を食べることもできません。救助にあたってくれた消防署の人たち。警察の方たち。すべて税金のおかげです。私は今までなぜ税金があるのか、あまり詳しくはわかっていませんでした。でも、今回の台風で大きな被害を受けて、改めて税金のありがたさがわかった気がしています。

今年の四月に、消費税が五パーセントから八パーセントに上がりました。増税したことにより、生活が厳しくなったのは確かですが今回の台風による被害で、税金の大きな存在意義を知ることができました。わたしの町を大切なふるさとを救ってくれた税金。私は、消費税で納めた税金が、困っている人の役にたってくれると思うとうれしいです。これからも、税金が本当に必要な使われ方をして、人々を幸せにしてくれることを願っています。

税金で支えられる命

北九州市立洞北中学校 3 年 保武 ひかり

昨年の夏、祖母が強い腹痛を訴え、緊急入院をした。2 日後行われた大きな手術や検査の結果、原因不明で治療も確立していない膠原病だとわかった。祖母は、入院の度に、

「ごめんね。またお金がかかる。私が病気ばかりするけさ。」
と、祖父に話している。病気でつらい思いをしているのに、治療や入院費のことまで考えないといけないなんて…と思った。しかし、祖母は
「それでも特定疾患はね、国や福岡県が一部を負担してくれるから助かるんだよ。」
と、教えてくれた。

特定疾患治療研究事業とは、難病患者の医療費の助成制度のことである。現在は、祖母の病気を含め、56 疾患がこの制度の対象となっている。都道府県に申請をし、認定された患者は、治療の一部を税金の中から公費負担として助成されるのだ。

今、祖母が新たな病状とも前向きに戦いながら、明るく過ごせているのも、特定疾患治療研究事業、すなわち、たくさんの人が納めた税金によって支えられているからだと思う。

また、私は今年、中学校 3 年生になった。それとともに、具体的に将来について考えるようになった。そんなとき、親は 2 人で口をそろえて、
「税金を納められる人になりなさい。それで十分やけ。」
それで十分。本当にそうなのだろうか。はじめはそう思っていた。

今年 4 月、消費税が上がり、税というものが身近に感じられるようになった。消費税が上がったということは、私たちが豊かで安心した暮らしができるように行われてきた公共サービス等に必要な費用が足りていないということだろう。実際、今、日本では少子高齢化が急速に進み、社会保障の費用が増えている。その一方、費用を負担する働き手が減っているようだ。老後の安定した生活や健康で文化的な社会を実現するためにはたくさんの費用が必要である。私の祖母や私たち学生のように税金で支えられている人はたくさんいるのだ。

納税という義務を果たすということは、すなわち、社会の一員となるという重要なことではないだろうか。国のためだけではなく、身近な周りの人ひとりひとりを支えるためと考え、納税の義務を怠ることのない、社会に貢献できる大人になりたいと思う。そう考えた上で、これからの自分の将来を見据えて、いろいろなことを学んでいきたい。

税金のおかげで

霧島市立隼人中学校 3 年 徳永 葉音

私は中学二年の時、アメリカのカリフォルニア州ロスバノスに一ヶ月ホームステイに行きました。私は人見知りで、積極性に欠ける所がありましたが、ある事をきっかけにホームステイに行きたいと思うようになりました。それは中学一年生の時に中国人の女の子が二人、私の家にホームステイに来たことです。この中国人の女の子は日本語はほとんど話せませんでしたが、身ぶり手ぶりで積極的に話しかけてきてどんどん友達になっていきました。

私は言葉が通じなくても、相手にだいたい事は体を使って表現すれば、伝えることができるのだと分かりました。そして日本以外の国に興味を持つようになり、私も外国へホームステイに行きたいと思ったのです。そのチャンスは中学二年生の夏休みにやってきました。

とうとうアメリカへホームステイに行けることになり、私は、不安とワクワクと入り混じった気持ちで出発日を迎えました。アメリカの生活は、まるで世界がひっくり返ったようで、毎日が、驚きと新しい事の発見で英語が話せなくて相手に気持ちが伝わらなかったらどうしようと心配していたのが、うそのようでした。あっという間に、楽しい時間が終わり帰るときにはホストファミリーと抱き合って涙が止まりませんでした。帰国後、またアメリカのファミリーの所へ行きたくなり、旅費はどのくらいかかるのかと計算するとかなりの高額になる事が分かりました。

母に、今回のホームステイのお金はどうしたのかと聞くと、半分は霧島市から出してもらって行けた事を知りました。こんな所にも税金が使われているのかと驚いた事と行かせていただいた事に感謝をして、使わせていただいた金額以上にホームステイの経験を生かして社会に貢献しようと思いました。

私はまだ、自分のお金で税金を払ったことはありませんが、大人になったら働いてしっかりと税金を納め、私の納めた税金で、また次の人が未来を切り開くような新しい体験ができるよう役に立てることができたらいいと思います。

社会へ貢献するために、中学生の時に税金について詳しく学び、英語力もつけて、海外で活躍できるようにがんばりたいと思います。

また、私のような体験をすることで、視野が広がり、物の見方が変わっていき、それが新たな道へとつながっていくので、いろいろな制度を積極的に利用して、いろんな体験を小さい時から行えるような環境を作っていく事が、大切だと思いました。

税金のおかげで、私はホームステイに行く事ができ、将来の夢を描くことができました。

税金とは、夢を助けてくれるものと思いました。

「税」に支えられて…

那覇市立石嶺中学校 3 年 上地 カノン

私には、沢山の夢があります。多過ぎて母に呆れられますが、やりたい事が溢れて、仕方がないのです。

昨年まで、私には制限がありました。あれも駄目これも駄目、やってみたいと思っても、諦めざるを得ない状況で、次第に多くの事を求めなくなっていました。私の体に、流れている血液が、病に侵されていたからです。

発症したのは、私が小学校三年生の時。病院に行くと、毎日、血液を抜かれ、何本も点滴を打たれます。一日の大半を、病院で過ごす為、学校にも満足に行けず、家と病院の往復だけで、退屈な日々を過ごしていました。そんな中、私は「点滴さえなければ、もっと早く帰る事が出来る。学校にも、行けるかもしれない。」と思い、点滴を嫌がり拒んで、母を困らせる時がありました。その時母が、

「この薬はとても高い物で、簡単に貰える物じゃない。皆が、沢山の金を出してくれたから、使う事が出来るの。この薬には、皆の想いが、込められているのよ。」

と話してくれました。幼い私には、意味がよく理解出来ませんでしたが、とても大切な薬だという事は分かりました。

しかし中学に入り、社会の宿題で「税金」についての資料を貰い、読み進めて行くうちに、母の言葉を理解する事が出来ました。私のように、難病を抱えた人達が安心して、治療や手術を受けられるよう、患者を支える家族の負担を、軽く出来るように、各地の市区町村で助成が行なわれています。それは、国の社会保障費から充てられているものです。私に使われた薬や治療、脾臓摘出手術を行えたのも、助成制度が無ければ、難しかったと思います。今、私は病気も完治し、長い闘病生活を終え、やりたい事を諦める事なくチャレンジしています。皆が納める「税金」が、私の明るい未来を切り開いてくれました。その感謝の心を忘れず、今度は私が社会に、少しでも貢献出来るようになりたいです。

私達が生きる社会で「税」は、様々な役割を果たしています。私達が普通に利用している道路や学校、医療等のサービスは、税金でまかなわれているのです。

私は「税」について学び調べる事で、国民が「納税」という形で、つながっている様に感じました。税金によって私達の暮らしは支えられています。

これからの社会を担っていく立場にある私は、しっかりと納税の義務を果たす事の出来る、大人になりたいと思います。

沢山の笑顔が生まれるように――。

支え合いと感謝

北海道教育大学附属札幌中学校 2 年 吉田 涼真

人は何に幸せを感じるのだろうか。国連が昨年九月に発表した幸福度レポートによると、デンマーク、ノルウェーなどの北欧圏の国々が上位にランクインしている。各国とも消費税率が 25%と、日本の 8 %と比較しても高いことは明らかであるにも関わらずだ。

昨年だったと思うが、NHKで偶然それら北欧の国々の消費税と社会保障について取り上げている番組を見る機会があった。僕にとって意外なことにも、それらの国々の国民達は、消費税が高いことについて何も不満を持っていなかった。その理由は、日本と比較できないほど社会保障が充実していたからであった。教育については大学院までが無料で、全ての国民に平等な教育の機会が与えられる。また、医療についても費用がかからず、全ての国民に平等な治療の機会が与えられる。彼らはそんな自国の社会保障に安心や幸せを感じていた。そして感謝と誇りを持って「自分達も税金で大学まで学ばせてもらったのだから、働けるようになったら税金を納めて国や支えてくれた社会の人々にお返しするのが当然でしょ？」と言っていた。なるほど、素晴らしい考え方だ。

以前、家族と税金について話をしたときに、毎日通学に使っている道路が税金によって造られ維持されていることや、税金には富の再配分の機能があり、お金というのは社会の血液のようなもので、一つの場所に留まることなく、健全に循環させることで、みんなが幸せに暮らせることなどを学んだ。

また、僕の場合は父が国家公務員なので、父の給料も税金から頂いている。日々自分が食べるものから身につける衣服、住む家に至るまで税金で支えられていることになる。このことに対しても更に感謝の気持ちが深くなった。

今年の 4 月に日本の消費税率が 5 %から 8 %に引き上げられた。日本のマスメディアは家計への負担が増えるなど増税のマイナス面を大きく取り上げており、中学生の自分にとっても、日々の小さな買物をする際に「3 %の増税は大きいな。」と感じていた。

しかし、僕や家族、社会の人々が納めた税金が、日本のどこかで医療や年金、福祉などに役立てられたり、僕達義務教育の小中学生の教科書や教育費用に充てられていることを考えると、税金を納めることの大切さを実感し、顔も分からない誰かが納めた税金によって支えられていることに改めて感謝するようになった今、税金は「支え合い」や「協力」というイメージになった。

僕は今のところ、将来の夢を一つに絞れていないが、大人になった時には、社会の支え合いの一員として納税し、この国の国民の務めを果たせる大人になりたいと考えている。感謝と誇りを持って。

今年開催された、サッカーワールドカップブラジル大会では、各国の選手による素晴らしいプレーに魅了された方も多かったのではないのでしょうか。そして世界大会と言え、六年後にはさらに大きな感動を味わえるオリンピックが我が国日本で開催される予定です。それに伴い、各国の選手を迎え入れる為の選手村や宿泊施設、競技場の建設、交通網の充実などのインフラ整備、さらには、セキュリティなどの安全面と、様々な所に税金が割り当てられます。

では、この他に税金は一体どのようなことに使われているのでしょうか。それは、医療や年金、福祉、介護、生活保護などの公的サービス、道路や港湾施設、下水道、河川の堤防など施設の整備費、そして、学校教育や科学技術発展のために使われる費用などです。

もしもこれらを賄う税金がなかったならオリンピックの為の整備どころか、開催すらできなくなるでしょう。そして私達の生活の中では、警察がいなくなり、犯罪者は野放しで街に溢れ、救急車や消防車をお願いするのに多額のお金がかかるとともに、治療費も高額化します。道路や堤防なども整備されことなく、荒れ放題となり、事故が多発するかもしれません。さらには、私達中学生も教育を受けることが出来なくなってしまうのです。こうして考えると、税金がいかに大切で、私達の生活の助けになっているのかが身に染みて分かります。

私の将来の夢は、医師になることです。医師になるためには、国公立大学でも私立大学でも、金額の差はありますが、どちらも授業料を必要とします。しかし、国公立、私立共に税金の援助を受けており、医学教育は、国民がしているといっても過言ではありません。一人の医師は納税者全員によって生み出されるのです。いわば、納税者がサポーターとなり、選手である医学生を社会という大舞台へ送り出すということです。そのサポーターに恩返しをするためには、勝利、すなわち社会に役立つ人材になることだと思います。そして勝利へのシュートを決めるには、パスを繋ぐことが肝心です。このパスこそ、納税者から学生に、成長し納税者となった学生達が次世代の学生に与える義務というものなのです。この未来へのパスを繋ぎ、互いに支え合ってこそ、チーム日本となれるのではないのでしょうか。納税者一人一人は、チーム日本のサポーターでもあり、また選手でもあるのです。

多くの人の援助を受け、社会に出る以上、教育を受ける権利を得ただけでなく、その権利を最大限に生かし、社会に貢献することが義務であると強く感じます。将来私は、サポーターの応援を胸に義務を果たし、自分がサポーターとして選手を支えていけるよう、そしてチーム日本の一員としてパスを繋げていけるよう努力を積み重ねていこうと思います。

終わり

私と税と私達

河口湖南中学校組合立河口湖南中学校 3年 山口 鈴音

私がまず「税」について何か答えろ、と言われたらと考えた時に、私は税について考えたこともなければ、気にしたこともなかった事に気付きました。この作文を書くにあたって、初めて真剣に税と向きあったのです。

しかし、どれだけの資料を読んでもパツとしませんでした。「漠然」という言葉が相応しいなと思ったほどです。言いたい事は分かるのだけれど、それが自分とどう繋がるのかがいまひとつ理解できませんでした。

そんな時、母が一冊のアルバムを眺めているのを見かけ、声をかけてみました。掃除が進まなくて、なんて言いながら何分もそうしているのです。初めは呆れていた私も、自分の懐かしい写真や恥ずかしい写真に、いつの間にか母の隣で分厚いアルバムに見入っていました。しかし、ふと不思議に思いアルバムをめくる手を止めました。急に1歳ごろの弟の写真が登場したからです。あれ、と思い一番最初のページに戻ってみると、産まれたばかりの私がしっかりと母の腕に抱かれています。なぜ私は産まれてすぐの写真なのに、弟は1歳近くの写真からなのかと疑問に思い母に尋ねてみました。すると母は母子手帳から1枚の写真を取り出し、私に見せてくれました。そこには、呼吸器に入った小さな赤ちゃんが写っていました。アルバムの私とは大違いです。聞くと、弟は昔から体が弱く、患っていたぜんそくで何度も入院したと言います。今は健康そのものだけど、何度も入院したとなれば費用も相当のものだったんだろうなと思いました。そう聞くと母は、

「入院費のほとんどは国が払ってくれたんだよ。あの時は助かった。」と話してくれました。家のような母子家庭には、心強い味方だったんだと思います。母の「助かった」の一言で、ずっともやもやしていたものがストンと胸に落ちた気がしました。

私が払っていた税金は、巡り巡って私たちのためになっていたのです。社会保障や教育施設などの施設建設、公共サービス。特に教科書は「子供たちの未来のために」と国が全額を負担しているというのには驚きました。

私は今まで、税はなくても良いものだと考えていました。買い物をする時に邪魔だと感じる以外、気にもしていなかったからです。けれど、今回この作文を通して税について学び、それは間違いだったと気付かされました。少し視野を広げれば、私たちは税に支えられて生きている、と感ずることが出来るはずです。また、きっとどこかで、助かった、ありがとうと思っている人がいると考えれば、税への見方も変わってくるのではないのでしょうか。

この5%、8%という小さな積み重ねが私たちの未来、ひいては国の未来に繋がってゆくのだと思います。

増税と暮らし～中学生の私ができること～

高岡市立南星中学校 1 年 竹内 文菜

今年の四月に私は中学生になった。私には三つ上の姉と三つ下の弟がいる。さて、今年の三月の出来事である。とあるショッピングセンターでのこと。「これ中学になったら必要よね。これも・・・部活も始まるし、こんながも使うことになるよね。」

母は次から次へとあふれんばかりに買い物カートに積んでいく。中学進級と高校進学が重なり、我が家はいつにも増して物いりだ。あまりの買い物の量に少し恐ろしくなった私は母に、

「学校始まってから買えばいいじゃん。」

と言った。すると母はあっさり返す。

「うん、でもね、四月から消費税八%になるやろ。少しでも出費抑えんなん。」私は、まじまじとレシートを眺めた。確かにこれが五%から八%になると・・・たかが三%と思っていたけど、結構な額になるんだなと思った。買い物は日々のことだ。増税されたら我が家の生活は苦しくなるのではないかと不安になった。

そうして迎えた四月。私が毎月購入している雑誌も消費税八%に上がった。ずっと読んでいて中身はそれほど変わらないのに値段だけが変わって、不思議な感じがした。

そんな六月のある日のこと。母が「やったー。」と大喜びで私に一枚の紙を見せてくれた。見れば、「中学一年生～三年生のお子様のいる方へ 十月から子供医療費助成制度が拡大されます」と書いてある。

「えっ？ピンクの紙復活するんや。」

私が六年生まですごくお世話になった用紙なので、驚きと嬉しさでいっぱいだ。

「税金上がったけど保障も充実したね。」

と母が言った。

私は四歳からアトピー性皮膚炎で毎月通院している。血だらけだった顔や背中では治療のかいあって今ではつるつるになった。夏の日焼けによる悪化を防ぐ工夫をし、冬の乾燥に気をつけ、そのうち通院サイクルも三ヶ月毎になった。幼い頃からピンクの用紙と共に通い続けたかいもあり、この夏、主治医からは

「次の予約は入れませんので、今の状態をキープし、都合が悪くなれば受診してね。」

という言葉をもたらえた。肌もつるつるになって部活動も休まずに行けて嬉しかった。

「子供医療費助成制度」は皆が納めた大切な税金を財源にした制度だ。税金には「払う」だけでなく、「使う」という面もある。日ごろの生活の中で、私たちは「払う」方にばかり目が行きがちだが、身の回りで色々なことに使用されていることを実感できた。

レシートに印字された「税額」。増税に対する私の不安は、安心に変わった。中学生の私に今できることは、税の恩恵に感謝しつつ、大切な税金に支えられたピンクの用紙に本当に必要な時だけ助けてもらえるように、健康な状態を維持することだと思う。

僕の学校の校舎は、七年前に建てられたばかりだ。教室や廊下、体育館はとてもきれいで、エアコンや太陽光発電といった設備もある。校舎が新しいので、気持ちよく、集中して学習に取り組んでいる。

そんな校舎を美しく保とうと、環境委員会が主催し、毎年「クリーンマスター」という取り組みを行う。それぞれの班の掃除を八つの項目で点検し、基準に達した班はレベルアップできる。レベル一からはじまりレベル六に達すると「クリーンマスター」の称号が与えられて、さらにレベル七まで取り組みを高める。今年度は僕が環境委員長になり、この取り組みに点数をつける制度を加えた。はじめはなかなか掃除に集中できていなかった班も、真剣に取り組むようになり、掃除を工夫するようになる。校舎を美しく保つ、また真剣に取り組んで集中力を養う。そして、心をみがこうと行われている。僕も環境委員長として、掃除を改善し、校舎がきれいになるよう呼びかけてきた。いつも校舎をきれいに保ち、気持ち良く過ごせているし、今後校舎を使う後輩たちもきれいな校舎を使うことができる。僕たちの学校がとても誇りにできる取り組みだ。

先日、学校で租税教室が行われた時、僕は考えた。毎日、当然のように使っている校舎は税金によって建てられたものである。美しい上に、色々な設備がある。どれだけのお金がかけられたのだろう。とても多くのお金が僕たちの校舎のために使われたに違いない。

そう考えると、僕が学校で力を入れて取り組んでいる掃除は、今、校舎を使っている僕たちや後輩たちのためだけではない気がしてきた。僕たちが行っている掃除は、税金を納めた国民全員に感謝の気持ちを表すことにつながるのではないかと考えた。そして、今、僕たち中学生が校舎を掃除し、美しく保ち後輩たちに引き継いでいくことは、国民の義務としての納税と同じ意味をもつのではないだろうか。国民の一人である中学生としての義務なのではないかと思う。

そう考えると、僕たち中学生は、今は消費税しか納めていないが、国民の一人としてできることがあると思った。例えば、今、学校で使っている机や椅子は三年間同じものである。大切に使うことも義務である。他にもできることはたくさんあると思う。僕は今後も自分にできることを進んで行っていこうと思う。それが中学生としての義務である。

僕が大人になると、納める税金の種類が増える。給料をもらえば所得税、家に住めば住民税など…。消費税を納める額も増える。税金を納めるようになったら、しっかり納め、国民の未来を担う一人であることを誇りにできる大人でありたい。また、納めた税金が何にどう使われているかを把握している大人になるため、今は将来のための礎を築きたい。またこれも、中学生としての義務なのだから。

税金の優しさ

播磨高原広域事務組合立播磨高原東中学校 3年 藤阪 希海

税金。そう言われても、私はそれについて何も知らないなあ、と作文を書くにあたって思った。身近なはずなのに、何も知らない税金。どんな事に使われているのだろう。無ければ困るのだろうか。調べながら、「税金の無い世界」を想像してみた。

行ってきます、と朝家を出る。歩いて学校へ行こうとしているのだ。でも、きっと途中でこけるだろう。道端の植物の剪定も、道路の修繕も行われていないからだ。もう、と何かに怒りながらも、学校に着く。すると、校門の前に首から箱を提げた校長先生がいた。

「おはようございます。」と挨拶をする。

「おはよう。はい、ここに今日の授業料入れてね。校舎も土地も先生の給料もお金があるからね。お金払わなかったら、学校の敷地には一步も入れないよ。」

学校へ行くのにお金なんか持たない私は、困って当然引き返す。仕方ない。図書館へ行って勉強だ。しかし、図書館にも入場料がかかるようだ。それどころか、窓から覗いてみると、館内にろくに本が無いのだ。何てこった。呆然としてしていると、後ろから包丁を首に突きつけられた。後ろへ目をやると、最近ニュースで騒がれている連続殺人犯がいた。そう、この世界には警察もいないのだ。

ここまで想像して、私は税金の無い恐ろしさが身に染みた。火事になっても駆けつけてくれる人はいない。公正な裁判官がいなくなったら、社会は荒れ放題だろう。税金のお陰で成り立っているのは物品だけではない。

私は昨年、インフルエンザにかかった。学校を休み病院へ行った。その時でさえも、母は病院でお金を払った様子ではなかった。

「母さん、お金払ったの」

当然私は尋ねる。すると、

「中三迄、無料なのよ」

と言うではないか。どうやら、中学三年生迄医療費無料でいられるのも、税金のお陰らしい。

私は、これまで税金とは無理矢理払わされるもの、というイメージだった。でも、そうじゃない。少しずつ皆がお金を出し合って、住みやすいまちにしましょう、という制度なのだ。地域の集会所、高速道路、公園…。外に一步出て周りを見渡すだけでも、税金のお陰で利用できる物が、溢れかえっている。そしてそれは、大抵生活していく上で必ず一度は使うものだ。税金は、国民の生活を保障する為、助け合っていこうという意味で払われるのだと思った。何て皆に優しい制度なんだろう。税金は払わされるものじゃない。むしろ、進んで払うべきなのだと思う。

問題は、税金を無理に払わされている、と思っている、以前の私のような人も少なくないことだろう。どうすれば、その人達に税金の優しさを伝えられるか。私にできることは何だろう。全員が納税し、協力して素敵にまちに住む。私の願いが一つ増えた。

税と私たちの将来

庄原市立高野中学校 2 年 伊藤 のぞみ

私は今まで、税の役割や種類などを、あまり知りませんでした。そして、税に関わる問題についても、考えてきませんでした。私には関係ないことだと思っていたからです。

しかし今回、税について調べてみて、税は私たちの生活に大きく関わっていることが分かりました。税とは、社会を支える「会費」のようなもので、生活に役立つことや助け合いなどのために使われていると知りました。例えば、病気になり、手当てをしてもらう時、病院にはらわなければならないお金の半分は税金が使われているということや、学校の学習で使うものは「補助金」が出されているということ、高齢になったら働かなくても「年金」がもらえて、安心した暮らしができるということなどです。これを知って、税金はとても大切で、私たちの生活に絶対に必要だ、と思うようになりました。そして、もっと税について知っておこうと思い、詳しく調べてみました。

すると、国には「公債金」という借金があることを知りました。私はその公債金と税金の関わりに興味をもちました。

公債金は、国が集めた税金で返しているそうです。しかし、最近公債金を使うことが多くなり、税金でも返しきれないという事態が起こっていると知りました。なぜ税金で返しきれないのかを考えたところ、私は、「少子高齢化」が影響しているのではないかと思いました。高齢化により、年金の量が増え、税金が足りなくなってしまったのだと考えます。しかも、若者が減っている中、働かない人もいて、納められる税が少なくなっているという問題もあると思います。このままだと、一人が納める税金が増えたり、高齢者も退職できずに働いたりする社会になるのではないかと思い、不安になりました。今年の四月から消費税が五パーセントから八パーセントに増えたのは、今、社会でこのような問題が起きているからだ、と分かりました。

今回、税について知ったことで、日本の社会で起きている少子高齢化による問題や、将来を考えるということなどに、取り組むことができたと思います。私は、はじめ、税に関わる問題は私には関係ないと思っていました。しかし、調べてみると、税は私たちの今の生活に、すごく役に立っていて、また税に関わる問題は、私たちの将来にも影響を与えているのだと分かりました。このまま日本の少子高齢化が進めば、若者が納める税は、一人あたりどれぐらいになるのでしょうか。将来はどうなるか分かりませんが、私は、きちんと働いて、生活、そして社会を支える「税金」を、しっかり納めていきたいです。

税に助けられて、今、私が思うこと

徳島文理中学校 1 年 大本 泉

中学校に入学して半月経った頃、いつも飲んでいる、アレルギー性鼻炎の薬がなくなったので、耳鼻科を受診した。今までは、診察が終わったら、診察カードと薬の処方箋を受け取るだけだったのに、母は医療費を支払っていた。不思議に思ったので、病院を出て、

「今日は何で、お金を支払ったの。いつも払わないのに・・・。」

と私が母に聞くと、

「私たちの住んでいる所は、小学校を卒業するまでは、医療費は払わなくてもいいの。働いている人が納めている『税金』というお金で、医療費に賄われているよ。」

と、母が教えてくれた。

母の話聞いて、本当に驚いた。それと同時に、感謝の気持ちでいっぱいになった。小さい時、体の弱かった私は、何回も入院した。また、数え切れない程、通院もし、薬を飲んだ。そのお陰で、私は今では、とても元気になった。これまで、どれだけの医療費が私のために、必要だったのか、改めて考える良い機会となった。

また、他に身の回りで税金が使われていることはないか探してみた。すると、祖父に時々届く『医療費のお知らせ』というハガキを見てみた。高齢の祖父は、肺がんの治療のために入退院を繰り返している。よって、医療費の総額は驚くほどの金額だった。しかし、これもまた、税金のお陰でわずかの支払いで済んでいる。自費で全て支払うとなると、到底不可能だ。税金の有難さを痛感した。

また、毎日、使っている教科書が、私たち義務教育中の児童や生徒に、無償で提供されていることが分かった。本屋さんで買う本には、値段が記されているが、教科書には値段の表示はなく、

「この教科書は、これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。大切に使いましょう。」

と書かれていた小学校一年生から今まで、学年が変わる度に、たくさんの教科書をあたり前のようにもらい、それを使ってきた。値段にすると、どれくらいするのだろうか。想像もつかない。

今、私にできることは、この教科書でしっかり勉強することだと思う。それが、何よりのご恩返しになるのではないだろうか。そして、将来、働き始めて給料の中から税金を納めたいと思う。

また、私も今までそうであったが、税金の意味、また、その重要性を社会の中で、正しく伝えていけるような人間になりたいと思う。そうすることが、教科書の裏にも書かれていた、『これからの日本を担う』私たちの使命ではないかと思う。明るい未来の日本のためにも、正しい税金の知識と役割を胸に秘め、立派な社会人になることを、ここに誓う。

お店に並んでいる商品の値札に、「税抜」と書かれているのを見ると、なんだか損した気分になります。お茶を一本買うぐらいならあまり気にならないけど、大きな買い物をすると、やはり「税金がなかったらな…」と思ってしまいます。だから、この作文をきっかけに、税についていろいろなことを調べました。

例えば中学校です。学校で授業を受けるには、教科書が必要です。毎年当たり前のように配付される教科書ですが、これは税金で作られています。図書館なら税金が使われる理屈は分かります。それは、みんなの役に立つからです。それならなぜ、教科書をはじめとする教育に、税金が使われるのでしょうか。

現代の日本では、少子化が進んでいます。十年後、二十年後に私達がこの国を支えていかねばならなくなった時、きっと今よりも一人一人の若者の力が大きな存在になっているはずです。そんな若者の中に、きちんと教育を受けられなかった人が大勢いたらどうでしょうか。日本の暮らしや経済はめちゃくちゃになってしまいます。しかし、教育に税金が使われなければ、貧しい家の子供は学校に通うことができません。だからこそ、教育には税金が使われるのです。

「自分が納めた税金が知らない子供の教科書になるなんて。」と思う人もいるかもしれませんが。でもその考え方は間違っています。十年後、二十年後の未来に大きく影響する子供達に教育を受けさせ、深刻化していく少子高齢社会に立ち向かっていけるように育てるのがみんなの役目です。そして、教育を受けるのが当たり前と思わずに、未来を託されているということの重大さと感謝の気持ちを忘れずに勉強するのもまた、みんなの役目だと思います。

三年前の三月十一日、東日本大震災が起きました。その時、日本中の人が見地の人達のために何かできないだろうかと必死でした。自衛隊の人なら直接手を差し伸べることができます。でも私はどうでしょうか。東北に行く事も無理ですし、ボランティアに入る事もなかなか難しいです。そんな時、誰もが利用したのが「募金活動」でした。「何か力になりたいけれど、どうすれば良いかわからない。せめてこのお金が何かの役に立つなら…」きっと募金している人はそう思っていたはずです。

税金も、これと同じではないかと思います。日本のために、私達が直接できることはあまりないかもしれませんが。でも、みんなが少しずつ納税すれば、一つ一つ、確実に暮らしは豊かになります。周りを見回してみると、税金でつくられたものばかりです。私は、「税金がなかったら…」と考えていたことを、とても恥ずかしく思いました。

税金は、「納めなければならないもの」ではありません。「私達が未来のためにできること」だと思うのです。

みんなのための「思いやり税金」

合志市立西合志中学校 2 年 久保田 来斗

僕は 4 人兄弟、妹が 3 人います。「4 人かぁにぎやかでいいですね。」とよく言われるが、赤ちゃんがお腹にいる時のお母さんは大変だったことを聞きました。

僕がお腹にいる時、切迫流産で入院をしたそうです。入院中は点滴を何本もして、毎日何種類もの薬を飲んでいました。お腹の赤ちゃんがお腹の外で育つ大きさではないのに出てこようとしたからだそうです。薬を飲んで出血をおさえ、点滴で赤ちゃんがまだ出てこないようにしたそうです。妹の時も三人共同じように入院をしました。何度も何度も入退院を繰り返してました。元気な赤ちゃんを産むためにはものすごくお金がかかります。赤ちゃんの様子を定期的に検査する妊婦検診にかかる費用は、普通の検診で五千円～八千円、血液検査などの検査があると軽く一万円は超えるそうです。その負担が大きいので僕のお母さんは検診を減らしたりしたそうです。でも、その検診を減らしたことで後悔を作ってしまったと話してくれました。お腹の中で赤ちゃんが死んだそうです。きちんと検診に行ってれば赤ちゃんの異常にも気づいてたかもと、母はずっと泣いてたそうです。

妊婦さんが安全にそして健康な赤ちゃんを産むためには最低十四回の妊婦検診が必要だそうです。二〇〇九年 一月から妊婦検診十四回無料システムというものができました。少子化対策の一環として、妊婦検診の費用を助成しようということになり、国から地方自治体に予算が下りるようになりました。「十四回までは検診代を無料」になったのです。これは「税金」から支払われます。四番目の妹の時はこの制度が適用され、通院が楽になったと母が話してくれました。それら安心して赤ちゃんが産めたのだそうです。

出産したら出産費用を退院の時に病院に三十万から四十万支払わなければならないのだそうです。これは国の税金から支払われます。僕が産まれる頃は、退院時に一旦自分で出産費用を支払い、そして市役所に申請して出産費用が三十万円まで返ってきたそうです。今は退院時に書類を提出するだけで、受付で出産費用を支払わなくても良くなったそうです。これも僕達の「税金」から支払われています。

今年から消費税が五パーセントから八パーセントに上がりました。自動販売機のジュースも百五十円が百六十円に値上がりしました。「高い」と思ったのが本音です。でも今回母の話を聞いて、僕達が納める「税金」は希望と思いやりに変わることがわかりました。必要なことに、必要な人のために使う大切な「税金」。その税金を誇りを持って、納税の義務をきちんと果たす人になりたいです。

僕や妹のためにも使われた大切な税金を、次に必要としている人のために。

震災復興のために

南城市立久高中学校 3 年 大泉 光

私は中学一年生の春から、地元である東京都八王子市を離れ、沖縄県南城市にある久高島に山村留学をしています。二〇一一年三月十一日、東日本大震災の日を、私は東京都八王子市で体験しました。

当日の午後二時四十六分、小学校の教室にいた私は、震度五というこれまで体験したことのないゆれを経験しました。特に大きな被害はありませんでしたが、皆が初めて体験する恐怖におびえ、様々な不安を口にしたことを今でも覚えています。東京中の電車は全て止まり、交通は大混乱。仕事に出ていた父、高校一年生の兄はその日、家に帰って来ることは出来ませんでした。その後も計画停電など、震災の影響は私達の生活を直撃しました。

テレビで見た映像は、目を疑うものでした。町がまるごと津波にのみこまれていく様はとても衝撃的でした。父と兄はそれぞれ現地で、震災ボランティア活動に参加しました。現地の状況を目の当たりにした父や兄の話は、とても生々しく、震災が起こったという事実と被害の大きさを実感しました。この大きすぎる被害を、誰が、どのようにして元に戻すのかを考えると、気の遠くなるようなことだなど、幼ながらに感じたことを覚えています。

そこで、震災復興の為に税金の仕組みがどうなっているのかということを、調べてみました。二〇一一年の秋に法律が改正されて、「復興財源」の仕組みが作られました。復興の為に増税は、復興特別税（復興特別法人税、復興特別所得税）と住民税の増税からなります。復興特別法人税は三年間税額の一〇パーセント、復興特別所得税は二十五年間税額の二、一パーセント、住民税の増税は一〇年間千円を増税するものです。その総額は、一〇、五兆円にも及びます。復興財源はこれだけでなく、総額で二十五兆円もの予算が準備されることになりました。私はこれらの仕組みを知り、その影響の大きさに改めて驚きを感じました。私が社会人になった時に納める税金までもが、すでに復興財源に組みこまれているのです。他人ごとではないと知ったのでした。

ところが、二十五兆円の財源のうち、二〇一三年度までに使われたのは十八兆円にとどまっています。この事もあってか、経済政策のひとつとして、復興特別法人税は今年三月末をもって一年前倒しで廃止されました。所得増税は二十五年間も続くのに、おかしい話だと思いました。さらに、復興予算の不正な使われ方を報じるニュースをテレビで見て、理不尽だとも感じました。

このような事実を知り、震災の復興を願って税を納めている人々の気持ちは踏みにじられているのではないかと思います。大切な税金が正しく使われるように、私達一人一人が意識を高く持って考えていかなければならないと感じました。

税の力

由利本荘市立本荘南中学校 1 年 會田 綺

「なんて素晴らしい建物なのだろう。」

私は、初めて複合公共施設「カダーレ」を見た時、思わず息をのみました。

すごくスケールの大きな建物。設備も充実しており、そしてその外観デザインは、今まで見たどの建物とも違っていました。

小学校の音楽会、夏のイベント会場としてなど利用するたび、私は「この町にも自慢できるような施設ができた」と嬉しい気持ちになりました。

その翌年、今度は由利タワーが完成しました。八十年間も使われていた由利橋がかけかえられたのです。つり橋の一種である斜張橋で、その建設には最新の工法が用いられており、授業で工事中の現場を見学に行きました。建設会社の方の説明では莫大な税金が投じられているとのことでした。現実目の前で形になっているこの橋を見た私は、税の力の大きさを実感し、もし税がなかったら世の中はどうなってしまうのかと考えるようになりました。

国の歳出で最も割合が大きいのは、社会保障だそうです。生活保護や年金、医療保険など、私達国民一人一人が将来への不安を感じず、健やかで文化的な生活ができるように、様々な形で税が使われています。私達中学生の教育費にまで国の助成があるのです。

人間はその人生をおくっていく間、皆が平等で機会も均等、ではないと思います。

病気にかかって治療が必要になったり、自分の夢や目標の実現も、自分自身の問題以外のことで疎外されてしまう。外的な要因で、一人ではどうにもできない壁にあたり、行く手を阻まれてしまうこともあるでしょう。

それを「社会」が、私達が力を合わせて健やかで安心できる未来の実現をサポートしてあげる。その手段、ツールとして税があるのだと思います。一人の力ではどうにもできない立派な橋も、巨大な公共施設でさえ建設することができます。それにとどまらず、この日本の未来を、より良い形で次世代へと引き継がせる手助けをすることができるのです。そう考えると、税を少しでも無駄にしていけないとも思います。国民一人一人の、力を合わせた結晶である税は、本当に有用な、すべての人の力になる方策にしか使ってはならない。身のまわりのことからでも、税についてもっと関心を持ち深く考えてみる必要があります。

まだ中学生の私は、買い物をする時など間接的な形でしか税を支払っていません。

これから将来、社会人になった時、納税することで義務と責任を感じ、この社会を共に支えている実感（幸福感）を持つのだと思います。その時は、初めて見た時に驚いたカダーレや由利タワーも、また違った、さらに素晴らしいものに見えることでしょう。

大人になった私が見るその風景。今からすごく楽しみでなりません。

無料の意味を考える

立教新座中学校 1 年 光藤 貴尚

夏休みに入って間もないある日、母が文京区から届いたゴミ収集に関するアンケートを記入していた。普段からゴミ出しを手伝っている僕にも勉強になるからと言われ、クイズ感覚で一緒に回答した質問内容は、毎回どの様にゴミの分別に協力しているかだけではなく、可燃物、不燃物、資源やその他のゴミの出し方に対する疑問や要望の有無、これからのゴミ収集に対する考えまでもが細かく丁寧に聞かれていた。

最後の方の質問で、今後のゴミ収集の有償化についての考えを答える欄に、無料がいいに決まっていると思っていた僕の答えとは違い、母は場合によっては有償も受け入れるという意味の回答欄を選んでいて。買い物の時でも、どちらの品物が安いかな等を考え、僕にもお小遣いの無駄遣いに注意しなさいと言う母が、ゴミの有償化にある程度賛成とは意外だった。そこで、どうしてか聞いてみると、

「無料の意味を忘れて、間違えた方法でたくさんのゴミを出す事を避けられるかもしれないからよ。公共事業がどういう風にして無料なのか考えたことがあるかな。」

と言った。僕は何をどう答えるべきなのか、その時すぐには思いつかなかった。

ゴミを出せば、区の係員さんが回収してくれる。その仕事も、収集されたゴミの処理、資源のリサイクル費も税金で賄われているという事実、改めて気付いた。ゴミが増えれば経費も増し、環境にも良くないという事は、その対策も含めてより多くの税金が必要になる。生活環境改善のため、ゴミ回収に関するアンケートを送り集計する区の職員の方にも税金がなくては支払いが出来ない。無料とは言っても、税金投入による支援だと言える。今まで無料の意味を深く考えていなかった事を、初めて恥ずかしいと思った。

ゴミだけの問題ではない。僕達中学生は学校へ行き教科書の配布を受け、公共の図書館に行き本を借り、多くの美術館や博物館等に足を運ぶ。教育に関わる多くの部分が無料で受けられる。通学する道路の整備や、友達や家族と行く公園も、国や地域が税金を生かして造ってくれた設備だ。そして、その環境を保ちより良くするために働く公務員の方がいて、積み上げられてきたシステムに守られているのだと思う。そのお蔭で、今の僕は、具合が悪くなり病院に行っても、無料で診察を受けられる。

僕が今出来ることはとても小さい。けれど、僕の生活には、両親だけではなく、この国で働いて税金を納めてくれている大人の支えがあることに感謝する気持ちは忘れないようにしたい。そして、「これからの日本を担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています。」とくださる教科書を大切に勉強して、強く社会を支えられる大人になりたいと思う。

税金でつながる命のリレー

香取市立新島中学校 3 年 大川 ゆずき

「あと三分遅かったら生きていませんでした。」医師からの言葉が忘れられません。今でも時々、思い出すと恐怖で不安な気持ちになってしまいます。祖父は、仕事中に喘息の発作をおこし救急車で病院に運ばれました。青白い顔に体が硬直した状態でまるで別人のようでした。意識はほとんどなかったと聞いています。救急隊の方々の早い処置と病院の医師の懸命な治療で祖父は一命を取り止めました。救急車で病院に行けた事に感謝の気持ちでいっぱいです。もし、この世の中に、救急隊のような公共サービスや、それを支える税の仕組みがなかったら、祖父の命はなかったと思います。元気になった祖父がつくってくれるおにぎりは色々な具が入っていてすごく大きいのです。その大きなおにぎりを食べる私を見て微笑む祖父を見ると、あの時救急隊の方々に助けていただいて良かったと思います。改めて家族の大切さに気付かされました。また、多くの命を守ってくれる社会の仕組みが税金で支えられていると知るきっかけとなりました。そして、租税教室を受け自分の家族と税について話し合いをしていくうちに、家族は一つの小さな社会だなと思いました。大人が働き納税をすることで子どもが教育を受けられる。その子どもが成長し大人になり納税することで次の世代の子どもや高齢者が豊かで安心して暮らせる。私達が過ごす普通の暮らしは、実は勤労・教育・納税義務を果たす事で権利が守られ、社会が成り立っていくものだと思います。税によって自分自身も支えられていると実感しました。

少し前の出来事です。母がまだ幼い弟を抱きかかえ、私ともう一人の弟の四人でパン屋に行った時の事です。見知らぬおばあちゃんが近寄ってきました。すると母に向かって「こんなに子どもがいるから年寄りの生活が大変になるのよ。」と言いながら怖い顔で私と弟を見ていました。母は反論せず店を出て怒りを抑えながら「将来、子ども達がみんなを支えていく事になるのにね。大切な宝なんだよ。」と微笑んでいました。あの出来事は今でもはっきりと覚えています。国民が税の仕組みや使いみちに関心を持って、日本の厳しい財政状況を少しでも理解していれば、あの見知らぬおばあちゃんの考え方は少し違っていただけないかと思います。

急速に「少子高齢化」が進行し、二十一世紀半ばには国民の二・五人に一人が六十五歳以上の高齢者となる予測です。みんなが互いを思いやり、お年寄りや弱い立場で苦しんでいる人達が税金の恩恵を身を持って感じる事が出来る社会になってほしいと思います。

将来、変化していく社会情勢の中でも、思いやりと助け合いの精神をもち、経済的に自立ができるように懸命に働き、納税の義務を果たす人間になり、大きな社会を支える一員になりたいと思います。大切な「命」が救われ、命のリレーが続くように…。

少子高齢化と税金

足立区立第十二中学校 3年 中村 美文

今、日本では少子高齢化が進んでいます。この少子高齢化は、税金とはあまり関係がないように思われがちですが、実はこの二つには深い関係があると私は思います。

まず、少子高齢化によって起きる問題についてです。この問題というのは、大きく分けて二つあります。

一つ目は、年金や医療・介護などの費用が増えてしまうことです。これは、高齢者が増えることによって起こります。

二つ目は、費用を負担する働き手が減り、働き手の負担が重くなっていてしまうことです。

少子高齢化が進むと、このような問題が起きてしまうのです。

次に、このような問題と税金には、どのような関係があるのかについてです。

一つ目の、年金や医療・介護などの費用が増えてしまうという問題。この、年金や医療・介護などに必要なお金は、全て税金が使われています。つまり、高齢者が増えれば増えるほど、必要な税金も増えてしまうことになるのです。

二つ目の、費用を負担する働き手が減り、働き手の負担が重くなっていてしまうという問題。少子化が進む今、近い将来の働き手となる子供の出生率は急激に下がっています。高齢者の生活を支える若い世代が減っていてしまうのです。この現象は、私たちにとって大きな問題となっています。

要するに、必要な税金は増えているのに、それを負担する働き手は減っているということになります。それによって、働き手の負担は重くなっていくのです。

このようなことから、私は少子高齢化と税金が深く関わっていると改めて思いました。

今の日本では、平成二十六年四月一日から、消費税が八パーセントに上げられました。これは、年金・医療・介護と関係の深い「社会保障」というものが関わっています。日本で消費税が上がったのは、この社会保障の充実・安定化や財政の健全化のためです。高齢化の進展に伴って、社会保障にかかる費用が急激に増加しているのです。

日本では、これからも少子高齢化が進んでいくと予想されています。そのため、平成二十七年十月から消費税率を十パーセントに引き上げることが予定されています。

このように、少子高齢化によって、日本の消費税までもが影響を受けているのです。

このようなことから、私は、日本の財政を健全化するためにはまず最初に、少子高齢化を止めるための政策をとるべきだと思います。

「税に支えられて」

小矢部市立石動中学校 3 年 西 航大

僕の住む富山県小矢部市は、人口約三万人の小さな市である。しかし、全国でもトップクラスの水準を備えた制度がある。「こども医療費助成制度」である。

この制度は、小矢部市に住民票があり、健康保険に加入している子どもが、病気やけがなどで医療費を支払わなければならなくなった際、保険診療の自己負担分について、市が全額を助成する、というものだ。市が誇れるのは、対象年齢の幅の広さ。0歳児から就学前までという地域がある一方で、入院・通院ともに、中学校三年生までを保障する。さらに所得制限は、一切ない。

実は、僕は生まれた時からアレルギーの体質だ。一年を通して、眼や鼻、呼吸器に辛い症状が出る。その程度は幸い入院を必要としないが、毎日を健康に過ごすためには、定期的な診察と、薬の処方を受けることが不可欠だ。

母はよく言う。

「うちはこどもが四人、みんなアレルギーやから。この制度があって、本当に助かる。」

僕はこの制度があるから、安心して積極的な治療が受けられるのだと感じた。

ある日、いつものように診察を受けていたら、ふと「この医療費は、一体どこから出ているのだろう」と疑問に思った。この制度の仕組みを学ぶために、市の社会福祉課を訪ねることにした。

見せていただいた資料には、驚くべき統計が載っていた。市の「こども医療費助成事業に掛かる費用は、妊産婦医療費助成事業も含め、年間、「一億千二百十九万円」。その財源の内訳は、「市の一般財源（市税等）」が九千百八十五万円（約八十二％）、「国・県の支出金」が千百六十四万円（約十％）、「その他の財源（高額療養費等）」が八百七十万円（約八％）であった。このことからこの制度は、ほとんど、市や国・県からの「税金」で成り立っていることが分かった。僕は初めて税の果たす重要な役割を感じた。

こんなに身近なところで、税金が使われていたとは。僕は税の恩恵をたくさん受けて、ここまで無事に成長することができた。これから先は僕が、社会で立派に働いて、税を納め御恩返しをする番だと思った。

我が国では少子高齢化が進み、年金、医療、介護などの社会保障に掛かる費用は、どんどん膨らんでいる。「こども医療費助成制度」はこどもの健やかな成長を支援するとともに、子育てしやすい環境を整え、少子化に歯止めをかける手段でもあると思う。

小矢部市はもちろんのこと、全国の自治体で、この制度が功を奏し、勤労者人口が、少しでも増加すればいい。税の納め手が増え、国民みんなが、豊かで安心な暮らしができることを願う。

私と税

犬山市立東部中学校 3 年 小林 諒

税というとほとんどの場合、「税金は納めるもの」と感じている大人が多いのではないのでしょうか。

私は昨年秋、犬山市青少年海外派遣事業に参加し、ドイツの姉妹都市であるザンクト・ゴアルスハウゼン市とハレ市に、八日間行かせてもらうことができました。ホームステイ先でお世話になりながら、現地の学校を訪問し日本文化や犬山の紹介をしたり、学生と交流を深めたり、市庁舎を訪問したりと、とても有意義で貴重な体験をすることができました。

派遣にあたり、費用の多くは犬山市からの補助金で賄われていることを知りました。その補助金はまさしく税金です。「税金で行かせてもらうのだから、しっかり見てきなさい。いろいろなことを学んで来なさい」と父に言われたことを思い出しました。「そうだ。私は税金で行かせてもらっているんだ」と、その時、税金を使う側の人間なのだと気付くと共に、身が引き締まる思いで出発したことを覚えています。

確かに、税金は困窮している人だけに使われるお金ではありません。次の世代を担う人材を育成するために使われることもあるのだということを初めて知りました。

私達が普段何気なく使っている教科書の裏には、「この教科書は、これからを担う皆さんへの期待をこめ、税金によって無償で支給されています」と書いてあります。四月に配られる時に、「これ税金なんだね」と友達と話すことはあるけれど、ずっとお世話になってきた教科書のことを、それ以上深く考えたことはありませんでした。

小学校から今まで、学校生活を支えているのには、多くの税金が使われています。教科書を始め机や椅子も当然ながら、税金で賄われていることに改めて気付かされます。

学校に通うことが、まさに税金を納めている大人達からの、期待を込めたメッセージのように受け止めることができます。見えないところで未来への投資がされているのでしょうか。

両親を始め、多くの大人達が納めているのが税金です。そして、現在の私達は多くの所で、いろいろな税金の恩恵を受けています。私達は、税金の使われ方にもっと関心を持つ必要があるのではないのでしょうか。

消費税のように身近な存在の税もあれば、源泉所得税のように聞いたこともないような税もあります。税は近いようで、遠い存在なのかもしれないと感じます。しかし、いずれは私達に大きく関わることになるのが、税なのです。

私達はまだまだ税のお世話になる立場です。税の役割と目的をしっかりと理解し、大切に使おうと思いました。

支え合う社会永遠に

岡山市立操南中学校 3 年 大塚 千穂

今年の三月末に私の祖父が定年退職しました。そこで私は疑問を抱きました。仕事を辞めるとお金がもらえなくなります。では、これから先はどうやって生活していくのでしょうか。たまたま用事で祖父母の家へ行った時に祖母に聞いてみました。

祖母は「これからは年金で生活するよ。」と言いました。私は年金についてもっと知りたくなったので、さらに詳しく教えてもらいました。

まず、年金とは簡単に言えば「六十五歳になると国からお金がもらえる制度」です。

次に、年金は国からもらえるお金ですが、そのお金は働いている方が支払った年金と税金の一部から賄われています。税金にはたくさんの種類があり、その中で私達の生活に最も深く関係しているのが消費税です。

二〇一四年四月一日に五％から八％に上げられた消費税ですが、これは私達にとって悪いことなののでしょうか。増税した三％の税金は、年金・医療・介護等の福祉に使われるそうです。まさか、年金が消費税に関係があるとは知りませんでした。

私の祖父母は現在、年金をもらっていますが、若い時は、その時の高齢者のために年金を納めていました。だからこそ、今の若い人達も高齢者のために年金を納めるべきなのです。すると自分が高齢者になっても必ず若い人達が年金を納めてくれます。私達の社会はお互いに助け合ってこそ成り立つのです。

では、私達に悪いイメージを与える増税はなぜ行われたのでしょうか。それは、現在の私達は少子高齢化社会だからです。年金を納めるべき若者が少なく、年金をもらうべき高齢者が多いのです。すると当然、今まで通りの税の集め方では上手くいかなくなります。だからこそ、増税する必要があったのです。

もし、消費税が五％のままだと、高齢者一人一人がもらえる年金が少なくなり、高齢者の生活が苦しくなります。若者が豊かな生活を送り、高齢者が苦しい生活を送るなんてことは、あってはならないのです。

人々が助け合う社会こそ日本のいいところです。私は増税した三％は思いやりの三％だと思います。私達が高齢者になると、きっとその恩が返ってくるので、増税はいいことなのです。

私の祖父母は、祖父が退職しても楽しく生活しています。そして、祖母は「年金は本当にありがたい。」と言っていました。私の祖父母を含めた高齢者は若い人達に支えられて生きているのだと思いました。高齢者が生きていくため・私が高齢者になっても生きていくために、私が将来職業についたら、年金を納めたいです。たとえ、消費税がさらに上がっても、子供から高齢者まで、人々が皆楽しく生活できるためなら私は賛成です。いつまでも日本が思いやりのある社会であるために。

税金に支えられている

長崎県立諫早高等学校附属中学校 3 年 内野 里沙子

私はよく、祖母の通院に付き添うことがある。一緒にバスに乗って病院まで行き、私は祖母の診察が終わるまで待合室で雑誌を読んで待ち、診察が終わるとまた一緒にバスに乗って家まで帰るのだ。何度も祖母の通院に付き添ううちに、私はあることに気がついた。それは、祖母は診察にかかったお金や薬の費用を支払っていないということだ。歯医者に行っても、皮膚科に行っても、総合病院に行っても、祖母は医療費を支払わなくてもいいようだ。なぜだろう。祖母が支払わなかった分の医療費は、一体だれが支払っているのだろう。そんな疑問が浮かんできた。

そこで、病院で医療事務の仕事をしている私の母に祖母の医療費について聞いてみることにした。すると母は医療費のしくみについて、私にも分かるよう詳しく教えてくれた。まず、医療費は負担する額が決まっている。年齢や所得で負担する額は違い、私の祖母くらいの年齢の人は、医療費の一割を負担すればいいことになっている。だが祖母の場合、特別に医療費は免除されている。なぜなら、祖母は今から六十九年前に、原爆の被害を受けたからだ。祖母のように原爆の被害を受けた人の医療費は、免除されるしくみになっている。そして、その免除された分の医療費は、国民の税金によってまかなわれている。社会保障費というものだ。祖母の世代の人は、子どもの世代の人が払う税金によって支えられている。そして、私たちの若い世代がこれから払う税金が、私たちの親の世代を支えていくのだ。今の日本は、医療の進歩によって平均寿命がぐんぐんと延び、世界でも高齢化が急速に進んでいる国のひとつだ。この四十年の間に十歳以上も平均寿命が延びている。高齢者がどんどんと増えているのにつれて、少子化も進んでいる。これは日本の大きな問題のひとつである。この問題が引き起こす新たな問題が、社会保障費の問題だ。高齢化が進むに伴い、社会保障費も増加する。しかしそれを負担する世代の人口は減少するから、安定財源の確保のためには、一人あたりの負担額を大きくするしかないのだ。これが日本の重要な課題である。

母から聞いた社会保障費の話は、私の知らないことばかりだった。あまり詳しく知らなかった税金のしくみも、理解すると世の中のしくみが見渡せたような感覚になった。特に高齢者の医療費を若い世代がまかなうというしくみは、国民みんなで支え合っているんだということがよく分かり、嬉しかった。私はまだ税金を払う世代ではない。しかし、なにか物を買う時は消費税を払っている。今年の四月から消費税率八パーセントになったが、私が払った消費税も、社会保障のために使われているかもしれないと思うと、増税もしっかり受け入れて、生活していきたいと思う。日本の支え合いの税金というシステムを誇りに思いたい。

支え合いの税金

大分市立植田西中学校 3 年 田口 優莉亜

「血压も消費税も上がってきたわ。」

この伯父の発言に笑いが起った。

今年のゴールデンウィークに親戚が集まった。この会話をなにげなく聞いていた私だけど、今こうして「税」について考えている。もし今、「あなたにとっての税とは何ですか？」と誰かに聞かれても、すぐに答えれる自信はない。だから私は、まずは身近な「家族」に聞いてみることにした。

まずは母に聞いてみた。

「税か〜。厄介かな。」

私もそう思う。この前、急にコーラが飲みたくなって「百五十円」を持って、家の近くの自動販売機に行った。五百ミリリットルのボトルはなんと「百六十円」だった。手に握っているのは、百円玉と五十円玉。価格表示はあと十円が必要だと言っている。渋々私は、三百五十ミリリットルの缶のコーラを買った。コーラ好きの私としては、かなりショッキングな出来事だった。この時一瞬だけ「税」の存在を不愉快に感じた。こんな体験をした人は私だけではないように思えた。

次に父に聞いてみた。

「税金は、目に見える物から、目に見えない物まで、いろんな事に役立っているんで。」

気になった。「目に見える物」と「目に見えない物」これはネットを使って調べてみた。まずは「目に見える物」から。例えば、公園、公共のトイレ、市役所、図書館、道路、美術館、橋、などである。次に「目に見えない物」だ。例えば、医療費、教育費、などの公共サービスなどがある。私が特に驚ろかされたのは、「教育費」だ。私たち中学生 1 人あたりに年間で約百万六千円も負担がかかっているそう。私のような普通の中学生に年間でこれだけのお金を国がかけてくれていることに今すごく幸せと感謝を感じている。国が私たちに税をもたらししてくれているのではなく、よく考えてみれば、「国民 1 人 1 人が税によって支え合っている」のだと私はこの作文をきっかけに感じた。

「税」によって人に「幸福」をもたらしているからこそ、この日本は豊かな国なのだ。「税」によって日本は「再生」されている。少子高齢化問題に、被災地の復興。「税」によって「明日への希望」を感じている。勉強できる喜び、健康にすごせる感謝。

私の「税」に対する思いが変わった。日本は「税」で支え合い、一人一人の人権が守れている。

今日買った消しゴムが、日本の「明日」をいや、「未来」を変えたのかもしれない。

税と責任

昭和薬科大学附属中学校 3 年 垣花 恵利奈

今、私たちは何不自由なく生活することができる。憲法では生存権が認められ、それに関する多くの社会保障制度が存在する。誰もが教科書を与えられ、教育を受けることができる。しかし私たちは、多くの権利を持つと同時に、義務も負う。その一つが「納税」だ。

中学生である私にとって、「税」とは授業で習う国の仕組みでしかない。税金が国を運営する上で欠かせないもので、私たちの生活に役立てられていることくらいわかっている。消費税だって払っている。それでもやっぱり、私の中の「税」という存在は曖昧で、社会の用語でしかないのだ。

それはたぶん、私が知ろうとしなかったせいだ。私はまだ中学生なんだから、関係ない。心のどこかで思っていたせいだ。

そんな時、この作文の課題が出された。何も知らない私にとって、この課題は税について知るチャンスだった。

表やグラフを見ても知らない言葉ばかりだ。そこでまず、一番身近な消費税を見てみることにした。すると意外にも、歳入の十六パーセントをも占めていた。一人一人が払う税は少ないのに、それが確かに予算として国に納められている。そんなことわかっていたはずなのに、なぜか少し嬉しかった。

また、収入のない私たち子供でも多くの社会保障を受けられるし、教育費も国が負担してくれている。毎年たくさんの教科書が無償で与えられ、学校に通えるのは税を払ってくれる人がいるからだ。

ではそれは誰なのか。消費税以外にも、国を支える税はたくさんある。その中で、特に興味を持ったのは所得税、法人税といった働く人たちが納める税だ。少し前の私なら、働いたのに国に納めるなんてかわいそう、と思っていただろう。それも、収入が多いほど税率が上がるのだから、でも、それは国民間の格差をなくすためになくしてはならない仕組みなのだ。豊かな人だけが幸せに暮らせる世の中なら、税の意味がない。国民それぞれが、幸せに暮らせるために税があるからだ。大人たちが一生懸命働いて納めた税で、私たちは学んでいる。そしていつか、私たちが納めた税が誰かのためになり、さらに若い人たちが年老いた私たちを支えてくれるだろう。こうやって、税はみんなの平等を守っているのだ。

税がなければ国は崩れる。税が正しく使われてこそ、国は安定する。完全な平等なんて誰にもわからないけど、今日本が平和なのは税が平等を保っているからだ。その多くは働く大人たちによって支えられている。

私はただの中学生だ。でももう、中学生だ。あと五年たてば私も成人して大人の仲間入りをする。人によってはもっと早く働く人もいるのだ。大人になるとき、ちゃんと税を納められる人でありたい。そしてその行方をしっかり考えられる大人でありたい。私たちにはその責任がある。